

日 本 語 (11)

中級用



## 表紙の絵の作者

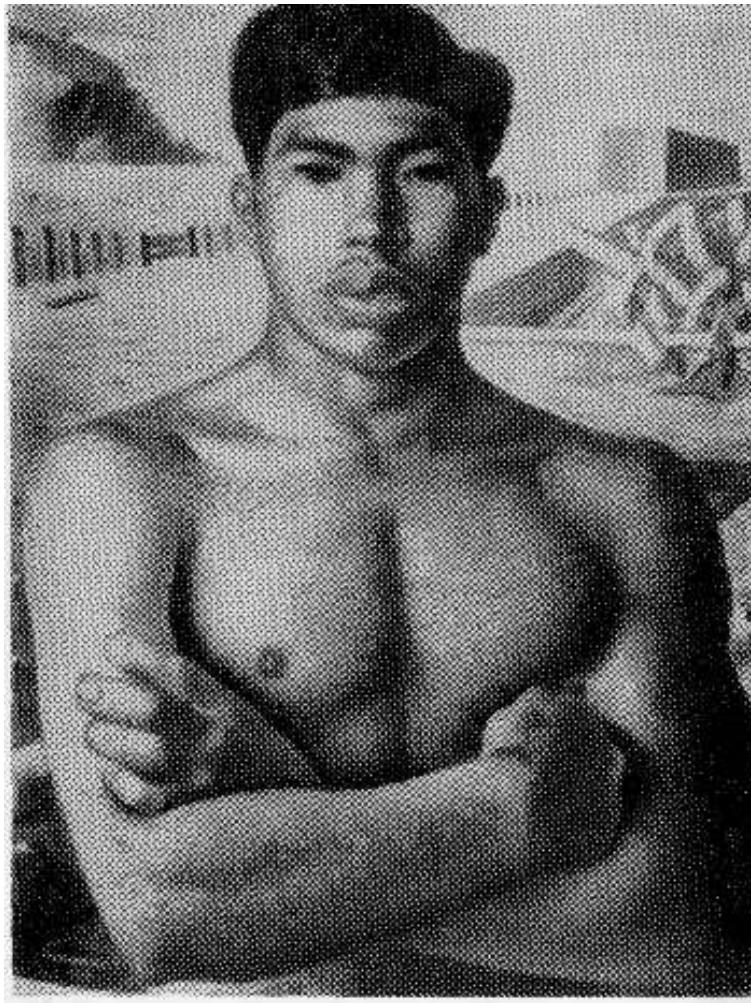
ジ・プレッテ・ダニロ（D i P r e t e D a n

i l o）について

一九一一年、イタリアのピサに生まれた。独学で画家となり、展覧会に出品して、幾つかの賞を受けた。第二次大戦中は”戦いのイタリア芸術家”グループに参加し、戦争をテーマとした作品を発表した。一九四六年、ブラジルに渡来し、最初商業デザインを業としたが、まもなく多くのポスター・コンクールに応募し、前後二三回第一位に入賞した。ヨーロッパで開かれた国際宣伝展にブラジルを代表して出品した。その後再び絵画に立ち戻り、一九五年、サンパウロで開催された第一回ビエナルに出品し、第一位を獲得した。一九五七年、一九五九年、と二度パウリスタ近代美術展で金メダル受賞。

その後、欧米各国の美術展に出品して多くの賞を受け、ブルジル一流の画家として名声を博している。

(扉のページ)



ポルチナリの絵

## カンジド・ポルチナリについて

(Candido portinari)

カンジド・ポルチナリは、一八〇三年一二月二九日、サン。パウロ州のプロドスキに生まれた。両親はイタリヤ人である。リオ・デ・ジャネイロの美術学校を卒業、画業に専念して、一九二八年、プレミオ・デ・ビジュンを受賞した。そして、ヨーロッパに遊学し、帰朝後、連邦区の大学で美術を講じた。

彼の作品は、藤田嗣治（つぐじ）、シュルリアリスト、ピカソ、イタリアのクアトロセンチスタなどの影響を受け成長したといわれている。ニューヨーク、パリなどで幾度も展覧会を開き南米の傑出した画家の一人として有名になつた。最近の作品は意匠の壮大なことがその特長となつてゐる。ニューヨークの国連本部にある「ドン・ジョン六世、ブラジルに到着」「戦争と平和」の二つの壁画など、そのよい例である。

## 目 次

## 日記を書こう

- 一 誕生日（アンネ・フランクの日記）
- 二 アンネ・フランクのこと
- 三 日記を書きましょう
- 四 中学生の日記から
- 五 敬語を適切に
- 六 漢字とかな

## 文学を味わう

- 一 老舗監とそのむすこ メディヨス・エ・アルブ  
ケルケ
  - 二 坊っちゃん 夏目漱石  
三 安寿と厨子王 森鷗外
- 古典への窓
- 一 鯉になつた話（雨月物語）
  - 二 十両の小判（西鶴諸国咄から） 麻生磯次
  - 三 扇の的（平家物語）

## 詩と民謡

- 一 紙の小舟 ギリエルメ・デ・アルメイダ
- 二 わが子よ 竹内てる代

### 三 日本の民謡

#### 四 民謡について

##### 短歌・俳句

一 古典短歌

二 現代短歌

三 正岡子規について

四 古典俳句

五 現代俳句

六 季語

格言・ことわざ・故事から生まれたことば

一 格言

二 ことわざ

三 故事から生まれたことば

##### 青年期

一 小グループで話し合いを

二 会議

三 青年期

四 悩み

五 強い意志

水泳（歴史と泳法）

夕空晴れて（劇）

知識を深める

一 熱と温度

二 燃焼と爆発

三 磁石と電気

四 機械とエネルギー

五 自動車工場で

## 伝記に学ぶ

一 ラジウムの発見者

二 リンカーン

## 社会への窓

一 ガウショ

二 日本の自然

三 日本の文学

## 詩 数 篇

\* やしの実

\* ローレライ

\* ステンカラージン

\* モーツアルトの子守歌

\* しあわせの歌

\* 故郷の空

\* ぼだい樹

近藤	大和田	石原	堀野	島嶋
朔建	健樹	内敬	上彰	藤崎
風				藤

## 課 外

一 信 号

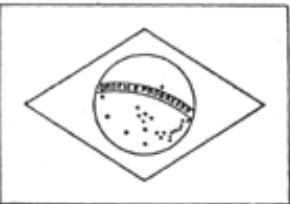
V・M・ガルシン

## 二 モーツアルト

三 ことばのきまり（その一）

## 当用漢字表

（左はブラジル国歌）



### HINO NACIONAL BRASILEIRO

Composição: Maestro Francisco Manuel da Silva  
Letra: Osório Duque Estrada

I

Ouviram do Ipiranga as margens plácidas  
De um povo heróico o brado retumbante,  
E o sol da liberdade, em raios fôlgidos,  
Brilhou no céu da Pátria nesse instante.

Se o pendor dessa igualdade  
Conseguimos conquistar, com braço forte,  
Em teu seio, ô liberdade,  
Desafia o nosso peito a própria morte.

Ó Pátria amada,  
Idolatrada!  
Salve! Salve!

Brasil, um solho intenso, um raiô vivido  
De amor e de esperança à terra devo,  
Se em teu formoso céu, risinho e lindo,  
A imagem do Crucifixo resplandece.

Gigante pela própria natureza,  
És belo, és forte, impávido colosso,  
E o teu futuro espelha essa grandezza:

Terra adorada,  
Entre outras mil,  
És tu, Brasil,  
Ó Pátria amada!

¡Des filhos d'este solo es más gentil,  
Pátria amada,  
Brasil!

Deitado eternamente em berço esplêndida,  
Ao som do mar e à luz do céu profundo,  
Fulgura, ô Brasil, flor do continente,  
Iluminado ao sol do Novo Mundo!

De que a terra mais garrida  
Tres risinhos, lindos campos têm mais filhos;  
"Nossos bosques têm mais vida."  
"Nossa vida", no teu seio, "mais amores".

Ó Pátria amada,  
Idolatrada,  
Salve! Salve.

Brasil, de amor eterno seja símbolo  
O libero que orientas estrada,  
E diga o verde-louro dessa flama  
—Paz no futuro e glória no passado.

Mas, se ergues da justica a clava forte,  
Verás que um filho teu não foge à luta,  
Nem teme, quem te adora a própria morte.

Terra adorada,  
Entre outras mil,  
És tu, Brasil,  
Ó Pátria amada!

Dos filhos d'este solo es más gentil,  
Pátria amada,  
Brasil!



これまでだれにも打ち明けられなかつたことを、全部あなた（日記帳）に打ち明けられることを祈ります。そして、あなたがわたしにとつて、大きな心の支えとなり、慰めとなることを祈ります。（アンネ・フランク）

## 日記を書こう

### 一誕生日

一九四一・六・一四（日）

六月十一日、金曜日、わたしは、六時に目がさめました。それもそのはず、きょうはわたしの誕生日ですもの。でも、もちろん、そんなに早く起きたらしかれますから、じつと好奇心を押えてがまんしていなければなりませんでした。七時十五分前に、とうとう辛抱しきれなくなつて食堂へ行くと、モールチエ（ねこの名、里という意味）が、わたしを暖かく迎えてくれました。

七時を少し過ぎてから、おとうさんとおかあさんの所へ行き、それから居間へ行つて、贈り物の包みをときました。最初に出て来たのは、あなた（日記帳）です。いちばんすてきな贈り物よ。テーブルの上にはばらの花束、植木鉢が一個、ぼたんの花などがありました。あとから、もつ

と花の贈り物が来ました。

おとうさんとおかあさんから いろいろなものをいただきましたが、大勢のお友だちからも 山のような贈り物が来ました。その中には、ヒルデブラントの書いた有名な社会風刺小説「のぞき暗箱」、パーティー用の遊び道具、たくさんのお菓子チョコレート、判じ物、ブローチ、ヨセフ・コーエンの書いた「オランダの物語伝説」、デージーの「山の休日」（すごい本）、それにお金も少しありました。さあ、これで「ギリシアとローマの神話集」を買うことができます。

すてき！

やがて、リースが迎えに来たので、ふたりで学校へ行きました。休み時間中に、みんなにビスケットを分けて上げました。さて、この辺で止めて、さようならをしましよう。あなたとは、大の仲よしになりましたよね。

一九四一・六・一五（月）

きのうの午後、うちでわたしの誕生日のパーティーをやりました。名犬リンチンチンの出演する「灯台守」という映画を見せたら、学校のお友だちは とても喜びました。男の子や女の子が大勢集まって、きょうはとても愉快でした。

リース・ホーセンスとサンネ・ハウトマンは、ずっと以前から、わたしのいちばん仲のいいお友だちでした。その後、わたしはユダヤ人中学校で、ヨーピー・ドウ・バールを知るようになつてから、ふたりはいつもいつもしよで、今は、かの女がわたしのいちばん仲よしのお友だちです。リースはほかの女の子と仲よくなり、サンネは、別の学校に通い、そこで、新しい友だちをつくりました。

### 一九四二・六・二〇（土）

ここ数日、日記をつけなかつたのは、まず第一に、自分の日記について考えてみたかったからです。わたしのようなものが日記をつけるなんて、おかしいと思ひます。というのは、これまで日記をつけたことがなかつた、というわけでなく、わたし自身にしても、まただれにしても、十三歳の女学生の告白なんかに、興味をいだくなどとは考えられないからです。でも、そんなことは問題ではないでしよう？

わたしは書きたいのです。いいえ、それだけではなく、わたしは胸の奥にあるものを、いつさいがつさいさらけ出したいのです。「紙は、人間よりも辛抱強い。」ということわざがあります。少しばかり憂うつなある日、外へ行こうか、うちにいよがを決めるのさえおつくうで、元気がなく、あごに手を当てて、じつと腰かけていたとき、ふと

このことわざを思い出しました。そうだ。紙が辛抱強いことはまちがいない。それに、わたしは男の子にしろ、女の子にしろ、真実の友だちでない限り、だれにもこの日記を見せるつもりはないから、わたしが何を書こうと、気にする人はないでしょう。さて、わたしが、なぜ日記を書き始めるかという根本の問題にきました。それは、わたしには、真実の友がないということです。

十三歳の少女が、この世の中で孤独を感じるなどと信じる人はないでしようし、また事実、そんなはずはないのですから、問題をもつとはつきりさせましょう。わたしには、いとしい両親と十六歳の姉がいます。わたしは友だちと呼べる人を三十人も知っています。わたしには親類があります。なつかしいおじさん　おばさんがいます。りっぱな家もあります。わたしは何一つ不自由していないようです。しかし、いくらお友だちがいても同じです。ただふざけたり、冗談を言い合ったりすることです。わたしは周囲の共通のこと以外に、話す気にはなれません。わたしたちは、ちつとも親しくなれません。これがそもそも困ったことなのです。たぶん、わたしはひとを信頼する気特に欠けているのでしょうか、そう思つても、自分ではどうにもならないのです。

ですから、この日記をつけることにしたのです。わたしは、長い間待っていたお友だちを、自分の心の中で、理想

的な人として描いておきたいので、ひとのようくに、あまりあけすけなことを日記に書きたくありませんが、わたしは、この日記帳を心の友にしようと思います。そして、このお友だちを、キチーと呼びます。



〈アンネたちが住んだ家〉

キチー様

一九四二・六・二二（日）

わたしたちのクラスの者は、みんなびくびくです。間もなく、学校の職員会議があるからです。だれが進級して、だれが落第するかと、うわさとりどりです。ミーブ・ドウ・ヨングは、わたしたちの後ろの席にいるふたりの男の子、ビムとジャックスのことを、とてもおもしろがつています。ふたりは「君は進級するだろう。」「いや、しないだろう。」「いや、大丈夫だ。」と、朝から晩まで、かけをしているので、日曜日のお小使いが一つローリンもなくなるでしょう。ミープが静かにしてくださいと頼んでも、わたしがおこつてどなつても、ききめがありません。

わたしは、クラスの四分の一は落第させるべきだと思います。

わたしは、自分と女のお友だちのことは心配していません。わたしは数学にはあまり自信がありませんが、みんななんとか進級するでしょう。でも、辛抱強く待つているほかありません。それまでは、お互に励まし合いましょう。



〈アンネ・フランク〉

一九四二・九・二二（月）

みんなでわたしのことを話していましたが、結局、わたしは、そんなにバカでもないということになりました。効果てきめん 翌日は、いつもよりよけいに勉強しました。わたしは、十四、五になつて、まだ二学年に残つていたくありません。

わたしは、まだ、ちゃんとした本を読むことを許されていない、ということも話に出ました。まず、わたしは、もつとおとなにならなければなりません。哲学や心理学を知

らないことについて語り合いました——わたしは実際何も知らないのです。

たぶん、来年までには、わたしも もつと利口になるでしょう。

わたしは、この冬に、長そでのドレス一着と、カーディガン三着しかないことに気がついて、あわてました。おとうさんの許しを得て、白い毛糸のジヤンパーを編むことにしました。あまり上等の毛糸ではありませんが、暖かくさえあればいいのです。わたしたちは 友だちの家に、少し着物を預けましたが、困ったことに、戦争が終わるまでは、その人たちに会えないでしよう——そのとき、まだ元の場所にいたとしても。

わたしが、ファン・ダーンのおばさんことを書き終わつたときに、おばさんがはいつてきたので、日記帳をぴしゃりと閉じたら、おばさんは、「アッネ、ちょっとわたしに見せてくれない？」と言いました。「ダメです。」「そんなら、おしまいのページだけね、いいでしよう?」「いいえ、ダメです。」最後のページにおばさんの悪口が書いてあるので、わたしはぎくつとしました。

## 二 アンネ・フランクのこと

アンネ・フランクとその家族は、もとドイツに住んでいました。

ましたが、一九三〇年の初めに、オランダに移住し、そこでしばらく平和な生活をしていました。父は商売を手広くやり、姉のマルゴットとアンネは学校に通っていました。

ところが、第二次大戦がおこつて、オランダがドイツ軍に占領されると、アンネの一家は、ユダヤ人であるために、逃げ出さなければなりませんでした。しかし、行く所もなかつたので、アムステルダムに居残つて、プリセン堀という運河に画した事務所用の古いビルの裏側のへやに隠れ住んでいました。そのとき、アンネは十三歳でした。この隠れ家に、間もなくファン・ダーン親子三人と、デュッセルという歯医者が加わりました。食糧や衣服、書籍などを、乏しい生活の中から、こつそり運んでくれた友人のおかげで、この人たちは、二年間もこの隠れ家に住むことができました。しかし、一九四四年、ついに、ナチスの秘密警察に発見されてしまいました。

アンネの日記が見つけだされたのは、秘密警察の手入れがあつたあとのことでした。この日記は、二か年の隠れ家生活の経験と印象をつづつたものですが、アンネは、機知と鋭い観察力を持つた、ずばぬけて利口な少女でした。かの女は、自分の観察を、いきいきした　おもしろい　人の心を打つ文章で、丁寧に書いています。

隠れ家の八人が、共通のあぶない運命にありながら、仲よ

くできなかつた日常生活、人間の行動と、その矛盾に対する批判などをしています。

この日記の中で、最もよく書けていて、おもしろいのは、アンネが、自分自身のことについて語っているところです。そこには、感受性の強い年ごろの少女の、ものの考え方と意見が、はつきりと表わされています。

アンネは、一九四五年三月、オランダが解放される二か月前に、ベルゲン・ベルゼンの強制収容所で、栄養失調のために死んでしまいました。まだ、十五歳でした。

「アンネの日記は、かの女のりっぱな精神と、これまで平和のために努力し、また、現在努力している人々の精神をたたえるのにふさわしい記念碑である。そして、わたしたちに、豊かな また有益な経験を与えてくれる。」

と、もとアメリカ合衆国大統領の夫人、エリナー・ルーズベルトが、序文で述べています。

### 三　日記を書きましょう

日記とはなんでしょうか。自分の回りのできごとや、心の動きなどを、その日その日に記録したものです。

生命のあるものは、絶えず成長していますし、世界は刻々と変わつて行きます。わたしたち人間も、決してじつ

としていることはありません。過ぎた時間をとり返すことはできません。わたしたちの一生は、一日一日の積み重ねでなりたつてあるわけです。この一日を、自分がどう考え、どう感じ、どんな生き方をしたかを記録しておきたい気持ちから、日記が書き始められたものでしょう。

日記は、人に見せるためでなく、自分のために書くものです。つまり、偽りのない生活と心の記録が日記です。わたくしたちは、一日のうちに、静かに自分を見つめる時間というものは、たいへん少ないようです。日記を書くことによつて、その時間をつくることができます。わたしたちは、他人を偽ることはできても、自分を偽ることはできません。日記を書くときには、裸の自分を振り返つて、ありのままに、偽りなく書くことがたいせつです。日記の中で、人に打ち明けられない悩みを訴えたり、やり場のない憤りをもらしたりすることもできます。ですから、日記を書くということは、一日の生活や心の動きを、もう一度見なおすということになります。自分が正しかったこと、まちがつていたこと、喜びや悲しみ、感動したこと、あるいは、友人や社会の動き、それの中から自分の成長に役立つものを、もう一度選び取るのです。日記を書くことによつて、毎日少しずつでも、生命のかたを身につけていくことができます。これが日記のよいところであり、目に見えない力なのです。

日記を書くのは、とてもおつくうです。「書きたいけど、毎日はどうも続かない。」という人が多いようです。しかし、習慣になつてしまふと、顔を洗つたり、髪を解かすのと同じように、なんでもなくなります。学生時代は、よい習慣をつけるのに、いちばんよい時期です。きょうからでも、日記を書きましょう。今まで書いている人は、更に新しい気持ちで書き続けましょう。日記の持つ、目に見えない不思議な力を、わたしたちの成長のために、ぜひ役立てましょう。

#### 四 中学生の日記から

(A)

○月 ○日 晴

きょうは、山口君と口論して、気持ちがむしゃくしやしている。どちらが悪いかといえば、もちろん山口君だ。ひとの顔を見て、いきなり、「ぼくの陰口をいつたそудだな。陰口をいうのは卑きようだぞ。」といった。そんな覚えはないと言つたのに、かんかんになつてゐる。「だれがそんなことを言つたのか、証人を出してくれ。」といつたら、「言つた。確かに君が言つたんだ。」の一点張りだ。なんの

証拠があつて、あんなことを言うんだろう。悔しいことだ。人を責めるなら、もつと、よく調べてからにするものだ。だれが告げ口したのか知らないが、山口君の陰口など言つた覚えは絶対にない。

山口君は、もつと大人物かと思つていたが、あれでは小人物だ。少し尊敬できなくなつた。

○月 ○日 晴

朝、校門の所で、ぱつたり山口君と顔を合わせた。むつとしていたら、むこうから、につこり話しかけて來た。「きのうは、失敬。ぼくの誤解だつたよ。ごめん。」といつて、ぴょこんと頭を下げた。「いや、分かつてくれたらいいんだ。」とぼくは言つた。心が急にはればれしてきたから不思議だ。深くは聞いてみなかつたが、星野君の話を聞き違えたらしい。

(B)

○月 ○日 曇

新聞で、かわいそうな親子の記事を読んだ。長いことわざらついていた母親が死んで、残された父と三人の子どもは、やつとその日を過ごしていた。ところが、父が自動車

で大げがをして病院にはいり、三人の子どもは、途方にく  
れているということだった。長男は、ぼくと同じで、中学  
二年生だ。小さい弟や妹をかかえて、どうやって暮らして  
いくだろう。家は貧乏で、身寄りもないらしい。それに比  
べ、自分はありがたいなあと、つぐづく思つた。自分の小  
使いを届けようと思つて、父に相談した。家中が賛成し  
て、みんなでお金を出しあうことになつた。ぼくの言いだ  
したことで、少しでも助けてあげられると思うとうれし  
い。

(C)

○月 ○日 晴

あしたは、いよいよ順子ねえさんの結婚式。半年くらい  
前から、いろいろ したくをしてもらつて、ねえさんはと  
ても うれしそうだった。それが、この二、三日、急にさ  
みしそうにしている。

おとうさんも、ねえさんの前では、「めでたい、めでた  
い。」と喜んでいるが、おかあさんの前では、「働き手の順  
子がいなくなるとたいへんだなあ。よくやつてくれたか  
らさみしくなるよ。」と話していた。やつぱりさみしいら  
しい。

小さいときから、順子ねえさんには、ずいぶん世話をなった。学校の宿題もよくみてもらつたし、フエスタやそのほか、いつもわたしについていてくれた。友だちに、「あんたは、いいねえさんがいて、うらやましいわ。」と言われたこともあつた。それに、順子ねえさんは、働き者で、畠の仕事も鶏の世話もよくしていた。

「ほんとうに、ねえさんは偉いなあ。」と思つたことがなん回もあつた。その順子ねえさんと、同じへやで寝るのも、きょうでおしまいかと思うと、泣きたくなるほどさみしい。

こんどは、ねえさんのかわりに、わたしが働かなければならぬのだ。とても、あんなにはできそうもない。しかし、きょう、「和（かず）ちゃん、あとは頼むわよ。」といわれて、「ええ、だいじょうぶ。」といつたのだから、しつかりがんばらなくてはいけない。

あしたのねえさんは、きっとすばらしい花嫁さんになるだろう。

## 五 敬語を適切に

見ず知らずの他人から、道で突然、

「おい、この近くに、郵便局はないかね。」

と聞かれたら、だれだって反発を感じるにちがいない。人にものを尋ねるのに、ことばの上の丁寧さが欠けているからである。ところが、同じことばも、ふだん親しい友人の口から出たものであれば、いかにも親しみのこもったうちとけた表現になる。

逆に、「ちょっとお尋ねしますが、この近くに、郵便局はありませんでしょうか。」という言い方は、通りすがりの他人の場合には適切であっても、友人の場合だと、かえつておかしい。ばか丁寧で、親近感が消え去ってしまうからである。

この二つの言い方を比べてみると、伝達しようとすること柄の内容は、全く同じであるが、使うべき場合が違っている。前者は、うちとけた間柄の友人や、目下の人を相手とする場合にふさわしい表現であり、後者は、初対面の人や、目上の人を相手とする場合にふさわしい表現である。そして、今、述べたとおり、その使い方を取り違えると、同じ言い方も、全く異なった感じになってしまふのである。

ことばのやりとりに際しては、何を言うかだけでなく、いかに言うかがたいせつである。これが、いわゆる「ことば使い」の問題である。そして、それには、たいせつな一つの要素として、敬語を使うか 使わないか、使うとすれば、どの程度に使うか、ということが含まれているのであ

る。

敬語は、他人に対する敬意に基づく表現である。しかし、一口に、敬語といっても、その中には、性質の違った三種のものがある。そして、その使い方が、幾分複雑なため、とかくまちがいが起こりやすい。

まず、話の相手が目上であるような場合、その話し相手に敬意を表して、丁寧に言う言い方がある。たとえば、次の二つの表現を比較してみよう。

小鳥が鳴いている。  
小鳥が鳴っています。

これは、いずれも、「小鳥が鳴いている。」という事実を伝達しようとしているのであるが、後者では、話の相手に対する敬意が、「鳴っています。」「ます」によって表わされている。また、「いいお天気だね。」に対する「いいお天気ですね。」なども、「です」の部分で敬意が表わされている。「この「です」を「(で)ございます。」に置きかえて「いいお天気でございますね。」というと、丁寧さが、更に強くなる。

次に、話の相手に関係なく、話題に上る人が、目上であるような場合に、その話題に上る人や、その人に関係のある事物を敬つて言う言い方がある。たとえば、だれかが、「小林君が歌う。大内先生もお歌いになる。」と言つたとしよう。この場合、客観的には同じ「歌う」という動作であ

る。しかし、話し手にとつて、小林君は友人であり、大内先生は目上であるために、「歌う。」という普通の言い方と、「お歌いになる。」という尊敬の言い方とに分けられるのである。

このように、動作を表わすことばには、普通の言い方と尊敬の言い方とがあり、尊敬の言い方は、たいてい普通の言い方の上に「お」をつけ、下に「になる」また、「お……なさる」をつければよい。しかし、「研究する。」のような漢語でできた動詞は、「ご研究になる。」「ご研究なさる。」のように言う。また、動作に限らず、「ごじょうぶだ。」「お帽子」のように、目上の人々の状態や持ち物などについても、尊敬の言い方が使われる。

第三に、目上の人に対する、目下の人をする動作を言い表わす特別のことばがある。たとえば、「ものを渡し与える。」という動作も、同輩に対する「川田君にやる。」と同じ、目上に対する「先生に差し上げる。」というように、別の表現が用いられる。このようなことばは、動作の向けられる対象となる人を敬つてしているのである。これは、動作をする人の立場を一段低いものとしているという意味で、謙譲の言い方と呼ばれる。「願う。」に対して「お願ひする。」「尋ねる。」に対して「お尋ねする。」と言うのも、この例である。

以上のように、敬語には、話の相手に対する敬語——丁

寧——と、話題に上る人に関する敬語——尊敬と謙譲——一ことがある。

さて、話の相手が話題に上っているその人であって、その人に対する敬語を使わなければならぬ場合は、右の各種類の敬語をうまく照応させて使うことがたいせつである。たとえば、目上の人には「行く意志があるか否か。」とたずねる言い方として、「あなたは、いらっしゃるか。」もまちがいだし、「あなたは行きますか。」も正しい表現ではない。なぜなら、前者は、「あなた」を話の相手として敬つていないことになるし、後者は、動作をする人として、敬つていないことになるからである。従つて、これは当然、「あなたは、いらっしゃいますか。」でなければならぬことばを使つたことが誤りなのである。

もう一つ、敬語の使い誤りとして、多く耳にするものに、尊敬と謙譲との混同がある。たとえば、会議の席上などで、同席の目上の人のことばを利用して発言するとき、「ただいま、北原先生が申されましたように……」などと言ふ人がある。これは、言うまでもなく尊敬の言い方を使つて、「ただいま、北原先生がおつしやいましたように……」、「ただいま、北原先生が言われましたように……」と言ふべきところである。それを、「申す」という、謙譲のことばを使つたことが誤りなのである。

ただし、目上の人に向かつて、自分の身内の者のことを話す場合には、「わたしのおとうさんも、そうおつしやいました。」でなく、「わたしの父も、そう申しました。」のように、その身内的人が、自分より目上であつても、尊敬でなく、謙譲の言い方をすべきである。

以上、敬語に関する一般的な原則を述べたわけであるが、この原則は、すべての場合に、一様に当てはまるとは言えない。なぜなら、敬意をいだく場合には、必ず敬話を使い、その反対の場合には、敬語を使わないというように、簡単に決めてしまうわけにはいかないからである。親近感の強い場合は、たとえ相手に対して敬意をいだいていても、敬語を使わない方が、ぴったりすることさえある。今日、われわれが敬語を使うのは、必ずしも敬意の表現だけではない。特に相手に対する丁寧な言い方は、話をやわらげたり、かどがたたないようにするために使うことが多い。

いつたい、われわれが社会生活を営む上で、他人に接する際の気の持ちようは、必ずしも、すべての人に対して一律なわけではない。敬意を強くいだく場合もあるし、相手との間に一定の距離を保つ気持ちの強い場合もあり、あるいは、親近感のより強い場合もある。いちいち例をあげるまでもなく千差万別である。

このように、われわれの対人感情がさまざまである以

上、その場合場合に応じて、ことば使いにも、さまざまな濃淡を持たせてよいはずである。その場にふさわしい生きたことばというのは、人に対する心の状態と表現とが、うまくつり合っているか否かによつて決まるとさえ言えるだろう。敬語の原則は原則として、理屈では割り切れない人間感情の真実こそ、ことば使いを決定するかぎなのであるといえるのであるまい。

## 六 漢字とかな

今日・世界の各地で使われている文字の種類は、およそ五十余と言われています。これを大別すると、ローマ字などのような表音文字と、漢字などのような表意文字となります。これらの文字は、皆エジプト文字と中国文字の二つに源を発しているのです。日本の文字は、中国文字の系統に属していますが、その中国文字は、どのようにして作られたものでしょうか。

漢字の始めは、古代中国の帝王のひとりである黄帝の時代に、蒼頡（そうきつ）という人が、鳥や獸の足跡を見て作ったと言います。しかし、これはどこまでも伝説であつて、すべての文字が、ある特定のひとりの力でできたものではありません。長い年月の間に、幾人の人の協力

によつて改良されたり、新たに作られたりしたものです。

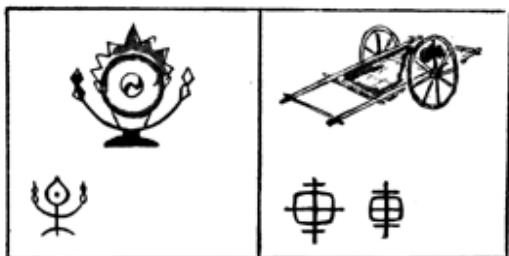
## (イ) 漢字

まず、漢字はどのようにして作られ、また、どのように応用されているかを述べましょう。漢字を考えるとき、よく六書（りくしょ）ということが言われます。それは、次のようなことです。

(一) 象形 (二) 指事 (三) 会意 (四) 形声 (五) 転注 (六) 仮借

(一) 象形、これは漢字の始めで、物の形にかたどつた文字です。これは、漢字全体から見ると数は少しあります。

鳥 川 門 山 木  
鳥 川 門 山 木



(一) 指事、これは形で表わすことのできない事物を表わすのに、図形や記号を用いたもので、この文字もあまり多くありません。

「木」の下に、「一」を加えて「本」としたり、上に「こ」を加えて「末」とし、また「月」の一画を減らして「夕」としたりしています。

(二) 会意、これは、既にできている文字を合わせて作り、別の意味を持たせた文字です。たとえば、晴（日が出て空が青い）、林（木の並んだもの）、休（木のそばに人がいる）、明（あかるい）、曇（くもり）などがそれです。

(三) 形声、諸声とも言います。これは、文字を二つ合わせたもので、一方から意味をとり、一方から音をとつたものです。この点で、形声文字は、表意文字であると同時に、表音文字であるとも言えましょう。漢字の数は、およそ五万と言われますが、この形声文字が大部分を占めています。これに属するものには「銅」「頭」「草」「悲」「匂」「問」のようなものの六種類があります。そして、この形声から、辞書をひくときに必要な、偏、つくり、冠などがでてきたのです。

(五) 転注、本来の意味をほかの意味に活用するやり方です。「樂」のように、もとは音楽を表わしていたものが、音楽が人を楽しませるところから「らく」となつて、音まで変わるもの、また、「好」のように、もとは、美とか、

善とかの意味であつたものが、美や善は人の好むものであるから「このむ」という意味になり、音はもとのまま、というようなものがあります。

(六) 仮借、これは、新しいことばが出てきても、それに当たる文字がないとき、意味に關係なく、ただ同じ音の字を仮りに当てたものです。たとえば、外国語を音訳して、亜米利加（アメリカ）とか、巴里（パリ）とか書くのが、それです。

以上のうち、(四)の類までは、漢字の作り方を説明したものですが、(五)と(六)は、漢字の利用法とも言うべきもので、もちろん、これらは、あとから分類したのであって、初めから、このようなものがあつたのではありません。

## (口) 国字

漢字が日本に伝えられたのは、応神天皇のことと言われています。それから後、日本人は、非常な努力と苦心を払つて、この外来の文字をわがものとし、日本のことばを写したり、更にまた、漢字にならつて、新しい文字を作りました。これが国字と言われるもので、「込（こむ）」、「働（はたらく）」、「畑（はたけ）」などがそれです。

## (ハ) 音

音とは、漢字本来のよみ、つまり、その文字で表わされている中国のことばの音を言います。漢字の音には、吳音、漢音、唐（とう）音（宋（そう）音とも言う）、現代中國音の四種類があります。表で示すと次のようになります。

吳音	漢音	唐音	現代音
行／行状（ぎょう）	行為（こう）	行灯（あん）	行（しん）
請／請文（しよう）	請求（せい）	普請（しん）	請（ちん）
京／東京（きょう）	京阪（けい）	南京（きん）	京（じん）

この四つの音のうち、吳音は、もと中国の揚子江（ようすこう）南部の音で、日本には、朝鮮半島から対馬（つしま）を経て、最も早く伝わりました。漢音は、中国の都が長安（じょうあん）今の陝西省の西安（せいあん）にあつたころ、かの地におもむいた遣唐（とう）使などによつて伝えられた音で、日本では、平安時代に最も多く用いられ、今日でも音のうちでいちばんよく用いられている音です。唐音は、宋元（そうげん）時代の中國音で、主として、中国へ行つた僧侶（そうりょ）や、日本に帰化した中國の僧侶などによつて伝えられました。なお、現代中國音は、日本語にはないから、ここでは省きます。

訓は、漢字の持っている意味に当たる日本語をあてたもので、訓のつけ方について、昔の日本人は、どんなにか苦心したことでしょう。たとえば、「山」「川」「海」「人」「鳥」「獸」「花」「草」「日」「月」など、今でも、そのまま使われているものもあれば、「今日（きょう）」「明日（あした）」「海女（あま）」などのように、当用漢字表にもないものの、また、外国語を当てた「煙草（たばこ）」「洋灯（ランプ）」「麦酒（ビール）」のようなものから、「七夕（たなばた）」「土産（みやげ）」「足袋（たび）」などのように、漢字と訓との関係が、すぐには分からるものもあります。また、一字に多くの違った訓のある場合があります。たとえば、「生（いきる、うまれる、なま、き）」などのようなものから、多くの異なった字に対し、同じ訓のある場合などもあります。

なお、このほかに湯桶（ゆとう）よみといつて、上の「湯」が訓、下の「桶」が音というようなもの、また、重箱（じゅうばこ）よみといって、上の「重」が音、下の「箱」が訓というよみかたをしたものもあります。このように、漢字と訓との関係もなかなか複雑です。

(赤) かたかなとひらがな

漢字が伝えられてからは、漢字をつかって日本語を書き表わしてきましたが、一般に、漢字の画数が多いので、字画を略したり、字体をくずしたりして書くようになつていきました。この字画を略したもののが、かたかなになり、字体をくずしたもののが、ひらがなになつたのです。

言い伝えによると、かたかなは、奈良（なら）時代に吉備真備（きびのまきび）という学者によつて作られ、ひらがなは、平安（へいあん）時代に弘法大師（こうぼうだいし）によつて作られたといいます。しかし、これらもまた、決してひとりの手で作られたものではなく、長い間に大勢の人々のくふうが積み重ねられて、自然に発達したものです。かたかなは、漢字の偏・旁（つくり）・冠など、字画の一部をとつたものです。ひらがなは、漢字の草書体を簡単にしたもので、初めは、もっぱら婦人の間に用いられました。

かなの初めは、万葉集に多く見られるような、いわゆる「万葉がな」で、「阿（あ）（ア）」「伊（い）（イ）」「宇（ウ）」などは、漢字の音を借りたものであり、「卯（う）」「十（そ）」「常（と）」「面（も）」「蟻（あり）（有り）」「梨（なし）（無し）」などは、漢字の訓を借りたものです。

漢字が伝来してからは、しだいに文字の使用にも慣れ、それまでは、ただ人々の暗記にたよって伝えられたものが、こんどは文字によつて記録されるようになりました。また、漢字本来の性質によつて急速にことばの数も増してきました。たとえば、「心」という文字で、「心配」「心理」「心外」「中心」「安心」「苦心」などという熟語が容易に作られました。このような例は、他にも数えきれないほど多いのです。

このように、漢字は非常な造語力を持つていますから、翻訳語にも新語にも、また略語にも大きな働きかけをしています。ただ、漢字が造語に便利なため、やたらに新語を作り出す恐れもたぶんにあります。この点に注意しなければならないと思われます。

わたしたちは、この課を通して、日本語と文字について深く考えてみましょう。

そして、日本語の理解と活用にいつそつう努力したいと思います。

やしの実

島崎藤村

名も知らぬ遠き島より  
流れ寄るやしの実一つ

ふるさとの岸を離れて  
なればそもそも波に幾月  
もとの木は生いや茂れる  
枝はなお影をやなせる

われもまたなぎさをまくら  
ひとり身の浮き寝の旅ぞ

実をとりて胸に当つれば  
新たなり流離の憂い

海の日の沈むを見れば  
たぎり落つ異郷の涙

思いやる八重の潮路を  
いづれの日にか国に帰らん

文学は常に人生を予見する。それは人生を模写しない。人生の意義に合わせて人生を造型するものである。

(オスカーニュワイルド)

## 文 学 を 味 わ う



### 一 老舎監とそのむすこ

メディロス・エ・アルブケルケ

われわれの学校の寄宿舎では、新任の舎監を迎えるということが、重大事なのだが、ラボゾの場合は、なおさらだつた。というのは、前任者のゴメスが、暴力に訴えるような事件をまき起こして辞職した直後だつたからである。「こんどは、どんな舎監がくるだろう。」

われわれは、好奇心を持つて、新舎監の就任を待つてい

た。やがて、新舎監が着任し、舎生との顔合わせがあつた。新舎監の顔を見たとき、われわれは、期せずして、こう思つた。

「この舎監ならだいじょうぶ。思う存分楽しくやろうぜ。」

新任の舎監は、やせた背の高い、そして面長の老人だった。骨ばつた顔全体に薄いひげが生えており、額の広いのが賢明そうであったが、眼は、気弱げであった。

ひどく古ぼけたフロッケコートを着、使いふるしたネクタイをしめていたが、清潔に、きちんとしていたので、なんとなく上品に見えた。われわれは、この第一印象から、さつそく彼に「ラポゾ」(きつね)というあだ名を進呈した。

ラポゾが舎監として就任すると同時に、新たにひとりの生徒が入会した。それは、ラポゾのむすこだったので、「ラポジニヨ」とよぶことにした。黒いひとみ、黒い髪、愛らしく利口そうな少年だった。だが、舎生たちは、彼に対してよそよそしい態度で接した。

ラポジニヨが入舎してまもないころ、八十九番が、みんなの気持ちを代表するかのように、こう言つた。

「やつこさん、おやじのスパイだぜ。」

だが、こうした舎生の当て推量は、全くの見当はずれだつた。ラポジニヨがわれわれの学友として過ごした五年間

「、その間、彼が寄宿生として、どのような生活をしたか。それを知る者には、はつきりと言えることだ。

ラボゾは、相当な教養の持ち主だった。若いころの彼は、その地方で有力な政党の主要人物で、戦闘的な政治家として知られていた。選挙のときの活動や、議会での駆け引きなどで、頭脳の鋭さを見せた。また、ペソを執つてジャーナリストとしても活躍したものだった。その彼が、どうしたわけか政界から退き、いつとはなく世間から忘れられていった。

政界を去り、ジャーナリズムからも忘れられ、妻には先だたれ、そのうえ職も失つたラボゾは、生活苦にあえぐようになつた。その彼に、むすこがひとりあつた。

彼は、自分の遂げることのできなかつた希望を、むすこの将来にかけていた。しかし、落ちぶれてしまつた彼には、むすこに何もしてやることができなかつた。それは、彼にとって何よりも殘念なことなのだつた。

ラボゾは、役所の門番でもよいから、職にありつけたいと思ひ、若いころの仲間のひとりだつた地区長をたずねていつた。

「えつ、君を門番に……、それはだめだよ。世間がなんというか分からぬからね。そして、それは君の恥であるばかりでなく、わが政党の恥だ。もっとよい職を捜してやるよ。」

それから一週間ほど過ぎたが、地区長からは、なんの連絡もなかった。地区長は、ラポゾのことなど、忘れてしまっていたのだ。彼は、リオ・デ・ジャネイロに行くことを思い立つた。遠い大都会ならば、顔見知りにも、めつたに会うまい。道路工夫をしても、馬車引きになつても、何も言う者はあるまいと考えた。彼は、再び地区長をたずねた。そして、汽車の無料乗車券二枚と、なん人かに当てた紹介状をもらつた。

彼は、わずかな家財を売り払い、むすこを連れてリオ・デ・ジャネイロに行つた。

さつそく就職口を捜したが、地区長の紹介状など、なんの役にもたたなかつた。方方を歩き回り、捜し回つた末に、偶然われわれの学校の舎監という職にありついたのだった。そして、むすこも寄宿生として入舎させ、勉強させることができるようになつたのだった。

ラポジニヨは、心の優しい賢い少年だつた。最初、みんなはスペイではあるまいかと疑い、幾分警戒したが、その疑いはすぐ晴れて、後にはだれからも親しまれた。

いや、だれからもではない。十人くらいで作つてゐる一つのグループからだけは、きらわれた。そのグループというのは、性質のよくない者の寄り集まりで、学校中でのきらわれ者の一団だつた。中でも首領格の六十九番は、特に意地悪であつた。

われわれは、彼のことをフイニヤ（いたち）とよんでいた。

老舎監のラポゾは、むすこに對して、異常と思われるほどの心づかいをした。むすこの迷惑にならないようにと、親子としての会話を一週間も禁じたことがあつた。それは、むすこが学友たちからスペイの疑いを受けぬようにするためだ。また、事件が起こつて、なん人かを処罰しなければならぬとき、ラポゾは、いつも、その、なん人かの中に、むすこを加えた。「むすこをかばつている。」と言われないためだ。

また、失職することで、むすこの勉学が中断されることを恐れたからだ。

ある日、学習時間に、小さな花火を鳴らした者があつた。ラポゾがだれの仕わざであるかを聞きただしだしたが、申し出る者がなかつた。この時、フイニヤが立ち上がつた。「ぼくが知つています。」

「だれかね、それは。」

「ラポジニヨです。」

うそも、はなはだし。花火の音は、ラポジニヨの席の反対の方で起こつたことは、だれもが知つていた。老舎監は、一瞬ためらいを見せたが、悲しそうな、しかし、優しさのこもつた目をむすこに向け、立ちあがることを促した。

とたんに、室内は、フイニヤに対する非難の声でいっぱい

いになつた。ラポジニヨの隣席にすわつていた六十三番が、ものすごい勢いで立ちあがつた。

「うそです。ラポジニヨではありません。犯人はぼくです。」

六十三番は、フイニヤの悪質な行為に對して義憤を感じ、わざと罪をしよつて出たのだった。罰を受けるため、立ちあがつていたラポジニヨほ、六十三番の暖い友情に感動して、急いでさえぎつた。

「いいえ、違います。ぼくがやつたのです。」

そのとき、本当の下手人が立ちあがつて名乗り出た。

こうして、一度に犯人が三人も現われた。舎監は、いつたいだれを処罰するだろうか。われわれは、その成り行きを見守つていた。ラポゾは、立つている三人の顔をひとつたり見回した末、改めてむすこの顔の上に視線を止めた。「いたずらをした者はひとりだけだ。君に違いない。君の行為は、級友に指摘され、君自身も告白している。犯人は君に決まつた。さあ、校長先生の所へ罰を受けに行きなさい。」

ラポジニヨがへやを出て行つた数分後、ベルが鳴つた。われわれは二列に並んで校庭に出た。舎監の号令で列を解くと同時に、六十三番がいきなりフイニヤの横つらをはりとばした。すると、他の級友たちも言い合わせたように、フイニヤを取り囲み、鉄けんの雨を降らせた。

最初、舎生から幾分こばかにされていたラポゾは、だんだん尊敬され、親しまれるようになつていった。これまでの舎監が、なぜ学生から尊敬されなかつたか。その理由の一つに、無知ということがある。ところが、ラポゾは、豊かな知識を持つていて、われわれの学習を公平に、そして親切に助けてくれた。しかし、ただひとり、彼の助力にあづからない者がいた。それはラポジニヨだつた。彼は、むすこの学習を手伝つていると言われないため、助力を与えたなかつた。

この善良で高い知性を備えた舎監を、われわれは心から尊敬していたが、それでも、ちょいちょいいたずらをして、彼を不愉快な目にあわせた。それは、少年たちにとつて、押えることのできない本能的なものというほかはあるまい。

老舎監は、十五日目<sup>ヨ</sup>とに、むすこを連れて外出した。そして、ともに楽しく遊んだり、必要なものを買い与えた。そのため、彼は少ない給料をできるだけたくさん貰え、彼自身は、たいそう質素にしていた。服をいためまいとして、いすに腰かけた時は、背をもたせないし、腰かける音は、必ず新聞紙を敷いた。こうすれば、いくらかでも、ズボンのいたみを防ぐことができるからだ。理髪代を節約して、ナザレ一人のような頭をしていることもあつた。

しかし、どんなに古ぼけた服を着ていても、きちんとブラシとアイロンがかけてあつた。シャツ、ハンカチは、いつも洗たくが行き届いていて、非常に清潔であった。ラボグは、自分自身のみなりや所持品には極端と思われるほど僕約したが、むすこのことには出費を惜しまなかつた。よいみなりをさせ、書物その他の物も不自由のないようにおい与えた。だから、金持ちといふことばに縁の遠いラポジニヨが、金持ちの家の少年たちより、ずっと金持ちの子らしく見えることもあつた。

われわれは、学んだり、いたずらをしてしかられたりしながら、楽しく寄宿舎の生活を続けて、五か年を過ごした。最後の試験もすんと、いよいよ予備科卒業ということになつた。中でも、ラポジニヨの成績は抜群だつた。

年末には、卒業式が行なわれる。卒業式は、型が決まっていて、おもしろくもなんともないものだ。だが、われわれの学校では、この卒業式のとき、証書とともに、生徒ひとりひとりの「フェー・デ・オフィシオ」つまり、全学年の成績簿が贈られることになつてゐる。この成績簿といふのは、一学年に一ページずつ当てられていて、そこに全学年の点数が書き込まれており、その下方に担任教師の署名とはなむけのことばが書いてある。とびらには、校長の写真が載せてあり、最後のページには卒業生の写真が

あつて、書物のような体裁になつてゐる。これは、学生時代の思い出となるもので、実によい贈り物だ。

卒業式の日には、朝から校内に音楽が流れている。校長の訓話と教師たちの祝辞、卒業生代表の謝辞、証書の授与などが行なわれる。この日、校内は生徒の家族でいっぱいになる。美しく着飾つた婦人たちや、フロックコートを着た紳士たちが大勢つめかける。そして、卒業生の家族には、特別席が設けられるので、彼らにとつて、この日は晴れがましい。

卒業証書授与のときは、書記が卒業生の名を呼ぶ。呼ばれた卒業生は、演壇で校長から証書とフェー・デ・オフィシオをいただく。校長は、ひとりひとりにお祝いのことばを述べ、生徒の額に優しく くちびるを触れ、証書とフェー・デ・オフィシオとをわたす。すると、生徒は、もとの席には戻らず、特別席で待ち構えている父母のところへ行き、その腕の中飛び込むのだ。

去年卒業した七十二番は、非常な勉強家であつたが、また、なみはずれたいたずら者だつた。彼は、証書をもらいに行く数分前に、自分の額に にんにくをすりこんでおいた。それ以来、校長はすっかり用心深くなつて、生徒の額にくちびるをつけるのも、ただ、型をして見せるだけになつた。

いよいよ、われわれの卒業式の日がやつて來た。その

日、ラポゾの ほほは、喜びに輝いていたが、数日前までは、むすこのことで頭を痛めていたのだった。むすこに医科大学を受験させることは決まって いたが、さて、この寄宿舎を出たむすこの食事と住まいをどうするか、ということが大問題だつた。このことで彼が思い悩んでいたとき、校長が、むすこを歴史の教師に迎えると言つてくれた。ただし、無給だが宿舎と食事とを給与するということであつた。その代わりに、老舎監の月給を二倍に引き上げるという温情のこもつた処置が講ぜられた。

ラポジニヨが教師になるというニュースは、たちまち全校生徒の間に伝わつた。

生徒たちは、わずか十八歳の先生ということに、おかしさを感じないではいられなかつた。先生といえば 背の高い、そしてひげをはやした いかめしそうな老教授を連想するので、小柄で優しい顔のラポジニヨは、どうも先生ということばとぴつたりしないのだ。

われわれは、いつもの教室で、式の始まるのを待つていった。そこには、もうあと一ヶ月で先生になるはずのラポジニヨもいた。また、そのラポジニヨを、ねたましそうな目でちらちら見て いるフイニヤもいた。そこへ、ラポゾが喜びを顔いっぱいに輝かせてはいつてきて、教壇のいすに腰かけた。彼は、この日のために作った仕立ておろしの服を着ていた。黒いチョッキ、黒のフロックコート、灰色の

ズボン、気のきいたネクタイ、エナメルの探ぐつ、何から今まで新品をそろえ、すきのない服装をしていた。このしゃれた服装のラポゾに、われわれは目を見張つた。

やがて、式の始まる時刻になつた。われわれは、そろつて講堂へ行つた。講堂は、もう父兄や来賓で埋まり、こころよい音楽が流れ、婦人たちの帽子や扇子がゆらめき、芳香が漂つていた。

一同が着席すると、校長を先頭に先生たちが現われ、ずらりと並んで席に着いた。音楽がやみ、書記の司会でいよいよ式が始まつた。まず校長の訓話があり、先生たちの祝辞があつて、そのあとで、ラポジニヨが教師就任のあいさつをした。あいさつの内容は、ごく普通のものであつたが、壇上に立つた彼は、なんとなく氣高く見えた。そして、その若々しい口調は、みんなの心を引きつけるものを持つていた。

彼のあいさつが終わると、われわれは、盛んに拍手を送つた。それから、いよいよ証書とフェー・デ・オフィシオの授与のときになつた。

最初に名を呼ばれたのは、わたしだつた。型どおりに証書を受けとつたわたしは、勝利者のような身ぶりで、父兄席の父の胸に抱かれに行つた。このわたしの要領で、卒業生は次々と証書を受け、式は進行することになつていた。

父の胸の中にいたわたしは、校長が目立たぬように、呼

んでいるのに気がついた。そつと近づくと、校長は、小さな声で言つた。

「すぐ舍監を呼んできてくれ、彼のむすこの番が近づいているから。」

わたしは場内を見回した。どうしたのか、ラポゾの姿は見えない。わたしは廊下に出た。学校の小便や、その辺にいる人に尋ねてみた。

「舍監を見ませんでしたか。もし、舍監を見たら、すぐ講堂に行くようにと言つてください。」わたしは、校内を捲し回つたが、どこにもいなかつた。このまに、ラポゾは、もう講堂に戻つているかも知れないと思い。引き返した。しかし、まだ、ラポゾは姿を見せておらず、校長は仕方なく、ラポジニヨをとばせて、その次の年徒に証書を授与していた。



わたしは、また、あわててラポゾをさがしに出た。「いちばんたいせつなときなのに、ラポゾはいったいどうしたのだろう。」わたしは、寝室や食堂、台所まで捜して歩いたが、どこにもいなかつた。

さんざん探し回つたあげく、わたしは、やつとラポゾを見つけた。それは、講堂と背中合わせの理科室であつた。理科室のとびらには、かぎがかかつており、だれもいないとは思つたが、わたしは、ふと、そのかぎ穴から中をのぞいてみた。すると彼がいるではないか。しかも、彼は脱いだズボンを片手にぶらさげ、理科室と講堂との境にあるとびらのかぎ穴にぴつたりと両をくつつけて、のぞいているのだ。フロックコートを着、右手にブラシ、左手にズボンというかつこうで、かぎ穴をのぞいている舎監の姿は、実に奇妙だつた。

——フイニヤの悪党め！ 最後の日まで、この善良な老舎監をいじめるとは何ごとだ。この日は、どの卒業生の父にも、証書を片手にやつて来る勝利者をだいて、ほめてやる権利があるはずだ。それなのに、ラポゾだけが、奇妙なかつこうで、ひとり理科室に閉じこもり、かぎ穴からしか、その栄光に輝くむすこを見ることができないとは……。——

あとで分かつたことであるが、われわれが、そろつて講堂に行つたとき、フイニヤは、ペンにインキを含ませて持

ち出し、前を行く老舎監のズボンに、こつそりインキを散らしたのだつた。

老舎監は、講堂の入り口で先生たちから注意を受け、初めてそれに気がついた。新調のズボンに、黒いしみが点々と散つていた。そんななかつこうで、式に参列するわけにもいかないので、理科室に閉じこもり、ズボンのしみを洗い落とそうとしたが、なかなか落ちない。そういうしているうちに式が始まつてしまつたのだつた。

講堂では、証書の授与が続けられていつた。そして、最後まで残されたラポジニヨの番になつた。校長は証書を授け、額にくちびるをつけると、彼をみんなの方に向かせ、彼のすぐれた才能と人柄の良さをはめたたえた。そして、いつまでも、姿を見せない彼の父親に代わつて、力強くだいてやつた。そのとき、出席者は、万雷のような拍手を送つて祝福した。

この光景をかぎ穴からのぞき見て、ラポゾは、あまりのうれしさと、わが身の哀れさに涙を流しながら、とびらの向こうに校長とともに立つてゐるむすこの方へ、せつなそうに腕を差し伸べた。

## 二 坊っちゃん

夏 目 漱 石（なつめそうせき）

親譲りの無鉄砲で、子どものときから損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の一階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の一階から首を出していたら、同級生のひとりが冗談に、いくらいばつても、そこから飛び降りる事はできまい。弱虫やーいとはやしたからである。小使に負ふさつて帰つて来たとき、おやじが大きな目をして、一階ぐらいから飛び降りて、腰を抜かすやつがあるかといったから、この次は、抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから、西洋製のナイフをもらつて、きれいな刃を日にかざして、友だちに見せていたら、一人が、光る事は光るが、切れそうもないと言つた。切れぬ事があるか、なんでも切つて見せると受け合つた。そんなら、君の指を切つて見ると注文したから、なんだ指ぐらい、このとおりだと、右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、いまだに親指は手に付いている。しかし、傷あとは死ぬまで消えぬ。庭を東へ二十歩に行き尽くすと、南上がりにいきさか

ばかりの菜園があつて、真中にくりの木が一本立つてい  
る。これは、命より大事のくりだ。実の熟する時分は、起  
き抜けに背戸を出て落ちたやつを拾ってきて、学校で食  
う。菜園の西側が山城（やましろ）屋という質屋の庭続  
きで、この質屋に勘太郎という十三四のせがれがいた。勘太  
郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗り越えて、  
くりを盗みにくる。ある日の夕方、折戸の陰に隠れて、と  
うとう勘太郎をつかまえてやつた。そのとき勘太郎は逃  
げ道を失つて、一生懸命に飛びかかって來た。向こうは二  
つばかり年上である。弱虫だが力は強い。はちの開いた頭  
を、こつちの胸へ当ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の  
頭がすべつて、おれのあわせのそでの中にはいつた。



じやまになつて手が使えぬから、むやみに手を振つたら、そでの中にある勘太郎の頭が、左右へぐらぐらなびいた。しまいに苦しがつてそでの中から、おれの一の腕へ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足がらをかけて向こうへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分くずして、自分の領分へまつさかさまに落ちて、ぐうと言つた。勘太郎が落ちるときに、おれのあわせの片そでがもげて、急に手が自由になつた。その晩 母が山城屋にわびに行つたついでにあわせの片そでも取り返して來た。

この外、いたずらはだいぶやつた。大工の兼公（かねこう）と、さかな屋の角（かく）をつれて、茂作（もさく）のにんじん畑を荒らした事がある。にんじんの芽が出そろわぬところへわらが一面に敷いてあつたから、その上で三人が半日すもうを取り続けにとつたら、にんじんがみんな踏みつぶされてしまつた。古川の持つている田んぼの井戸を埋めて、しりを持ち込まれたこともある。太いもうそのままのふしを抜いて、深く埋めた中から水が沸き出て、そこいらの いね に水がかかる仕掛けであつた。その時分はどんな仕掛けか知らぬから、石や棒ちぎれをぎうぎう井戸の中へ押し込んで水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川がまつかになつてどなり込んで來た。たしか罰金を出してすんだよ

うである。

おやじは、ちつともおれをかわいがってくれなかつた。母は兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やに（いやに）色が白くつて、芝居のまねをして、女形（おんながた）になるのがすきだつた。おれを見るたびに、こいつは、どうせろくなものにはならない、とおやじが言つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言つた。なるほどろくなものにはならない。ごらんの通りの始末である。行く先が案じられたのもむりはない。ただ懲役に行かないで、生きているばかりである。

母が病氣で死ぬ二三日前、台所で宙返りをして、へつついのかどであばら骨を打つて大いに痛かつた。母がたいそうおこつて、おまえのようなものの顔は見たくないというから、親類へ泊まりに行つていた。すると、とうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少しあとなしくすればよかつたと思つて帰つて來た。そうしたら、例の兄が、おれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと言つた。悔しかつたから、兄の横つづらを張つてたいへんしかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、ひとの顔さえ見ればきさまはだめだ、だめだと、口癖のように言つていた。何がだめ

なんだか今に分からない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとかいってしきりに英語を勉強していた。元来、女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一ぺんぐらいの割りでけんかをしていた。あるときしようぎを差したら卑きような待（ま）ち駒（ごま）をして、ひとが困るとうれしそうにひやかした。あんまり腹がたつたから、手にあつた飛車（ひしゃ）をみけんへたたきつけてやつた。みけんがわれて少々血が出た。兄がおやじに言い付けた。おやじがおれを勘当すると言い出した。そのときもう仕方がないと観念して、先方のいうとおり勘当されるつもりでいたら、十年来召し使つているお清（きよ）という下女が、泣きながらおやじにあやまって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじをこわいとは思わなかつた。かえつて、この清という下女に気の毒であつた。この下女は、もと由緒（ゆいしょ）のあるものだつたそつだが、瓦解（がかい）のとき零落して、つい奉公までするようになつたのだと聞いている。だからばあさんである。このばあさんがどういふ因縁か、おれを非常にかわいがつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前にあいそをつかした—おやじも年中持て余している—町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする—このおれをむやみに珍重してくれた。おれは、とうてい人にすかれるたちではないとあきらめて

いたから、他人から木の端のように取り扱われるのではなくとも思わない。かえつて、この清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。

清はときどき台所で人のいないときに、「あなたは、まつすぐでよい『気性だ』」とほめる事がときどきあった。しかしおれには清のいう意味が分からなかつた。いい気性なら清以外のものも、もう少しよくしてくれるだろうと思つた。清がこんな事をいうたびにおれはお世辞はきらいだと答えるのが常であつた。するとばあさんは、それだからよい『気性です』といつては、うれしそうにおれの顔をながめている。自分の力でおれを製造して誇つているよう見える。少々気味が悪かつた。

母が死んでから清はいよいよおれをかわいがつた。時々は、子ども心になぜあんなにかわいがるのかと不審に思つた。つまらない、よせばいいのにと思つた。氣の毒だと思つた。それでも清はかわいがる。折々は自分の小使いで、きんつばや紅梅焼を買っててくれる。寒い夜などはひそかにそば粉を仕入れて置いて、いつのまにか寝ているまくらもとへ、そば湯を持つて来てくれる。時にはなべやきうどんさえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではない。くつたびをもらつた。鉛筆ももらつた。

帳面ももらつた。これはずっとあとのことであるが、金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せといった

わけではない。向こうで、へやへ持つて来てお小使いがな  
くてお困りでしょう。お使いなさいと言つてくれたんだ。  
おれは、無論いらぬと言つたが、ぜひ使えと言うから、  
借りて置いた。実はたいへんうれしかつた。その三円を、  
がまぐちへ入れて、ふところへ入れたなり便所へ行つた  
ら、すぱりと、後架（便所）の中へ落としてしまつた。仕  
方がないから、のそのそ出て来て実はこれこれだと清に  
話したところが、清はさつそく竹の棒を搜して来て、取つ  
て上げますといつた。しばらくすると井戸はたでざあざ  
あ音がするから、出て見たら竹の先へがまぐちのひもを  
引っかけたのを水で洗つていた。それから口を開けて、一  
円札を改めたら茶色になつて模様が消えかかつてゐた。  
清は火ばちでかわかして、これでいいでしようと出した。  
ちよつとかいでみて臭いやと言つたら、それじやお出し  
なさい、取りかえてきて上げますからと、どこでどうぞま  
かしたか札の代わりに銀貨を三円持つて來た。この三円  
は何に使つたか忘れてしまつた。今に返すよといつたき  
り返さない。今となつては十倍にして返してやりたくつ  
ても返せない。

清が物をくれる時には、必ずおやじも兄もいない時に  
限る。おれは、何がきらいだといつて人に隠れて自分だけ  
得をするほどきらいな事はない。兄とは無論仲がよくな  
いけれども、兄にかくして清から菓子や色鉛筆をもらひ

たくはない。なぜ、おれ一人にくれて、にいさんにはやらないのかと清に聞く事がある。すると清はすましたものでお兄いさまは、おとうさまが買ってお上げなさるからかまいませんという。これは不公平である。おやじはがんこだけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし清の目から見るとそう見えるのだろう。全く、愛におぼれていたにちがいない。元は身分のあるものでも教育のないばあさんだから仕方がない。単にこればかりではない。ひいき目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世してりっぱなものになると思い込んでいた。その癖、勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役にはたたないとひとりで決めてしまつた。こんなばあさんに会つてはかなわない。自分の好きなものは必ず偉い人物になつて、きらいな人はきっと落ちぶれるものと信じている。おれは、そのときから別段何になるというりようけんもなかつた。しかし清がなるなるというものだから、やつぱりなんにかなれるんだろうと思つていた。今から考えるとばかばかしい。あるときなどは、清にどんなものになるだろうと聞いてみたことがある。ところが清にも別段の考えもなかつたようだ。

ただ、手車へ乗つて、りっぱな玄関のある家をこしらえるに相違ないと言つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所

になる気でいた。どうか置いてくださいと なんべんも繰り返して頼んだ。おれも なんだかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはして置いた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがおすき、麹町（こうじまち）ですか麻布（あざぶ）ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと 勝手な計画をひとりで並べていた。そのときは家なんか欲しくもなんともなかつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲が少なかつて、心がきれいだと言つてまたほめた。清はなんと言つてもほめてくれる。

母が死んでから五六年の間この状態で暮らしていた。おやじにはしかられる。兄とはけんかをする。清には菓子をもらう。ときどきほめられる。別に望みもない。

これでたくさんだとと思っていた。ほかの子どもも一がいにこんなものだらうと思つていた。清が、何かにつけて、あなたはおかわいそだふ仕合わせだとむやみにいうものだから、それじやかわいそだふ仕合わせなんだらうと思つた。そのほかに苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小使いをくれないのには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中でなくなつた。その年の四月におれは、ある私立の中学校を卒業

する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄はなんとか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家を売つて財産を片づけて任地へ出立すると言い出した。おれはどうでもするがよからうと返事をした。どうせ兄のやつかいになる気はない。

世話をしてくれたにしたところで、けんかをするから、向こうでもなんとか言い出すに決まつていて。なまじい保護を受けければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々のがらくたを二束三文に売つた。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。これは大分金になつたようだが、詳しいことは一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田（かんだ）の小川町（おがわまち）へ下宿していた。清は十なん年いたうちが人手に渡るのを大いに残念がつたが、自分のものでないから、しようがなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続できますものをとしきりにくどいていた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。ばあさんはなんにも知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分かれたが、困つたのは清の行く

先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄のしりにくつづいて九州くんやりまで出かける気は毛頭なし、といつてこの時のおれは、四畳半の安下宿にこもつて、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうすることもできん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと言つたら、あなたがおうちを持つて、奥さまをおもらいになるまでは仕方がないから、おいのやつかいになりましようとようやく決心した返事をした。このおいは裁判所の書記でまず今日にはさしつかえなく暮らしていたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住みなれた方がいいと言つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公替えをして入らぬ氣がねをし直すよりおいのやつかいになる方がましだと思つたのだろう。それにしても早くうちを持ての、妻をもらえの、来て世話をすること言う。親類のおいより他人のおれの方がすきなのだろう。

九州へたつ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい。その代わりあとはかまわないと言つた。兄にしては感心なやり方だ。なんの六百円ぐらいもらわんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡白な処置が気に入つたから、礼を言つてもらつて置い

た。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと言つたから、異議なく引き受けた。二日たつて新橋（しんばし）の停車場で分かれたきり兄にはその後一人も会わない。

おれは六百円の使用法について、寝ながら考えた。商売をしたってめんどうくさくつてうまくできるものじやなし、ことに六百円の金で商売らしい商売がやれるわけでもなかろう。よしやれるとしても、今のようじや人の前へ出て教育を受けたといばれないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強ができる。三年間一生懸命にやれば何かできる。それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来どれもこれもすきでない。ことに語学とか文学とかいうものはまつぶらごめんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行もわからない。どうせきらいなものなら何をやつても同じことだと思つたが、幸い物理学の前を通りかかつたら生徒募集の広告が出ていたから何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてしまつた。今考えると、これも親譲りの無鉄砲から起つた失策だ。

三年間まあ人並みに勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利で

あつた。しかし不思議なもので、三年たつたらとうとう卒業してしまつた。自分でもおかしいと思つたが苦情をいふわけもないからおとなしく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だらうと思つて、出かけて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師がいる。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を言うと教師になる気も、いなかへ行く考えも何もなかつた。もつとも教師以外に何をしようという当てもなかつたから、この相談を受けたとき、行きましょと即席に返事をした。これも、親譲りの無鉄砲がたたつたのである。

引き受けた以上は赴任せねほならぬ。この三年間は四畳半にちつ居して小言はただの一度も聞いた事がない。けんかもせずにすんだ。おれの生涯のうちでは比較的のんきな時節であつた。しかし、こうなると四畳半も引き払わねばならん。生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生といつしょに鎌倉（かまくら）へ遠足したときばかりである。こんどは鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると、海浜で針の先ほど小さく見える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでいるか分からん。分からんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々めんどくさい。

家をたたんでからも清の所へは折々行つた。清のおい  
というのは存外結構な人である。おれが行くたびに、おり  
さえすれば、何くれともてなしてくれた。清はおれを前へ  
置いて、いろいろおれの自慢をおいに聞かせた。今に学校  
を卒業すると、麹（こうじ）町（まち）辺へ屋敷を買つて  
役所へ通うのだなどとぶいちょうした事もある。ひとり  
できめて、ひとりでしゃべるからこつちは困つて顔を赤  
くした。それも一度や二度ではない。折々、おれが小さい  
とき寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。おいは  
なんと思つて清の自慢を聞いていたか分からぬ。ただ清  
は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従  
(しゅう) のように考えていた。自分の主人ならおいの為  
にも主人に相違ないとがてんしたものらしい。おいこそ  
いいつらの皮だ。

いよいよ約束が決まつて、もうたつという三日前に清  
を尋ねたら、北向きの三畳にかぜを引いて寝ていた。おれ  
の来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいつうち  
をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然  
とポケットにわいてくると思つてゐる。そんなに偉い人  
をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのは、いよいよばか  
げている。おれは簡単に当分うちは持たない。いなかへ行  
くんだといつたら、ひじょうに失望した様子で、ごましお  
のびんの乱れをしきりになでた。あまり氣の毒だから、

「行くことは行くがじき帰る。来年の夏休みにはきっと帰る。」と慰めてやつた。それでも妙な顔をしているから「何をみやげに買って来てやろう、何が欲しい。」と聞いてみたら、「越後（えちご）の笹飴（ささあめ）が食べたい。」と言つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違う。「おれの行くいなかには笹飴はなさそうだ。」と言つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です。」と聞き返した。

「西の方だよ。」と言つと「箱根の先ですか手前ですか。」と問う。ずいぶん持て余した。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買つてきた歯みがきとようじと手ぬぐいをズックのかばんに入ってくれた。そんなものはいらないといつてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットホームの上へ出たとき、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て、「もうお別れになるかも知れません。ずいぶんごきげんよう。」と小さな声で言つた。目に涙がいっぱいいたまつている。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣く所であつた。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思つて窓から首を出して振り向いたら、やつぱり立つていた。なんだか、たいへん小さく見えた。

## 夏目漱石



《夏目漱石》

一八六七年一月五日、夏目家の五男に生まれ、金之助と名づけられた。一八八九年、正岡子規（まさおかしき）と知り合い、漱石（そうせき）と号して、子規の句集の批評を書いた。一八九三年、帝国大学英文科を卒業、東京高師、松山中学の英語教師などを経て、第五高等学校の英語講師となる。一九〇〇年イギリスに留学、一九〇三年、帰朝後、帝国大学講師となる。一九〇五年ごろより文筆活動を始める。一九〇七年、教職を退き、朝日新聞に入社し、同新聞に小説を連載する。一九一六年、四九才で世を去つた。代表作として、「吾輩は猫（わがはいねこ）である」「坊っちゃん」「草枕（くきまくら）」「虞美人草（ぐびじん）」などがある。

夏目伸六（漱石の子息）の書いた、漱石解説の中に、「漱石」というペングネームの由来について書いてある。

「元来、漱石といふことばは『流石（さすが）』などというように、中国から伝わつたことばです。昔、中国に孫楚（そんそ）といふ負け惜しみの強い男がいました。年とつて隠居を思い立つたとき、これからは『石に枕して流れに漱ぐ』ような生活をしたい、というところを、ついまちがえて、『石に漱いで流に枕す』といつてしましました。それを友だちの王済（おうさい）が聞きとがめたところ、孫楚は、『流れに枕するというのは、けがれた耳を洗うためであり、石に漱くというのは歯をみがくためだ。』と、こじつけたということです。この故事から取つて号としたのです。」

三 安寿（あんじゅ）と厨子王（すしょう）  
森 鳩外（もりおうがい）

水がぬるみ、草がもえるころになつた。あすからは外の為（し）事が始まるという日に、二郎がやしきを見回るついでに、三の木戸の小屋に来た。「どうじやな。あす、為事に出られるかな。大勢の人のうちには病氣でおるものもある。奴頭（やつこがしら）の話を聞いたばかりでは分からぬから、きょうは小屋小屋をみな見て回ったのじや。」

わらを打つていた厨子王が返事をしようとして、まだことばを出さぬまに、このごろの様子にも似ず、安寿が糸を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それに就いてお願ひがござります。わたくしは、弟と同じ所で為事がいたしどうぞざいます。どうかいっしょに山へやつてくださるように、お取計らいなすつてくださいまし。」青ざめた顔に紅が差して、目が輝いている。

厨子王は、姉の様子が一度目に変わつたらしく見えるのに驚き、また、自分になんの相談もせずにいて、突然しば刈りにいきたいと言うのをもいぶかしがつて、かだ目を見張つて姉を守つている。

二郎は、ものを言わずに安寿の様子をじっと見ている。

安寿は、「外にない、ただ一つのお願いでござります。どうぞ山へおやりなすつて。」と繰り返して言つてゐる。

しばらくして一郎は口を開いた。「この邸では、奴婢（ぬひ）のなにがしになんの為事をさせるということは、重い事にしてあつて、父がみずからきめる。しかし、垣衣（しひ）のぶぐさ）、おまえの願いは、よくよく思い込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きっと山へいかれるようにしてやる。安心しているがいい。まあ、ふたりの幼いものが、無事に冬を過ぐしてよかつた。」こう言つて小屋を出た。

厨子王は、きねを置いて姉のそばに寄つた。「ねえさん。どうしたのです。それはあなたがいつしょに山へ来てくださるのは、わたしもうれしいが、なぜ出し抜けに頼んだのです。なぜわたしに相談しません。」

姉の顔は、喜びに輝いてゐる。「ほんにそうお思いのはもつともだが、わたしだつて、あの人の顔を見るまで、頼もうとは思つていなかつたの。ふいと思い付いたのだもの。」

「そうですか。変ですか。」厨子王は、珍しいものを見るように姉の顔をながめている。

奴頭（やつこ）がしら）がかごとかまとを持つてはいつてきた。「垣衣（しのぶぐさ）さん、おまえに汐（しお）くみをよさせて、しばを刈りにやるのだそうで、わしば道具

を持つて來た。代わりにかけとひさびをもらつていこう。」

「これはどうもお手数（てかず）でございました。」安寿は身軽に立つて、かけとひさびを出して返した。

奴頭は、それを受け取つたが、まだ帰りそうにはしない。顔には一種の苦笑いのような表情が現われている。この男は、山椒大夫（さんしょうだゆう）一家のものの言い付けを、神の託宣をきくようにきく。そこでずいぶん情けない苛酷（かこく）な事も、ためらわずにする。しかし、生得（しようとく）、人のもだえ苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。ものごとが穏やかに運んで、そんな事を見ずにすめば、その方が勝手である。今の苦笑いのような表情は人に難儀を掛けずにはすまぬとあきらめて、何か言つたり、したりする時、この男の顔に現われるのである。

奴頭は安寿に向いて言つた。「さて、いま一つ用事があるて。実はお前さんをしば刈りにやる事は、二郎様が大夫様に申し上げてこしらえなさつたのじや。すると、その座に三郎さまがおられて、そんなら垣衣を大わらわにして山へやれとおつしやつた。大夫様は、よい思い付きじやとお笑いなされた。そこで、わしはお前さんの髪をもううていかねばならぬ。」

そばで聞いている厨子王は、このことばを胸を刺され

るような思いをして聞いた。

そして、目に涙を浮かべて姉を見た。

意外に安寿の顔からは、喜びの色が消えなかつた。「ほんにそうじや。しば刈りに行くからは、わたしも男じや。どうぞこの かま で切つて下さいまし。」安寿は、奴頭の前にうなじを伸ばした。

つやのある長い安寿の髪が、鋭い かま の一かきに、さつくり切れた。

あくる朝、ふたりの子どもは背に かご を負い、腰にかまをさして、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に来てから、ふたりいつしょに歩くのは、これが始めてある。



厨子王は、姉の心を測りかねて、寂しいような、悲しい  
ような思いに胸が一ぱいになつてゐる。きのうも奴頭の  
帰つたあとで、いろいろにことばを設けて尋ねたが、姉は  
ひとりで何ごとかを考えているらしく、それをあからさ  
まには打ち明けずにしまつた。

山のふもとに來たとき、厨子王はこらえかねて言つた。  
「ねえさん。わたしはこうして久し振りでいつしょに歩く  
のだから、うれしがらなくてはならないのですが、どうも  
悲しくてなりません。わたしは、こうして手を引いていな  
がら、あなたの方へ向いて、そのかぶろになつたおつむり  
を見ることができません。ねえさん、あなたは、わたしに  
隠して、何か考えていますね。なぜそれをわたしに言つて  
聞かせてくれないのです。」

安寿は、けさも毫光（ごうこう）〔四方にさす細かい光〕  
のさすような喜びを額にたたえて、大きい目を輝かして  
いる。

しかし、弟のことばには答えない。ただ引き合つてゐる手  
に力を入れただけである。

山に登ろうとする所に沼がある。みぎわには、去年見た  
時のように、枯れあしが縦横に乱れているが、道ばたの草  
には、黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼  
のほとりから右に折れて登ると、そこに岩のすきまから  
清水の沸く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つ

つ、うねつた道を登つて行くのである。

ちょうど岩の面（おもて）に朝日が一面にさしている。安寿は、重なり合つた岩の、風化した間に根をおろして、小さいすみれの咲いているのを見つけた。そしてそれを指さして厨子王に見せて言つた。「ざらん。もう春になるのね。」

厨子王は、だまつてうなずいた。姉は胸に秘密をたくわえ、弟は憂えばかりを抱いているので、とかく受け答えができずに、話は水が砂にしみ込むようになぎれてしまう。去年しばを刈つた木立ちのほとりに来たので、厨子王は足をとどめた。「ねえさん。ここらで刈るのです。」「まあ、もっと高い所へ登つてみましょうね。」安寿は先にたつてずんずん登つていく。厨子王はいぶかりながら付いて行く。しばらくして、雑木林よりはよほど高い、外山の（とやま）頂ともいうべき所に來た。

安寿はそこに立つて、南の方をじっと見てている。目は、石浦（いしうら）を経て由良（ゆら）の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔たつた川向かいに、こんもりと茂つた木立ちの中から、塔の先の見える中山に止まつた。

そして、「厨子王や。」と、弟を呼びかけた。「わたしが久しい前から考え方をしていて、おまえともいつものように話をしないのを、変だと思っていたでしょうね。もう

きょうはしばなんぞ刈らなくともいいから、わたしの言  
うことをよくお聞き。小萩（こはぎ）は伊勢（いせ）から  
売られてきたので、故郷からこの土地までの道を、わたし  
に話して聞かせたがね、あの中山を越して行けば、都がも  
う近いのだよ。筑紫（つくし）へ行くのはむずかしいし、  
引き返して、佐渡（さど）へ渡るのも、たやすい事ではな  
いけれど、都へはきっと行かれます。

おかあさまど（おまえど）いつしょに岩代を出てから、わたしども  
は、恐ろしい人にばかり出会つたが、人の運が開けるもの  
なら、よい人に出会わぬとも限りません。おまえはこれか  
ら思い切つて、この土地を逃げ伸びて、どうぞ都へ上つて  
おくれ。神仏のお導きで、よい人にさえ出会つたら、筑紫  
へお下りになつたおとうさまのお身の上も知れよう。佐  
渡へおかあさまをお迎えに行くこともできよう。かごや  
かまは捨てて置いて、かれいけ「べんとう箱」だけ持つて  
行くのだよ。」「

厨子王は、だまつて聞いていたが、涙がほおを伝つて流  
れてきた。「そして、ねえさん、あなたは、どうしようと  
いうのです。」

「わたしの事はかまわないで、おまえひとりでする事を、  
わたしどといつしょにするつもりでしておくれ。おとうさ  
まにお目にかかり、おかあさまをも島からお連れ申し  
たうえで、わたしを助けに来ておくれ。」

「でも、わたしがいなくなつたら、あなたをひどいめにあわせましよう。」厨子王が心には、焼き印をせられた、恐ろしい夢が浮かぶ。

「それはいじめるかも知れないがね。わたしはがまんして見せます。金で買つたはしためを、の人たちは殺しはしません。たぶんおまえがいなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでしよう。おまえの教えてくれた木立ちの所で、わたしはしばをたくさん刈ります。六荷（カ）までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りましょう。さあ、あそこまで降りて行つて、かごや　かまをあそこに置いて、おまえをふもとへ送つてあげよう。」こう言つて、安寿は先にたつて降りていく。

厨子王は、なんとも思い定めかねて、ぼんやりして付いて降りる。姉はことし十五になり、弟は十三になつていて、が、女は早くおとなびて、その上、ものにつかれたように、さとく　さかしくなつていてるので、厨子王は、姉のことばにそむくことができぬのである。

木立ちの所まで降りて、ふたりは　かごとかまを落ち葉の上に置いた。姉は守り本尊を取り出して、それを弟の手にわたした。「これはだいじなお守りだが、こんど会うまでおまえに預けます。この地蔵様をわたしだと思つて、守り刀といつしょにして、だいじに持つていておくれ。」「でも、ねえさんにお守りがなくては。」

「いいえ。わたしよりはあぶない目にあうおまえにお守りを預けます。晩におまえが帰らないと、きっと討手がかかります。おまえがいくら急いでも、あたりまえに逃げていつては、追い付かれるに決まっています。さつき見た川の上手（かみて）を和江（わえ）という所まで行つて、首尾よく人に見付けられずに、向こう河岸（がし）へ越してしまえば中山までもう近い。そこへ行つたら、あの塔の見えていたお寺にはいつて隠しておもらい。しばらくあそこに隠れていて、討手が帰つて来たあとで、寺を逃げておいで。」

「でも、お寺の坊さんが隠しておいてくれるでしょうか。」「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがおまえを隠してくれましょう。」

「そうですね。ねえさんのきょうおつしやる事は、まるで神様か仏様がおつしやるようです。わたしは考えを決めました。なんでも、ねえさんのおつしやるとおりにします。」

「おう、よくきいておくれだ。坊さんはよい人で、きっとお前を隠してくれます。」

「そうです。わたしにもそうちらしく思われてきました。逃げて都へも行かれます。おとうさまやおかあさまにも会われます。ねえさんのお迎えにも来られます。」厨子王の目が姉と同じように輝いてきた。

「さあ、ふもとまでいつしょに行くから、早くおいで。」

ふたりは急いで山を降りた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持ちが、暗示のように弟に移つていったかと思われる。

泉の沸く所へ来た。姉は、かれいけに添えてある木のまわり「おわん」を出して、清水をくんだ。「これがおまえの門出を祝うお酒だよ。」こう言つて一口飲んで弟に差した。

弟は、まわりを飲み干した。「そんならねえさん、『きげん』よう。きっと人に見付からずに中山まで参ります。」

厨子王は、十歩ばかり残つていた坂道を、一走りに駆け降りて、沼に沿うて 街道に出た。そして大雲川の岸を上手（かみて）へ向かつて急ぐのである。

安寿は泉のほとりに立つて、並木の松に隠れてはまた現われる後ろ影を小さくなるまで見送つた。そして、日はようやく午（ひる）に近づくのに、山に登らうともしない。幸いに、きょうはこの方角の山で、木をきる人がないとみて、坂道に立つて時を過ごす安寿を見とがめるものもなかつた。

後に、はらからをさがしにでた山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼のはたで、小さいわらぐつを一足拾つた。それは安寿のくつであった。

中山の国分寺の三門に、「お寺の正門」たいまつのほか  
が乱れて、大勢の人が込み入つて来る。先に立つたのは、白柄（つか）のなぎなたをたばさんだ山椒大夫のむす  
こ二郎である。

三郎は堂の前に立つて大声に言つた。「これへ参つたの  
は、石浦の山椒大夫がうからるものじや。大夫が使う奴  
(やつこ) のひとりがこの山へ逃げ込んだのを、確かに認  
めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにこ  
こへ出してもらおう。」付いて来た大勢が、「さあ、出して  
もらおう、出してもらおう。」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、広い石畳が続いている。その  
石の上には、今、手に手にたいまつを持った、三郎が手の  
ものが押し合つてゐる。また石畳の両側には、境内に住ん  
でいる限りの僧俗が、ほとんどひとりも残らずむらがつ  
てゐる。これは討手の群れが門外で騒いだとき、内陣から  
も「神社や寺の本堂」庫裡（くり）「寺の台所」からも、  
何ごとが起つたかと怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門をあけいと叫んだとき、あけて  
入れたら、乱暴をせられはすまいかと心配して、開けまい  
とした僧りよが多かつた。それを住持「寺の長」曇猛律師  
(どんみょうりつし) 「徳望の高い僧」があげさせた。しか  
し今、三郎が大声で、逃げた奴を出せと言うのに、本堂は  
戸を閉じたまま、しばらくの間ひつそりとしている。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度くり返した。手のものうちから「おしようさん、どうしたのだ。」と呼ぶものがある。それに短い笑い声が混じる。

ようようの事で本堂の戸が静かにあいた。曇猛律师が自分であげたのである。律师は偏衫（へんさん）「上半身をおおう僧衣」一つ身にまとつて、なんの威儀をもつくるはず、常灯明の薄明かりを背にして本堂の階の上に立つた。たけの高いがんじょうながらだと、まゆのまだ黒いから張りた顔とが、ゆらめく火に照らし出された。律师はまだ五十歳を越したばかりである。

律师は静かに口を開いた。騒がしい討手のものも、律师の姿を見ただけでだまつたので、声は隅々まで聞こえた。「逃げた下人（げにん）を捜しに来られたのじやな。当山では住持のわしに言わずに人はとめぬ。わしが知らぬから、そのものは当山にいぬ。

それはそれとして、夜陰に剣戟（げき）をとつて、多人数押し寄せて参られ、三門を開けと言われた。さては国に大乱でも起こつたか、公の反逆人でもできたかと思うて、三門をあけさせた。それになんじや。御身が家の下人（げにん）の詮議（せんぎ）か。当山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸（か）け、七重の塔には察翰金字（しんかんこんじ）「天皇の直筆の手紙」の経文が納めてある。ここで違うぜきを働くると、国守は検校「社寺の一切の事をつか

さどる職」の責を問われるのじや。また総本山東大寺に訴えたら、都からどのような「さたがあろうも知れぬ。そこをよう思うてみて、早う引き取られたがよからう。悪い事は言わぬ。お身たちのためじや。」こう言つて律师は静かに戸をしめた。

三郎は本堂の戸をにらんで歯がみをした。しかし戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもはただ風に木の葉のざわつくようにささやきかわしている。

この時大声で叫ぶものがあつた。「その逃げたと言うのは十二三の小わっぱじやろう。それならわしが知つておる。」三郎は驚いて声の主を見た。父の山椒大夫に見まがうようなおやじで、この寺の鐘楼守（しゅろうもり）である。おやじはことばをついで言つた。「そのわっぱはな、わしがひるごろ鐘楼から見ておると、築泥（ついじ）「からで屋根をつけたへい」の外を通つて南へ急いだ。かよわいかわりには身が軽い。もうだいぶの道を行つたじやろ。」

「それじゃ。半日にわらべの行く道は知れたものじや。続け」と言って三郎は取つて返した。

たいまつの行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘楼守は鐘楼から見て、大声で笑つた。近い木立の中で、ようよう落ち着いて寝ようとしたからすが二

三羽また驚いて飛び立つた。

あくる日に国分寺からは諸方へ人が出た。石浦に行つたものは、安寿の入水（じゅすい「水中投身」）の事を聞いて来た。南の方へ行つたものは、三郎の率いた討手が田辺まで行つて引き返した事を聞いて来た。

中二日置いて、曇猛（どんみょう）律师が田辺（たなべ）の方へ向いて寺を出た。たらいほどある鉄の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖（しゃくじょう）をついている。あとからは頭をそりこくつて三衣（さんえ）「僧きるきもの」着た厨子王がついて行く。

ふたりは真昼は街道を歩いて、夜は所々の寺にとまつた。山城の朱雀（しゆじやく）野に来て、律师は權現堂に休んで、厨子王に別れた。「守り本尊をたいせつにして行け、父母の消息はきつと知れる。」と言い聞かせて、律师はくびすをめぐらした。なくなつた姉と同じ事を言う坊様だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形（そうぎょう）になつてゐるので、東山の清水寺にとまつた。籠（こもり）堂に寝て、あくる朝日がさめると、直衣（なおし）「きものの名」に鳥帽子（えぼし）「かぶりもの」を着て、指貫（さしぬき）「下ばき」をはいた老人が、まくら元に立つていて言つた。「おまえはだれの子じや。何かたいせつな物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平ゆを祈

るために、ゆうべここに参籠（さんろう）した。すると夢にお告げがあつた。左の格子（こうし）に寝ている童（わらわ）がよい守り本尊を持つてゐる。それを借りて拝ませいと言ふ事じや。けさ左の格子に来て見ればおまえがいる。どうぞ己に身の上を明かして守り本尊を貸してくれい。己は関白師実（もろざね）「役の名」じや。」

厨子王は言つた。「わたくしは陸奥橡正氏と言ふものの子でござります。父は十二年前に筑紫（つくし）の安樂寺へ行つたきり、帰らぬそうでござります。母はその年に生まれたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代（いわしろ）の信夫郡（しのぶく）に住むことになりました。そのうちわたしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後（えちご）まで出ますと、恐ろしい人質に取られて、母は佐渡（さど）へ、姉とわたくしとは丹後（たんご）の由良（ゆら）へ売られました。姉は由良でなくなりました。わたくしの持つてゐる守り本尊はこの地蔵様でござります。」こう言つて守り本尊を出して見せた。

師実（もろざね）は仏像を手に取つて、まず額に当てるようにして礼をした。それから両背を打ち返し打ち返し、丁寧に見て言つた。「これはかねて聞き及んだ、尊い放光王地蔵（ほうこうおうじそう）菩薩（ぼさつ）の金（こん）像じや。百濟（くだら）の国から渡つたのを、高見王が持

仏「居間や身において信心する仏像」にしておいでなされたものに相違あるまい。

これを持ち伝えておるからは、おまえの家柄に紛れはない。仙洞がまだみ位におらせられた永保（えいほう）「白河天皇時代の年号」の初めに、国守の違格（いきやく）「ふつごう」に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏（たいらのまさうじ）が嫡に相違あるまい。もし、還俗「僧の籍をはなれて俗人にかえる」の望があるなら、追つて受領のご無沙汰もあろう。まず当分は己の家の客にする。己といつしょに館（やかた）「貴人の宿所」へ來い。」

関白師実（もうざね）の娘と言つたのは、仙洞にかしづいている養女で、実は妻の姪（めい）である。

この后（きさき）は久しい間病氣でいられたのに、厨子王の守り本尊を借りて拝むと、すぐにぬぐうように本復せられた。

師実は厨子王に還俗させて、自分で冠（かんむり）を加えた。同時に正氏が謫所（たくしよ）「配流されているところ」へ、赦免（しやめん）状「罪を許す手紙」を持たせて、安否を問い合わせに使をやつた。しかしこの使が行つたとき、正氏はもう死んでいた。元服して正道と名乗っている厨子王は、身のやつれるほど嘆いた。

その年の秋の除目（じもく）に正道は丹後の国守にせられた。これは遙授（ようじゆ）の官で、任国には自分で行

かずに、橡を置いて治めさせてるのである。しかし国守は最初の政として、丹後一国で人の売買を禁じた。そこで山椒大夫もことごとく奴婢を解放して、給料を払うことになった。大夫が家では一時それを大きい損失のように思つたが、この時から農作も工匠（たくみ）の業も前に増して盛んになつて、一族はいよいよ富み栄えた。国守の恩人曇猛律师は僧都（そうず）「僧正の次の位」にせられ、国守の姉をいたわつた小萩は故郷へ帰された。安寿がなきあとはねんごろに弔われ、また入水した沼のほとりには尼寺が建つことになつた。

正道は任国のためにこれだけの事をして置いて、特に仮寧（けによう）「休暇」を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

佐渡の国府（こふ）は雜太（さわた）という所にある。正道は、そこへ行つて、役人の手で国中を調べてもらつたが、母のゆくえは容易に知れなかつた。

ある日、正道は思案に暮れながら、ひとり、旅館を出て市中を歩いた。そのうち、いつか人家の立ち並んだ所を離れて、畠中の道にかかつた。空はよく晴れて日があかあかと照つている。正道は心のうちに、「どうしておかあさまのゆくえが知れないのだろう。もし、役人なんぞに任せて調べさせて、自分がさがし歩かぬのを神仏が憎んで会わせてくださらぬのではあるまいか。」などと思ひながら

歩いている。

ふと見れば、だいぶ大きい百姓家がある。家の南側のまばらな生垣の内が、土をたたき固めた広場になつていて、その上に一画にむしろが敷いてある。むしろには、刈り取ったあわの穂が干してある。そのまんなかに、ぼろを着た女がすわって、手に長いさおを持つて、すずめの来てついばむのを追つている。女は、何やら歌のような調子でつぶやく。

正道は、なぜか知らず、この女に心がひかれて、立ち止まつてのぞいた。女の乱れた髪は、ちりにまみれている。顔を見ればめしい である。正道はひどくあわれに思つた。そのうち、女のつぶやいていることばがしだいに耳に慣れて聞き分けられた。それと同時に、正道は、おこり病みのように身内が震つて、目には涙がわいてきた。女は、こういうことばを繰り返してつぶやいていたのである。

安寿恋いしや、ほうやれほ。

厨子王恋いしや、ほうやれほ。

鳥も生（しょう）あるものなれば

とうとう逃げよ、追わずとも。

正道は、うつとりとなつて、このことばに聞きほれた。そのうち臓腑（ぞうふ）が煮え返るようになつて、獣めい

た叫びが口から出ようと/orするのを、歯を食いしばつてこられた。たちまち正道は、しばられたなわが解けたように垣の内へ駆け込んだ。そして、足にはあわの穂を踏み散らしつつ、女の前にうつ伏した。右の手には、守り本尊をささげ持つて、うつ伏したときに、それを額に押し当てていた。

女は、すずめでない大きいものが、あわを荒しに来たのを知った。そして、いつものことばを唱えやめて、見えぬ目でじっと前を見た。そのとき、干した貝が水にほどびる「ふやける」ように、両方の目に潤いが出た。女は、目があいた。

「厨子王。」という叫びが女の口から出た。ふたりは、ぴったり抱き合つた。

森鷗外



〈森 鷗 外〉

一八六二年、静男の長男として生まれ、本名は林太郎（りんたろう）。家は代々医者であった。一八八一年、東京大学医学部卒業。一八八四年、陸軍よりドイツ留学を命ぜられ、ライプチヒ大学に学ぶ。一八八八年帰国、陸軍々医学校教官となり陸軍大学教官をも兼ねる。一八八九年ごろより文筆活動を始め、作品を雑誌などに発表する。一九〇七年、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長となる。一九一九年、帝国美術院長となる。

一九二二年、六〇才で世を去つた。おもなる作品として「阿部（あべ）一族」「山椒大夫（さんしょうだゆう）」「うたかたの記」「雁（かり）」「即興詩人（そつきようしじん）」「高瀬舟（たかせぶね）」などがある。

鷗外（おうがい）の長女の森茉莉（まり）さんは、鷗外について次のように述べている。

「一日でも、何か新しい事を知らずにはいられないほど学問の好きな人で、夫人や子どもたちにも、一日に一字でもいいから、それまで知らなかつた字を覚えようとするようでなくてはいけないと言つていた。死が二、三ヶ月の後に迫つたときにも、仕事をやめませんでした。『自分にとつて、何もしないでいるということは死んでいるのと同じだ。何もしないで、一年長く生きるよりも、仕事をし

て一年早く死ぬ方が、自分には幸福なのだ』と言つていた。

# ローライ

近藤朔風 作詞（訳）

なじかは 知らねど 心わびて  
昔の伝えは そぞろ身にしむ  
わびしく暮れゆく ラインの流れ入り日に山々 赤く  
映（は）ゆる

うるわし少女（おとめ）の いわおに立ちて  
こがねの くひとり 髪の乱れを  
解きつつ 口ずさぶ 歌の声の  
くすしき ちからに 魂（たま）もまよう  
こぎゆく舟びと 歌にあこがれ  
岩根も見やらず 仰げばやがて  
波間に沈むる 人も舟も  
くすしき 魔（ま）が歌 歌うローライ

「時」の歩みは三重である。

未来はためらいつつ近づき、現在は矢のようにはやく飛び去り、過去は永久に静かに立っている。

## 古典への窓

### 一 鯉（こい）になつた話 一 雨月（うげつ）物語一

昔延長（923～930）のころ、三井寺（みいでら）に興義（こうぎ）という僧がいた。絵の巧みなことで名を知られていた。描くのは、仏像・山水・花鳥ではなかつた。寺務のひまを見ては、湖に小舟を浮かべ、綱引（あび）きや、釣（つり）をする漁夫に錢を与え、得た魚をもとの入江に放つて、自由に遊び泳ぐのを見ては描いていた。こうして過ごすうち、ついに巧妙な画家になつた。構想のうちに眠つてしまふこともあつたが、その夢は、入江にはいつて大小さまざまの魚と遊ぶことであった。さめると、夢に見

た魚を描き、それを壁にはつて、夢応の鯉魚（りぎよ）と呼んでいた。この至妙な鯉の絵を、賞でて、求めたい人々がついには群集（くんじゅ）して前後を争うようになつた。僧は、花鳥山水の絵は請うに任せて与えたが、鯉の絵だけは惜しみに惜しんで「生き物を殺し、鮮魚を食う凡俗には法師の養う魚はやれないかもしない。」などと冗談を言つていたと言われる。こうしたうわさは、その絵画とともに天下に知られるようになつた。

ある年、この僧が病気になつて、七日目には、目を閉じ、息が絶えてしまった。

弟子（でし）や友人が嘆き悲しんだが、心頭のあたりが、いつまでたつても暖かだつたのをたよりにして、もしやと思い、病床をめぐつて守り続けた。そのかいがあつたか、手足がやや動き出すと見るや、ため息を吐いて目を開き、さめたとばかり起き上がつた。枕頭（ちんとう）看護の人々に向かい、「人事を忘れて既に久しうなつた。いつたい幾日たつたのか。」と言つたので、衆弟は、

「三日前に息がお絶えになつた。寺中の人々をはじめ、日ごろ睦まじくお話し合いをなさる方々も駆け付けていらっしゃつて、葬儀の事まで、お考えになりましたが、お胸が暖かなので柩（ひつぎ）にも納めず、ずっとお守りしておりました。今、お生き返りなさつたのだ、よかつたよかつたと喜び合つたところです。」と答えると、興義は、う

なずいて、

「だれでもいいから、檀家の平氏の助殿のおやしきに参つて、次のように告げてくれ。『法師は、不思議にも生き返つた。あなたは今、ご酒をくまれ、新鮮ななますをご注文なさつた。しかし、しばらくお酒盛りをやめて、寺へお出かけください。珍しい物語をお聞かせしたいと存じますから』と。」

と言つて、なお、

「お邸の人々の様子を見てきてごらん。きっと、宴会中だろう。」

とつけ加えた。

使いは、さつきまで死んでいたのに先方の様子をよくもこんなに知つているものだと怪しみながら着いて様子を見た。まさしくそれは興義のことば通りであつた。主人の助をはじめ、弟の十郎、家の子の掃守（かもり）などが車座を作つて酒宴まさにたけなわである。三日も人事不省になつていた主人のことばに寸分ちがわないのには驚くばかりであつた。

興義の用件を伝えると、人々は大いに怪しみ、まづはしを置き、助は、十郎と掃守を召し連れて、即刻、寺へ出かけた。

興義は、まくらをあげて来訪の労を謝し、助は興義が蘇生（そせい）の賀詞を述べた。

興「まあ、お聞きください。いつも来る漁師の文四に、さつき、魚を『』注文なさつたでしょう。」

助「あつらえました、あつらえました。どうして『』存じなんです。」

興「文四が、目の下三尺ほどの魚を『』に入れて『』門にはいつたとき、あなたは、弟さんと南面のお座敷で碁を囲んでおられた。掃守さんは、そのそばで大きなももの実を食べながら、おふたりの囲碁を『』らんでした。漁師の文四が、大魚を携えて来たのを喜び合って、高杯（たかつき）食べものをのせる足つきの台のものもを与える、杯を取らせて、三三が九はいお飲ませなさいました。大魚を受け取った料理人は、したり顔でこの魚をな　ますにしましたね、そうでしょう。」

興義の言うことが、一言一言的中しているので、助たちは怪しんだり驚いたりした。同席しないばかりか、死の床にあつた興義がどうして邸内の酒席の様子をこれほど詳知しているのかしらと思つて、そのわけをしきりに尋ねると、興義は、おもむろに語り始めた。それが、次の話である。

わたしは、このごろ病に苦しみ、耐えがたい余り、自分の死んだことも知らず、熱の高いのを少しさまそうと思つて、つえにすがつて門を出る。病も少し忘れたようになり、かごの鳥が雲井に帰る心持になる。山となく里とな

く、行き行いて、また入江のほとりに出る。湖水の縁を見ると、夢心に水あびがしたくなり、そこに衣（ころも）を脱ぎ捨てて、身を踊らせて深みへ飛び込む。あちこち泳ぎ回る。幼いころから水に慣れているわけでもないが、思つが水に浮かぶのは快適だが、魚自身の味わつている快さには及びもつくまいと思うとたんに、魚の遊びがうらやましくなる。かたわらに一匹の大魚が来て、「師の願いはいとやすいことだ。お待ちなさい。」といふかと思うと大魚の姿は深く海底に消え去る。しばらくすると、冠装束の人がその大魚にまたがり、あまたの魚族を引き連れて現れる。そして、「海神の詔をお伝えする。おまえは、かねて放生（捕まえた生き物を生きたまま放してやる）の功德が多い。今、江にはいって魚のように遊躍したいと願つたがそれを許してつかわす。仮に金色鯉魚の服を授け、王府の楽しさを味わわせつかわす。かえすがえすも餌（え）の香にくらませられてはならぬぞ。もし釣針に誘われるとな身を失うぞ。気をつけよ。」と、いうかと思うと見えなくなつた。ふと、身を顧みると、いつのまにやら金光のうろこを備えた鯉魚に化している。尾を振り鰭（ひれ）を動かして心のままに逍遙（しようよう）する。まずは長等（ながら）の山おろし、立ちいる波に身を乗せて、志賀の入江のなぎさに遊ぶ。道行く人は裳裾（もすそ）をぬらし、行

き来の繁(しげ)きに驚かされ、比良の高山影うつす、深い水底(みなそこ)もぐろうと、隠れかねたは堅田(かただ)の浦の漁火(いさりび)「魚をひきよせるための火」。近寄ろうとする浮かれ心が浮かび出る。ぬば玉の夜半(よわ)の水(み)の面(も)に宿る月、鏡の山の峰に澄(す)み、八十(やそ)の港の八十隈(やそくま)「多くの曲りかど」もない月影が美しい。沖津島山・竹生(ちくぶ)島、波にうつろう朱(あけ)の垣には驚くばかり、さしも伊吹(いぶき)の山風に、朝妻船〔琵琶湖東岸入江村朝妻にある渡し舟〕もこぎ出れば、あし間の夢をさまされて、矢橋(やばせ)の渡りする人の水(み)なれ棹(ざお)「使いなれた舟のさお」をのがれるかと思えば、瀬田の橋守には幾たび追われたやら、日が暖ければ浮かび出し、風荒ければ千尋(ちひろ)「尋は一・ハメートル はかりしれない海の底」の底に遊びいる。

そのとき、にわかに飢えを覚え、食べものがほしくなる。遠く近くに餌をあさるが口には入らず。狂い狂つて行くほどに、たちまち文四がたれている釣針に出会う。

餌のにおいが香ばしくただよつて来る。河の神の戒めを守りながら おれは仏弟子、ちょっとは食を離れても、なんで餌など欲しがろう。」と心に言つてそこを去る。しばらくすると、飢えはますます激しくなる。また、戒めを思い返すが、こんどはいよいよ耐えがたい。たとえこの

餌を食べたとて、愚か者につかまるとは限るまい。

もとより文四是知り合つた間柄、なんの遠慮がいるものかと思つたとたんに餌を飲み込んでしまつた。漁夫の文四、早くもおれを引き上げる。「何をする！」と叫んだが、聞かぬ顔。なわはおれの腮（あぎと）「魚のえら」を貫いて、船をあし間につなぐまもなく、おれはかごに押し込まれる。やしきに運ばれる。座敷では、あなたと賢弟、南面（おもて）に碁を戦わす。掃守は菓（このみ）を食いながらの鳥鷺（うろ）「碁の勝負」の観戦。文四が持ち込む大魚を見ると一座は恐えつ至極。わたしはこの時列座の人々に向かつて声を張りあげ、「あなた方は、この興義をお忘れか。お許しなされ、寺へ帰してください。」としきりに叫ぶが、人皆そしらぬ体、ただ手を打つてお喜び。料理人はまず、わたしの両眼を左の指でぐつと捕らえ、右手にとぎました刀を取つて、まな板にいるわたしに、あわやとやいばを突き刺そうとする際です。苦しさのあまり、わたしは大声で「われは仏弟子、仏弟子を害することがあるか！ 助けよ、助けよ。」と叫ぶが 聞き入れぬ。「あっ！ 殺される！」ため息ついて、はね上がつたとたん、「おしようさま、お氣が付かれましたか。」という声に、われに返つた。

人々はこの話を聞くと、皆、感動した。

「あなたのお話をうかがつて分かった。その都度魚の口の

動くのは見たけれど、声は聞こえなかつた。これほどの事をまのあたりに見るとは、なんという不思議なことだらう。」

といつて、召使を家に走らせ、残つてゐるなますを皆、湖に捨てさせた。

興義は、これから病氣全快、年月はるかに、その天寿を全うした。臨終のとき、かいた鯉魚の絵数枚を湖にまき散らしたが、絵の魚は、紙を離れて泳ぎ戯れたという。それで興義の魚は、今、一枚も世に残つてはいない。弟子の成（なり）光が、興義の神巧妙技を伝えたので、今も有名である。閑院御殿（かんいんごてん）の障子（ふすま）に鶏の絵を描いたところが、生きている鶏がこの絵を見て、けつたという。

## 二 十両の小判（大みそかはあわぬ算用）

（西鶴諸国咄（さいかくしょ）こくばなし）から）

かや・かちぐり・松飾り・しだなどの売声も忙しく聞こえて、隣の家ではお正月のもちをついているのに、ここではすす払いもせず、師走（しはす）「十二月の異名」の三

十一日だというのに、ひげもそらずに、朱ざやの刀のそりをうたせて、「春まで待てといふのに、どうしても待たないのか。」と、米屋の若い者をにらみつけて、まっすぐな今の世を横車を押して渡る男がある。その名を原田内助（ないすけ）といつて、この辺に隠れもない浪人「武家時代に主家を去った人」である。広い江戸にも住みかね、この四五年は品川あたりに借家住まいをして、あしたの薪にも不自由をし、ゆうべの油火もともさないやうな始末であった。

そこへもつて来て年の暮である。いよいよ貧乏の悲しさが身にしみ、神田明人の横町で医者をやつている妻の兄の半井（なからい）清庵の所へ無心「金をねだる」の手紙をやつた。たびたびのことでの迷惑には思つたが、ほうつてもおけないので金子を十両包んで、上（うは）書きに、「貧乏の妙薬金用丸（きんようかん）、よろずによし。」と書いて、妹の手もとまで届けた。

内助は喜んで、日ごろ別懇にしている浪人仲間へ、「酒一こん差し上げたい。」と呼びにやつた。折よく夏の夜だつたので興も沸き、これまでこわれ放題にして置いた、しばの戸を開いて、「さあこれへ。」と案内した。合はせて七人の客は、いずれも紙衣（かみこ）のそでを連ねてやつて來た。時節はずれのひとえ羽織を着てゐるのも、どこやら昔を忘れないたしなみが見えた。

一通りのあいさつがすんでから、亭主は座を進めて、「私、」の暮に迫つて存じがけない合力を受け、思ひのままの正月をいたします。」と、一同は、「それは、あやかりものでござる。」という。「それにつきまして、金子の上書きにおもしろい文句がございます。」といつて、さつきの小判【江戸時代の金貨】包みを出して見せると「さてさて、うまいしゃれだ。」と、次々に見て回した。そのうちに盃の数も重なり、「よい年忘れをいたした。すっかり長座をして申しあけない。」と、千秋樂を譜い出して盃を納め、かん鍋（なべ）「酒のかんをするのに使うなべ」・塩辛（しおから）つぼを手送りにして片づけさせ、「小判もまずおしまいください。」といつて、集めて見ると、十両【一両は金貨四匁三分】あつたものが一両不足していった。一同、居すまいをたたし、そでなどを振つて、前後を見回したりしたが、どこからも出て来ないので、いよいよ紛失ということになつた。

すると主人が、「そのうちの一両は、ある所へ支払いましたのに、拙者の考へ違いでした。」といつた。「しかし、たつた今まで確かに十両あつたのに、どうも不思議なことだ。とにかく、みんなで証（あかし）を立てよう。」と、上座の人から帶を解き、二番目の人まで改めた。すると三番目にすわつてゐる男が、透面（じゅうめん）を作つて、しばらく、ものも言わないでいたが、「のときひざを立て

直して、「世間にはこういう難儀もあるものか。私は着物を振つて見せるまでもありません。金子一両持ち合わせているのが、この身の因果と申すもの。思いもよらぬ事で、一命を捨てるものだ。」と、覚悟をきめて言つた。

一座の人々は口をそろえて、「貴殿に限らず、いかに貧乏な浪人だからといって、小判の一両ぐらい、持つまいものでもござらぬ。」と言つた。「いかにも、この金子の出どころは、私が長らく大事にしていた後藤徳乗の小柄（こづか）「腰ざしの外がわにさしそえた小刀」を、唐物（とうぶつ）屋十左衛門方へ、昨日一両二分で売つた金に相違ないのだが、折が折だからいかにも具合が悪い。ふだんご懇意に願つたよしみに、私が自害したあとで、その金子のゆくえをお搜しになつて、せめて死後の恥をすすいでいただきたい、頼む。」と言ひもあえず、刀の柄（つか）に手をかけた。すると、「小判はここにある。」と言つて、丸あんどの陰から、一両投げ出した者があつた。

そうであつたかと、一同、騒ぎを静めて、ほつと胸をなでおろし、「ものには念を入れたがよい。」などと言つてみると、勝手元の方から内儀〔町人の妻、おかみさ〕が声をあげて、「小判はこちらに来ております。」と、重箱のふたをつけたまゝ座敷へ出した。これは宵（よい）に山の芋の煮しめを入れて出したものだが、その湯気で小判がふたにくつついたものであろう。そんな事もありそうしたこと

である。ところが、そうなると小判が十一両になつてしまつた。

みんなは、「この金子がどんどん数がふえるのは、なんとしてもめでたい事じや。」と言つた。亭主は、「九両しかない小判を、十両あると思い違つて、詮議しているうちに、十一両になるというのは、ここにおいでの方々の中に、小判をお持ち合わせの方がおられて、最前の難儀をお救い下さろうとして、お出しになつたに違ひありません。この一両は私の方に納めて置くべき筋合いのものではない。お持ち主へお返し申したい。」と言つたが、だれひとり返事をする者はなかつた。一座は妙に白（しら）けてしまい、夜が更けて鶏が鳴く時分になつても、みんなは座を立ち兼ねていた。

そこで亭主は、「この上は、私の考へ通りにしていただきたい。」と希望した。一同は、「ともかく、ご主人のお心任せにいたします。」と言つたので、亭主はその一両の小判を一升ますに入れて、庭の手水鉢（ちょうずばち）の上に置き、「どなたでもこの金子の持ち主は取つてお帰り下さい。」と言つて、お客様をひとりずつ順々に立たせ、その度ごとに戸をしめ、七人の客を七回に分けて帰した。そのあとで、内助（ないすけ）が手燭（てしょく）をともしますの中を見ると、だれか知らないが持ち帰つていた。主人の当意即妙な分（ふん）別（べつ）といい、場馴れた客

の振舞いといい、いずれもりつばで、さすがに武士のつき  
あいは格別なものである。

(麻生磯次の文による)

(上段)

三 扇 の 的(まと)

沖の方より(沖のほうから)尋常に(りつぱに)かざつた  
る(そなえだてをした)小舟一一隻艘(小舟が一そう)、み  
ぎはへむいて(向いて)こぎ寄せけり。磯へ(水ぎわへ)七  
八段ばかりに(八、九十メートルばかりに)なりしかば  
(なつたので)、舟を横さまにす(舟を横向きにする)。「あ  
れはいかに(あればどうするのかしら)」と見る程に(見て  
いるうちに)、船の(船の)うちより(なかから)よはひ(年  
のころ)十八九ばかりなる(十八九ばかりになる)女房の  
(の)、まことに(まことに)ゆうに(上品で)美しきが(美し  
い人が) 柳のいつつきぬに(柳色の五まいがさねに)、紅  
のはかまきて(くれない色のはかまをつけ)みな紅の扇  
(地がみも骨も紅色の扇で)日(日を)いだしたるを(書き

あらわしたのを)、舟の(舟の)せがいに(へりに)はさみたてて(立てて)、陸へ(陸へ)むいて(向いて)ぞまね(招いひ(い)たる。判官、後藤兵衛実基(ごうとうびょうえさねもと)を(ほうがん源義経が後藤兵衛実基を)召して(よびよせて)、「あれはいかに(あれはどうせよといふのか)」との給へば(おつしやるから)、「射よとにこそ俟めれ。(実基は、「射てみよといふことでございましょう。)

### 三 扇 の 的

沖の方より尋常にかざつたる小舟一艘、みぎはへむいてござ寄せけり。磯へ七八段ばかりになりしかば、舟を横さまにす。「あれはいかに」と見る程に、船のうちよりよはひ十八九ばかりなる女房の、まことにゆうに美しきが柳のいつづきぬに、紅のはかまきて、みな紅の扇の日いだしたるを、舟のせがいにはさみたてて、陸へむいてぞまねひたる。判官、後藤兵衛実基を召して、「あれはいかに」との給へば、「射よとにこそ俟めれ。

○的(マト) めらいあてるめじるしとして立てるもの。○尋常に、りっぱに。○みぎは波のうちよせるあたり。○七八段はむかしの長さの単位、六間、約十一メートルにある。七八段では、八十メートルから九十メートルほどの長さになる。○よはひ(ヨワイ)とし、年令の女房(ニヨウボウ)。貴い人につかえる女、また婦人のこと。○ゆうに。上品な。○美しい人。○柳。表が白、裏が青のかさね色。○いつづきぬ。むかしの婦人のきもの。五枚がさねのきもの。○はかま。上衣の腰に結び腰がぬ内しまで。おおうようにつくたゆつたりしたうわばき。○みな紅(ミナクレナイ)。すべてが紅色のこと。○日いだしたる。日のまるをえがき出した。○せがい。船の部分の名、舟の横に板をわたしてたなのようにしたところ。○判官(ホウガン)。役の名、義経判官といふ。う役だったのことで、義経のこと。○の給へば「言ふ」との敬語。おっしゃると。○候められは「められ」は文語動詞の已然形。めりめるめれと活用する。族は語の下につく敬語。

### (下段)

○的(マト) めらいあてるめじるしとして立てるもの。

○尋常に りっぱに ○みぎは 波のうちよせるあたり。○七八段 段はむかしの長さの単位、六間、約十一メートルにあたる。七八段では、八十メートルから九十メートルから九十一メートルにあたる。

メートルほどになる。○よはひ（ヨワイ）とし、年令○女房（にょうぼう）貴い人につかえる女、また婦人のこと。○ゆうに 上品な ○美しき 美しい人 ○柳表が白、裏が青のかさね色。○いつつきぬ むかしの婦人のきもの。五枚がさねのきもの。○はかま 上衣の腰に結び腰から両あしまべたうわばき。○みかこと。○日いだした  
い 船の部分の名、にしたところ○判官（ホウガン）役の名、義経が判官という役だつたのでここでは義経のこと。○の給へば「言うと」の敬語。おつしやると ○候めれ 「めれ」は文語助動詞の已然形。めり めるめれと活用する。候は語の下につく敬語。



（上段）

ただ大將軍矢おもてに進んで（きっと總大將（ここ）では義経）が矢のとんでくる正面に進むんで）、傾城を（美人を）ごらんぜば（ごらんになると）、手だれに ねらうて（うでまえのすぐれた者を呼び出しねらい） 射おとせとのはかりことと（いおとさせるにちがいないという計略かと）覚え侯（思われます）。さも候へ（きっとそうですよ）、扇を（扇は）ば射させらるべや侯らん（射落とさせなければな

りますまい)。」と申(ともうします)。「射つべき仁は みかたにたれがある(義経が「射落とす」とのできる者は味方に誰かいるか)」との給へば、「上手ども いくらも候なかに(義経は、「うまい老たちはいく人もおりますがその中に)、下(しも)野国(つけの)の住人(つけの国に住んでいる)、那須太郎資高(なすのたろうすけたか)が子(こ)に(の子に)、与一宗高(よいちむねたか)こそ(がおります)小兵(こひょう)で候へども、手続きで候へ(その宗高こそ体は小そう)ざいます(が弓のうでまえのすぐれた者です。)」「証拠はいかに」との給へば、「かけ鳥など(義経が「どんな証拠があるか」とおっしゃるから、実基は、「空をとぶ鳥などは他人と)あらがうて、(射あらそつて)三に一は必ず」三羽に一羽はきつと射おとすもので候(射落とすほどたくみです」とお答えする)」「さらば召せ(義経「それなら呼べ)」とて召されたり。(といわれたので与一は召し出された。)

与一そのころは(そのとき)廿ばかりのおの子なり。(年は二十才ばかりの 男子です。)かちに(全体が濃紺色の所に)あか地(赤地の)錦を(錦で)もつて おほくびと(おおくびと)はた(はた袖と)袖いろえたる直垂(ひたれ)(いろどつたよろいひたれに)に、萌黄(もえぎ)おどしの(もえぎおどしの)鎧(よろい)きて(鎧を着)、足じろの太刀をはき(先が銀色に光つた たちを腰にさ

し)、きりふの矢の、その日のいくさに射て(黑白まだらの鷹の羽作りの矢の、その日のたたかいに射使つて)少々のこつたりけるを(すこし残つたのを)、つたりけるを、かしらだかにおひ(イ)なし(頭より高くつき出してしょい)、うすぎりふに(黒いまだらのうすき色に) 鷹(たか)の羽はぎませたる(たかのはねをませ合わせた)ぬた目のかぶらをぞ(波もようのある鹿の角で作つたかぶらふに) 差し添へたる。(下の注を見よ) を差しそえている。しげどうの弓、脇にはさみ、甲を(どうをしげく巻いた弓をわきにはさんで かぶとを)

(下段)

○ただ こればかり、ひたすら、ただただ ○大將軍 全軍のしきをする人。総大将。○矢おもて 矢がとんでくる正面。○傾城(ケイセイ) 美人 ○手だれ 手足(テダリ)からかわってきた語。うできき。うでまえのすぐれている人。○ねらうて ねらつて。目じるしをきめてうかがい見る。○覚え候 思われます。○さも候へ たとえそうでありますようにとも。○射させらるべう いさせるべき ○候らん ありましよう。○仁(ジン) ひと ○たれかるだれかいるか。○上手(ジョウズ) ども たくみなも のたち ○いくらも候なかに いく人もおります中に。○下野国(シモツケノクニ) 東京の北方、今の栃木県あた

り。○住人（ジユウニン）その地に住んでいる人。○小兵（コヒヨウ）体が小さいこと。○侯ヘどもですがの敬語。でございますが。○手書き 手のきくこと。うでまえのすぐれていること。○かけ鳥 空をとんでいる鳥。○あらがう あらそう ○三に二（ミツニフタツ） 三つのうち一つ。○もので候 ものでございます。○召せ よびよせる ○廿（ニジユウ）二十才 ○おの子 男 ○かちこいあいいろ ○あか地 あかい織りもの地はだ。○錦（ニシキ） いろいろの染糸でさまざまの模様を織り出した地質の厚い絹布。○おほぐび 前えり今おくみという。○はた袖 そでを長くするために、そでのはしに更に半ばばにつけたした袖。○いろえたる いろどつた ○直垂（ヒタタレ） むかしのいっぱい人のきもの。こここの直垂はよろいの下にきたよろいひたたれである。○萌黄（モエギ） 黄と青との間の色。○おどし 鉄又は草で作った小さな板をうろこのようにたくさんならべ重ね、糸か革でよろいにつづり作ること。こうして作ったよろい。材料によつて糸おどし・革おどし・あやおどし・ねりぬきおどしなどがあり、つづり方によつて、あら目・けひき・すかけなどがあり、色によつて、ひおどし・小桜おどし・黒革おどし・うの花おどし・むらさきすそおどし・もえぎおどしなどがある。○鎧（ヨロイ） 武具、むかし戦時にきる衣。○足じろの太刀（アジロノタチ） 足を銀でかざつ

たかたな。○はき 腰につける。○きりふ たかなどの羽の黒と白のまだらの矢羽根。○かしらだか 頭より高くつき出るさま。○うすぎりふ 黒い斑（フ）のうすいもの。○はぎませたる ませあわせに矢竹につける。○ぬた目鹿のつのある波のようなもよう。○かぶら 角（つ）又は木で作り、球状にして中を空にし数個の穴をあける。先にかぶらをつけた矢かぶら矢。○しげどうの弓 弓の幹を膝（トウ）で繁（しげ）く巻いたもの。○甲（カブト） むかし戦争のときかぶつた頭部をおおう武具。

（上段）

ば脱（ぬ）ぎ、たかひもにかけ（よろいの桐のひもにつるし）、判官の前にかしこまる。（判官義経の前につつしんですわります。）

「いかに宗高、あの扇のまんなか射て（義経が「どうだ宗高、あの扇のまんなかを射て）、平家に見物せさせよかし与一かしこまつて申けるは（平家のものどもに見物させたらいいだろう」とおっしゃると、与一はつっしんで申し上げるには）、「射おはせ供はん事は、不定（ふじょう）に俟。（「扇のために矢を射とおすことはたしかにはきめられません、）射損じ候なは、ながき味方の御きずにて候べし。（射そこないましたら末の世までの味方源氏のおんきずになります」とぞゞぎいましょう。）一定（たしかに）つかま

つらんずる（射落とす）ことのできる）仁に（者に）仰付けらるべうや侯らん」（おおせつけなさるのが当然で）「ございましょう」と申す。（申します。）判官大いにいかつて（義経はたいそうおこつて）、「鎌倉をたつて（鎌倉を出発し）西国へおもむかん（へ行く）

殿原は、義経が命をそむくべからず。（武士たちは 義経の命令をそむくこと絶対にあいならん。）

少しも子細を存ぜん人は、どうどう「こより（ちつとでもこまかい」とを承知しているものなら 今すぐ「こから）かへらるべし（お帰りなさい）」とぞの給ひける。（とおつしやつた）与一（与一は） 重ねて（もういちど）辞せばあしかりなんとや思ひけん、（おことわりしてはわるいにちがいないと思つたのでしよう）、「はづれんは知りせん候はず、（矢が的をはずれることは存じません）（矢を射て）御足で候へば（ご命令で）ざいますから） つかまつて「こそみ候は（みましよう）」め」とて、御まへ（上）をまかり立ち（と覚悟して、義経の御前から堂々と立ちあがり）、黒き馬の（黒い馬の） ふとう（ふとつて）たくましいに（がつしりしているのに） 小ぶさの（小ぶさの）鞚かけ（しりがいをかけ）、まろばや すつたる鞍置いてぞ（まろばやの（下注を見よ） みがきあげた鞍を置いて）のつたりける（またがりのつた）。弓取りなをし（弓を取りなおし）手綱かいぐり、（たづなをたぐりたぐり）、みぎはく

むひてあゆませければ（波うちぎぎわへ向かつて 歩かせて  
ていつたので）、味方の兵ども後ろをはるかに見送つて  
(みかたのつわものどもは、与一のうしろすがたを遠く見  
送つて)、「ゝの若(「ゝの若もの)

(下段)

○たかひも よろいの胴の上部にあつて胴をつるための  
ひも。○かしこまる おそれつつしんで正しくすわる。○  
せさせよかし させる、そうしてほしい。○射おほせ 射  
はたす。射とげる。○候はん事 ますこと、将来できよ  
うこと。○不定 (フジョウ) 定まらねこと。定めなきこ  
と。○射損じ 射そこなう ○候なば (ソウライナ  
バ) ましたなら、ましたときには。○候べし (ソウロウ  
ベシ) でしょう。○一定 (イチジョウ) ことのたしかに  
定まつてゐる。確定してゐる。○つかまつらんずる つか  
まつることのたしかな、たしかに扇の的に矢をあてるこ  
とのできる。○仁 (ジン) 人 ○候らん ございましょ  
う。○西国 (サイコク) 九州地方を総称する。○おもむ  
く その方に向かつて行く。○殿原 (トノバラ) 男子の  
敬称。○命 (メイ) 命ずること、いいつけ、命令 ○子  
細 (シサイ) こまかなこと。くわしいこと。○とうとう  
とくとく、すみやかに、さっそく ○かへらるべし お

帰りなさい。○の給いける おつしやる。○あしかりなん  
わるいだらう。○はづれん 矢が当たらぬ まとを  
はずれるだらう。○知り候（ソウラ）はず 知つたことで  
はありません。○御足（ゴジョウ） おことば ご命令  
○つかまつて 矢を射て。○み候はめ みましよう。○  
まかり 動詞にかぶせて語勢を強め、けんそんの意をあ  
らわす接頭語。○ふとう ふとつて ○たくましい い  
きおいのさかんな、がんじょうな ○小ぶさ 小がたの  
ふさ。○鉤（シリガイ） 馬具の名。馬の頭・胸・尾につ  
なぐひも、ここでは尾から鞍橋（クラボネ）につなぐひも  
○まろぼや やどり木を丸形に模様化したもの。○  
すつたる うるしに貝をはめこんでみがき出した。○鞍  
(クラ) 馬の背に置いて人や荷物をのせる具。○手綱(タ  
ヅナ) 馬具 くつわに結びつけ乗る人が手にとつて馬を  
御(ギヨ)する綱。○かいくり 手であやつり たぐつて。  
○兵(ツワモノ) 戦場に立つて武器を使う人。

(上段)

者一定つかまつり候ぬと覚え侯」と申ければ(きっと扇の  
的を射落とすにちがいないと思います」と申しましたの  
で)判官も たのもしげにぞ見給ひ(イ)ける。(判官義経  
も たのみになると思って ごらんになりました。)矢ご  
ろすこし遠かりければ、海へ一段ばかり(矢を射るには

まだちつと遠いので 海へ 一段ばかり) うちいたれども(のり入れたが)、なお扇のあほ(ワ)ひ(イ)七段ばかりはあるらんとこ見えたりけれ。(それで自分との間が七段(八十メートル)ばかりありそうに 見えた) ころは一月十八日(ころは 二月十八日の) の酉(とり)の剋(こく)ばかりの事なるに、おりふし北風はげしくて(午後六時ごろのことでもはやうすぐらかつた上にちようどそのときは北風がはげしく)、磯打つ波も高かりけり(海べのいそうつ波も高かつた。)。船はゆりあげゆりする漂へ(エ)ば(船は ゆりあげられ ゆりおろされ 波にただようので)、(扇もくしに定まらずひらめいたり。(扇もさおの先で安定せずひらひらしていた。)

(陸地には源氏のつわものが馬の口を 並べて与一の動勢を見ている。) 沖には平家船を一面に並べて見物す陸(くが)には源氏くつばみを並べてこれを見る。(沖には平家の人々が船を海一両に並べて見物している。) いづれもいづれも(平家も源氏も晴ればれしくないもの) 晴ならず(とはい)といふ事ぞなき。与一、(与一は)、目をふさいで、(目をつぶつて)「南無八幡(まん)大菩薩(ぼさつ)、わが国の神明、日光の權現字(じんげんじ)(「源氏をお守りくださる八幡大ぼさつの神よ、那須の神々よ、日光二荒山の神よ)都宮(つのみや)、那須(なす)のゆぜん(那須にある温泉)大明神(大明神よ)、願わくは(お願いでゞざ

います）あの扇の（もしこの的（マト）を射そこないま  
すならば）まんなか射させてたばせ給へ（エ）。（どうぞあ  
の扇の）これを射そんずるものならば、（まんなかを射させ  
てたまわりますならば）

弓きりおり自害して（この弓を切つて折り、自殺して）、人  
に二たび画（おもて）を向かふ（ウ）べからず。（人には二  
度と顔を会わせません。）を向かふ（ウ）いま一度（もう一  
度）　本国へ（エ）向かへんと（下野の国へ　お迎えくだ  
さると）おぼし召さば、この矢はずさせ給ふ（ウ）な」（お  
考えなさいますなら、この矢をはずさせてはくださいま  
すな」と（と）、心の（心の）うちに祈念して、（うちに祈り  
念じて）、目を見ひらひたれば（目を開けて見ると）、風  
もすこし（風も少し）吹よはり（吹きよわり）、扇も射よげ  
にぞなつたりける（扇も射よさそうになつていました。）。  
与一（与一は）鏑をとつてつがひ（イ）、よつぴいてひやう  
ど放つ。（かぶらをとつて弓のつるにあてがいぐーつと  
ひつぱつて勢いよく放ちました。）小兵（ひょう）といふ  
(ウ)　ぢやう十一束三ぶせ、弓は強し（弓勢は弱いとはい  
いながら矢の長さは十二束三ぶせもあり、それを射る弓  
は強い）、浦響く（浦中へ）

（下段）

兵士　軍人　いくさびと　○一定　たしかに　○つかま

つり候ぬ（ソウライヌ） やりとげた、まとを射とめた。○ 覚え候（オボエソウロウ） 思いました。○ たのもしげたのもしそう たのみになりそう。○ 見給ひける ごらんになつた。○ 矢ごろ 矢を射当てるのに程よいころあい。○ 一段 六間 十一メートル 段は長さの単位。○ うちいれたれど のり入れたが。○ あはひ 自分とのあいだ。○ 七段（シチタン） ○あるらん あるだろう。○ 二月（ニンガツ） ○酉の刻（トリノコク） 酉の時刻、時の名 一昼夜を十二支にくばつて、ま夜中を子（ネ）とし順々にかぞえて午（ウマ）になればまひるとなる。左の表を見てください。 酉の刻は午後六時ごろです。○ ゆりすゑ（エ） ゆれて下にとまる。○ 漂ふ ゆるがせておちつかぬ。○ くし 首、先 ○ くつばみ くつわ、馬の口の中にくわえさせる道具、手づなをつけて馬を御（ギョ）するに使う。○ 南無（ナム） 仏に向かい帰依信順するときつかうことば。○ 八幡（ハチマン） 八幡の神は応神天皇を主座とし、武士のまもり神。神仏まじりあつたのち、菩薩（ボサツ）の称号が奉られた。○ わが国 宗高の生国である下野（シモツケ）の国。○ 神明（シンメイ） 神 ○ 日光の權現宇都宮 日光の一荒山（フタラサン）神社。旧名は宇都宮（ウツノミヤ） 大明神（ダイミヨウジン） ○ 権現（ゴンゲン） 神仏が世の人をすくうために化してこの世に現われること。○ 那須（ナス） のゆぜん大明神 栃木

(トチギ) 県那須郡那須町にある温泉 (ユゼン) 神社。○大明神 神の尊称。○願わくは 願うところは。○たばせ給へ おんたまわらせください。○自害 (ジガイ) し 自ら身をきずつけて死ぬこと。自殺し 自刃し ○両 (オモテ) 顔 ○本国 自分の生まれた国。○おぼし召さばおぼしにめすをそえて、いつそう敬意をつよめていう。○所念 (キネソ) し いのつて、心に念じ。○射よげ 射よさそう。○つがひ 矢を弓づるにあてはめる。○よっぴいて よく引つはって。○ひやうど 射た矢の音。○小兵 (コヒョウ) 弓の勢いの弱いこと。○十二束 (ジュウニソク) 束 (ソク) は矢の長さをはかる度の名。手でひとつにぎり、すなわち親指をのぞいた四本の指の並んだだけのはば。十二束はその十二倍の長さ。○三伏 (ミツブセ) 伏は矢の長さを計る度の名。親指以外の指一本のはば。三ぶせは指三本ならべたはば。

### (上段)

程ながなりして (ひびくばかり長なりして) 、誤たず扇のかなめぎは一寸ばかりを射て (あやまたず扇のかなめぎはを一寸ばかりのところを射) 、ひいふつとぞ射きつたる。(ひゅうふすつといつて扇を射きつた。) 鎧は海へ入りければ (射た鎧は海へはいり) 、扇は空へぞあがりける。(扇は

空へあがつた。) しばしは(しばらく)虚空(扇は空へ)にひらめきけるが(ひらひらしていたが)、春風に「もみ二もみもまれて(春の風に ひともみ ふたもみ もまれて)、海へさつとぞ散つたりける。(海へ さつと 散つて いつた。) 夕日のかゝやいたるに(夕日がかがやいているのに)、みな紅の扇の日いだしたるが(總てが 紅色の扇の日を描がいたのが)、白波の上に漂ひ(イ)(白波の上にゆらゆらし)、浮きぬ沈みぬゆられければ(浮いたり沈んだりしてゆられているので)、沖には平家ふなばたを(沖では 平家が船べりを)ばたをたたいて感じたり(ほめたたえ)、陸(くが)には源氏ゑ(エ)びらを(陸では 源氏がえびらを)たゝいて(たたいて)どよめきけり。(どつと歎声をあげた。)

(本文 平家物語 十一之卷 「那須与一」)

(下段)

○扇のかなめぎは 扇のかなめのあるきわ。かなめは扇の骨をつぐるために 小穴をつらぬいてはめこんだくさび。○一寸(イッスン) 長さの単位。約三センチ強 ○ひいふつと ピューツ プスツと ○虚空(コクウ) 天と地との間の空なところ。そら。○ふなばた 船のふち、ふなべり○ゑびら 矢を盛つて背におう具。○どよめきけり なりひびいた。声をあげてさわぐ。

くちびるに歌を持て  
軽く ほがらかに

自分のつとめ  
自分のくらしに  
よしや苦労がたえなかろうと  
いつも くちびるに歌を持って

### 詩と民謡

#### 一 紙の小舟

ギリエルメ・デ・アルメイダ

雨あがりの すつきりとした  
午後やわらかな風の そよぐとき  
わたしは 舗道に出て遊んだ  
しあわせな少年のころ——

紙を折つて小舟の艦隊をこしらえ  
小さな腕をいっぱいに伸ばして  
水のあふれて いるみぞに流した  
どこというあてもなく――

わたしは青年になつた

あの小舟のことを思うと

わたしの理想は

金の小舟ではなくて

紙で折つた小舟なのだ

それも あの小舟とそつくり同じの……だが 流れ去つ  
たのだ

あの日の 紙の小舟は  
もう かえつてこない

(新ポル語 G u i l h e r m e d e A l m e i d  
a )

二 わが子よ

竹内（たけうち）

てる代

きょうは おまえの誕生日である

風は 大空に荒れているが

日光は こんなにも深い

わが子よ

わたしたちは 別れて十三年たつた

きょう わたしは胸の上の氷袋を捨てる

熱が出なくなつたのではない

出ても 戦いおおせるからだ

世界は その間に数々の変転を示し

地図は 幾たびか塗りかえられた

母は 同じく涙をもてえりを正して

十五 おまえの誕生日を祝う

一の非凡でなくともよい

千の平凡で一生を貫ぬけ

その誕生日の 庭の梅花のごとく

真実のしべを しつかりといだいて生きよ

### 三 日本の民謡

#### 1 木曾（きそ）節

木曾のナー 中乗（なかのり）（一）さん  
木曾の 御岳（おんたけ） さん（二）は ナンジヤラホイ  
夏でも 寒い ヨイヨイヨイ

#### あわしょナー（三） 中乗さん

あわしょ やりたや ナンジヤラホイ  
たびを 添えて ヨイヨイヨイ

#### あわしょナー 中乗さん

あわしょ ばかりは ナンジヤラホイ  
やられも せまい ヨイヨイヨイ

#### じばんナー（四） 中乗さん

じばん 仕立てて ナンジヤラホイ  
たびを そえて ヨイヨイヨイ

（以下同曲）

木曾へ木曾へと皆行きたがる

木曽に木山があればこそ  
心細いぞ 木曽路の旅は  
かさに木の葉が舞いかかる

一 中乗さん＝いかだ乗り。

二 御岳さん＝飛騨山脈にある山の名。高さ二〇六三メートル。

三 あわしょ＝裏のあるきもの、を

四 じばん（じゅばん）＝はだにつけて着る短衣。  
(ポルトガル語 g i b a o から日本語になつたことば)

2 会津磐梯山（あいづばんだいさん）

イヤー 会津磐梯山は 宝の山よ

ささにこがね（一）が エー また なりさがる（一）

イヤー 東山から 日にちのたより（三）

行かざ（四）なるまい エー また 顔見せに

イヤー いなか坂（ざか）でも 上（のぼ）れば下（くだ）

る

会津七坂（ななさか）エー また 七曲り

一 こがね＝黄金 金

二 なりさがる＝実になつてさがる。

三 日にちのたより＝毎日のおとずれ。

四 行かざ＝行かなれば。

### 3 五木（いつき）の子もり歌

おどま（一） 盆ぎり（一） 盆ぎり

盆かる（三） さきや おらんど（四）

盆が早よ（五） 来りや 早よ戻る

おどま かんじん（六） かんじん

あんひとたちや（七） よかし（八）

よかシア よか帶 よかきもん（九）

おどんが（十） うつちんだぢゅうて（一一）

だいが（一二）にやアて（一三） くりゅうきや（一四）

裏の松山 せみが鳴く

せみじや ござんせぬ（一） 花は なんの花  
妹で ござる つんつん つばき

妹泣くなよ 気にかかる 水は天から もらい水

おどんが うつちんねば（二）  
道ばちや いけろ  
通るひとごち（四） 花あげる



くま川上流の山村

五木 球磨郡五木村（人吉市から約二十五キロ）球磨川の支流の川辺（かわべ）川をさかのぼつて、平家のおちうどが移住したと伝えられる五家荘（ごかのしょう）にはいる途中の渓谷部落である。

（注一）

一 おどま じぶんたちは 二 盆ぎり おぼんかぎり  
おぼんまでしか 三 盆かる おぼんから 四 おら  
んど おらないよ いないよ 五 早よ はやく 六  
かんじん 非人、子守娘の自称 七 あんひとたちや

あの 人たちは 八 よかし身分の高い人、金持 九  
よかよい 一〇 おどんじぶんたち 一一 うつちんだ  
ちゅうて 死んだといつて 一二 だいが だれが 一  
三 にやアて 泣いて 一四 くりゅうきや くれるか  
よ

(注二)

一 ごせんせぬ ございません 二 うつちんねば 死  
んだら 三 通ばちや 道ばたへ 四 ひとごち 人た  
ち 四

四 民謡について

民謡のもとを尋ねると、上代の歌謡までさかのぼることができます。民謡はひとりの作者によつて作られたものではなく、幾百年にもわたる長い時代の流れを通して、民衆が、その生活の中から生み出したものです。いつ、だれが、歌い出したものともなく、口づてに伝えられ、時代時代の好みに従つて改められたり、変えられたりしながら、現代まで生き続けてきたのです。民謡の特長は、その内容や調子が単純で、覚えやすく、歌いやすいことです。

民謡には、神にささげる歌、労働の歌、気持ちを訴えた

歌、事柄を述べた歌、踊りの歌などがあります。それぞれに、民衆の生活に直接つながるもので、民族特有の内容と調子を持つており、折に触れ、事につけて歌われ、民衆に親しまれ、その生活を豊かにしてきました。

日本の民謡も昔から各地方に伝えられましたが、踊りの歌以外は、大部分がすたれてきてています。

「木曽ぶし」は、中部地方、「会津磐梯（あいづばんだい）山」は、東北地方、「五木の子守歌」は、九州地方の民謡で、よく民衆に親しまれ、歌われています。

短歌・俳句

一 古典短歌

持 続 天 皇 (じとうてんのう)

春過ぎて 夏来たるらし自たえの 衣はしたり 天の香  
具山

山 部 赤 人 (やまべのあかひと)  
かの浦 潮 満ち来れば潟 (かた) を無み あし辺 (べ)  
をさして鶴 (たず) 鳴き渡る

田子 (たご) の浦ゆ うちにでて見れば 真白にぞ ふじ  
の高嶺 (たかね) に雪は降りける

山 上 憶 良 (やまのうえのおくら)

銀 (しろかね) も金も (くがね) も玉も なにせむに ま  
される宝 子に しかめやも  
世のなかを 憂 (う) しと やさしと 思へ (え) ども  
飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

大 伴 家 持 (おおとものやかもち)

春の野に霞 (かすみ) たなびき うら悲し この夕かげに  
うぐひ (い) す鳴くも

わが宿の いささ群竹（むらたけ） 吹く風の 音のかそ  
けき この夕（ゆうべ）かも

うらうらに 照れる春日に ひばりあがり 情（こころ）  
悲しも 独（ひとり）し思へ（え）ば

小野老（おののおゆ）  
あをによし ならの都は さく花の にほふ（おう）がご  
とく 今盛りなり

紀貫之（きのつらゆき）

ひとはいさ 心もしらず ふるさとは 花ぞ むかしの  
かに にほ（お）ひける

藤原敏行（ふじわらのとしゆき）

あききぬと めには さやかに見えねども 風のおとに  
ぞ おどろかれぬる

安倍仲麿（あべのなかまろ）

あまの原ふりさけみれば かすがなる みかさの山に  
いでし月かも

式子 内親王 (しきしないしんのう)

窓ちかき 竹の葉すさぶ風の音に いとど短き うたた  
ねの夢

藤原定家 (ふじわらのていか)

み渡せば花ももみじもなかりけり 浦の苦屋 (とまや) の  
秋の夕ぐれ

西行法師 (さいぎょうほうし)

心なき身にもあは (わ) れは しられけり 鳴 (しぎ) 立  
つ沢の秋の夕暮

藤原秀能 (ふじわらのひでよし)

夕月夜 (ゆうづくよ) 潮 (しお) 満ち来らし 難波江 (な  
にわえ) の あしの若葉に こゆる しらなみ

源実朝 (みなもとのさねとも)

箱根路 (はこねじ) を わが越えくれば 伊豆 (いづ) の  
海や 沖の小島に 波の よるみゆ  
もの言は (わ) む 四方 (よも) のけだものすらだにも あ  
はれなるかな 親の 子を思ふ (う)

持統天皇、山部赤人、山上憶良、大伴家持、小野老の歌は「万葉集」の中から選んだものである。「万葉集」には、仁徳（にんとく）天皇の時代から淳仁（じゅんにん）天皇の天平宝字（てんぴようほうじ）三年まで、およそ四、五百年間の和歌、約四千五百首が収めている。

紀貫之、藤原敏行、安倍仲麿の歌は、「古今（こきん）和歌集」から選んだものである。「古今和歌集」は、醍醐（だいご）天皇の延喜（えんぎ）五年、紀貫之以下四名の者が、勅を奉じて選んだ和歌集で、全二十巻、約一千首の和歌が収められている。

式子内親王、藤原定家、西行法師、藤原秀能の歌は、「新古今（しんこきん）和歌集」から選んだものである。「新古今和歌集」は、土御門（つちみかど）天皇の元久（げんきゆう）二年、藤原定家ら五人が編集した勅選和歌集で、全二十巻、約二千首の和歌がのせてある。

源実朝の歌は、「金塊（きんかい）和歌集」から選んだ。「金塊和歌集」は、鎌倉（かまくら）三代将軍源実朝の家集（かしゅう）で、約七百十六首の和歌が収めている。

## 二 現代短歌

正岡子規（まさおかしき）

くれないの二尺伸びたる ばらの芽の針やわらかに春雨  
のふる

かめにさす ふじの花ぶさ みじかければ 畠の上に  
とどかざりけり

ガラス戸の くもりぬぐへ（え） ばあきらかに 寝ながら  
に見ゆる やまぶきの花

島木赤彦（しまきあかひこ）

雪降れば山よりくだる小鳥おほ（お）し 障子のそとに  
ひねもす聞こゆ

夕焼け空 こげきは（わ） まれる下にして 凍（こお）ら  
むとする湖（うみ）の静けさ

土の上に 白き線（すじ） 引きて 日ぐれまで 子どもの  
遊ぶ春となりけり

若山牧水（わかやまぼくすい）

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ けふ  
(きょう) も旅ゆく

うらうらと照れる光に けぶりあひ（い）て咲きしづ（ず）  
もれる山桜花

つみ草の におひ残れる指先を洗ひ(い)てを(お)れば野  
に月の出づ(はず)

斎 藤 茂 吉 (さいとうもきち)

朝あけて船より鳴れる太笛の こだまはながし なみよ  
ろふ(う)

山のど赤き つばくらめ二つ屋梁(はり)に いて たら  
ちねの母は死にたまふ(う)なり  
死に近き母に添ひ(い)寝のしんしんと遠田の かは(わ)  
づ(ず) 天に聞こゆる

北 原 白 秋 (きたはらはくしゅう)

春の鳥 な鳴きそ鳴きそ あかあかと外面(そとも)の草  
に日の入る夕べ

石がけに子供七人腰かけて ふぐを つりを(お)り夕焼  
け小焼け

いつしかに春のなごりと なりにけり昆布干し場の た  
んばぽの花

石 川 啄 木 (いしかわたくぼく)

ふるさとのなまりなつかし 停車場の人ごみの中に そ  
をききにゆく

こころよき疲れなるかな 息(いき)もつかず 仕事をし

たるあのこの疲れ

かにかくに渋民村（しぶたにむら）は恋しかり　おもひ  
(い)での山　おもひ(い)での川

木下利玄（きのしたとしはる）  
街（まち）をゆき子どもの　そばを通る時蜜柑（みかん）  
の香（か）せり冬がまた来る

畠珠沙華（まんじゅしゃげ）一むら燃えて秋陽（び）つよ  
しそこ過ぎている　しづ（ず）かなる徑（みち）  
背おいたる垂穂（たりほ）のおもみ百姓は　たえつつあら  
ん一足ひとあし

与謝野　晶子（よさのあきこ）

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳吹かれけり  
金色の　ちひ（い）さき鳥の　かたちして銀杏（いちょう）  
ちるなり岡の夕日に  
川ひとつじ　なたね十里の　よい月夜　母が生まれし  
国うつくしむ

### 三 正岡子規について

正岡子規は、慶応（けいおう）三年伊豫松山（いよまつ

やま）で生まれた。本名は常規（つねのり）、別に獺祭書屋（だつきいしょおく）主人、竹の里人などとも称した。東京帝国大学在学中結核にかかり、血を吐いて後、子規と号して発句を作つた。明治二五年、大学を退学して「日本新聞」に入社し、発句の革新に当たり、発句の名を「俳句」と称した。在来の低俗な主觀句を否定して、俳誌「ホトトギス」を発行し、高尚な客觀句を広め、現代俳句の基礎を築いた。

子規は、俳句の革新に当たるかたわら、新体詩の運動に参加し、写生文を創作して日本の文学に大きな影響を与えた。また短歌革新のうえで、最も大きな足跡を残している。当時の短歌は古今（こきん）調を伝え、知的な遊びに墮していた。子規は、その作風にまつこうから反対を唱え、万葉調を勧め、写実を主張した。子規は明治三二五年、三六歳でなくなつたが、その主張は「アララギ派」の歌人によつて、力強く受け継がれ、現在短歌の骨格形成に大きな役割りを果たした。

## 四 古典俳句

松 尾 芭 蕉 (まつおばしょう)

荒海や佐渡によこたふ(う)天(あま)の河(がわ)  
ひばりより上にやすろふ(う)峠かな

夏草や 兵 (つわもの) どもが夢の跡

旅に病 (やん) で夢は枯野をかけ廻 (めぐ) る

宝 井 其 角 (たからいきかく)

名月や畳の上に松の影

傘(かわかさ)に ねぐらかさ(そ)うよ ぬれつばめ

服 部 嵐 雪 (はつとりらんせつ)

むめ一輪一りんほどのあたたかさ

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな

ふとん着て寝たる姿や東山

向 井 去 来 (むかいきょらい)

応々と いへ(え)どたたくや雪の門 (かど)

湖 (みずうみ) の水まさりけり五月雨 (さつきあめ)  
う(づ)くとも見えで畠 (はた) うつ男かな

内 藤 文 草 (ないとうじょうそう)

夕立に走りくだるや竹の蟻 (あり)  
うかうかと来ては花見の留守居哉 (るすいかな)  
幾たりか しぐれかけぬく勢田 (せた) の橋

与 謝 蕪 村 (よさぶそん)

春の海終日 (ひわもす) のたりのたりかな  
菜の花や月は東に日は西に  
山は暮 (くれ) て野は黄昏 (たそがれ) の薄哉 (すすきか  
な)

不二 (ふじ) ひとつうずみ残してわかばかな

小 林 一 茶 (こばやしいっさ)

我と来て遊べや親のない雀  
名月を取つてくれろとなく子哉 (かな)  
母馬が番して呑 (のま) す清水哉 (しみずかな)  
雀 (すずめ) の子そこのけそこのけ御馬 (おんま) が通る  
やれ打つな蠅 (はえ) が手をする足をする

俳句は、室町時代の末期、宗鑑(そうかん)と守武(もうたけ)のふたりによつて始められたもので、当時は「俳諧(はいかい)」といい、こつけいな文章という意味を持つて

いた。その俳諧の最初の一旬、すなわち発句が独立したものとして扱われて、「発句」と言われ、後に「俳句」と称されるにいたつた。

俳諧は、こつけいを主としたので、発句も、ことばの遊びに流れてしまった。これを文学作品の高さに引き上げたのが松尾芭蕉である。芭蕉は、伊賀上野（いがうえの）の人で、名を宗房（むねふさ）という。京都に出て北村季吟（きたむらきぎん）に学び、後、江戸（えど）に移つて俳句をひろめた。宝井其角、服部嵐雪、向井去来、内藤文章などは、芭蕉の高弟として知られている。

また、芭蕉は、方々へ旅行して、すぐれた紀行文を書いたが、中でも「奥の細道」は有名である。

芭蕉の死後、衰えた俳句をまた盛んにした人に、与謝蕪村と小林一茶がある。蕪村は、摂津（せつつ）に生まれた人で、画家としても名があり、俳句と絵画的な描写を得意とした。一茶は、信濃（しなの）の人で、家庭的には寂しい生涯を送ったが、皮肉とユーモアと童心の入り混つた俳句を作つて有名になつた。

## 五 現代俳句

正岡子規（まさおかしき）

かきくえば鐘が鳴るなり法隆寺（ほうりゆうじ）

島々に灯（ひ）をともしけり春の海

菜の花の中に道あり一軒家

雪残る頂一つ国境

高浜虚子（たかはまきよし）

こがねむしなげうつやみの深さかな  
大空にまたわきいでし小鳥かな  
遠山に日の当たりたる枯野かな  
秋空を二つに断てり椎（しい）大樹

河東碧梧桐（かわひがしへき）

野は枯れてあし辺（へ）さす鳥低きかな  
なでしこや海の夜明けの草の原  
赤いつばき白いつばきと落ちにけり

水原秋桜子（みずはらしゅうおうし）

きつつきや落ち葉を急ぐ牧の木々

雲海や鷹（たか）のまひいる嶺（みね）一つ

なしだなや初夏のまゆ雲うかびたる

山 口 誓 子 (やまぐちせいし)

夏草に機関車の車輪来て止まる

ピストルがプールのかたき面(も)にひび

扇風器大き翼をやすめたり

中村 草田男 (なかむらくさだお)

さるすべりラジオのほかに声もなし

万縁の中や吾子(あこ)の歯生えそむる

冬の水一枝の影もあざむかず

村 上 鬼 城 (むらかみきじょう)

街道をキチキチと飛ぶばつたかな

小春日や石をかみいる赤とんぼ

花散るや耳振つて馬のおとなしき

荻原 井泉水 (おぎわらせいせんすい)

仏を信ず麦の穂の青き真実

空は寂し家あらば煙をあげる

山におりほのかに明け来る山々ばかり

## 六 季 語

俳句のきまりの一つに「季」というものがある。どんな題材で俳句を作つても、それが、春夏秋冬の四季の、どの季節であるかを明らかにするというのが「季」のきまりである。

たとえば、「花見」ということばがあれば、それは春の季であり、「夕立」ということばがある句は、夏の季といふわけである。このような季を表わすことばを、「季語」という。

花見や夕立は季節が分かりやすいが、季語の中には、季語の約束がわからなければ、季節の見当のつきにくいものもある。たとえば「彼岸」は、春の彼岸を意味する季節で、秋の彼岸は「秋彼岸」という季語で表わす。また、單に「月」といえば秋で、他の季節の月をよむときは、「おぼろ月」（春）とか「寒月」（冬）とか、「夏の月」とかのように、それぞれの季を示すことばを入れる。

俳句の季節を集め、それぞれの季語を使った例句を示した本を「歳時記」という。

ステンカ ラージン

ロ シ ア 民 謡  
野 上 彰 訳詞

とどろく ボルガの ほしふる夜に  
杯（さかずき） あげつつ ひしめくかげよ  
ペルシアを 征して  
ステンカ ラージンかえる  
かがり火 明るき  
うたげの船ぞ

月影 清らに なみかぜ なぎて  
母なる ボルガは 流れてやまづ  
今なお われらに  
つたえて あわれ  
おおしき ステンカ ラージン  
栄えは いづこ

## 格言

ことわざ

故事から生まれた ことば

良心！ そうだ、良心こそ  
善と悪に対する信すべき  
判決者なのだ。

人間を神に属させるものには、  
ただ、良心あるのみ。

(J・J・ルソー)

## 一格言

戦いは最後の五分間にあり。

ナポレオン

言論の自由を殺すは、真理を殺すことである。

ミルトン

自分に打ち勝つことは、勝利のうちの最大なものである。

プラトン

涙とともにパンを食べた者でなければ人生の味は分から  
ない。 ゲーテ

知識と勇気とは偉大な仕事をつくる。

エマーソン

心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず。

(大学)

機会は鳥のごとし、飛び去らぬうちに捕えよ。

ジラー

天才？ そんなものは決してない。ただ勉強です。方法で  
す。  
ふだんに計画しているということです。

ロダン

馬を川ばたに連れていくことはできる。しかし、水を飲ま  
せることはどうきない。

(西洋のことわざ)

過ぎたるは、なお及ばざるがごとし。

(論語)

少 年 よ 、 大 志 を い だ け 。

クラーク

求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門  
をたたけ、さらば開かれん。

(新約聖書 (しんやくせいしょ))

義を見てせざるは勇なきなり。

(論語)

困つたときの友人こそ、まことの友人である。

(西洋のことわざ)

(088. jpg 左pg上段下段あり)

希望は人を成功に導く信仰である。希望がなければ何ご  
とも成就するものではない。

ヘレン・ケラー

いつまでも続く不幸というものはない。じつとがまんす  
るか、勇気を出して追い払うかのいずれかである。

ロマン・ローラン

格言というのは、道徳上の戒めを表わしたことばである。また、人間が人間らしい行ないをするための原理をいい表わしたことばとも言うことができる。古今東西のすぐれた思想家たちが、いろいろな格言を残している。人類共有の宝石ともいうべきものである。いつかは、諸君の行くてを照らす光となることがあろう。

## 二 ことわざ

(上段)

石の上にも三年。

犬が西むきや尾は東。

うまいことは二度考えよ。

縁の下の力持ち。

泳ぎ上手は川で死ぬ。

艱難（かんなん）なんじを玉にす。

聞くはいつときの恥、問かぬは一生の恥。

苦しい時の神だのみ。

(下段)

光陰は矢のごとし。

ころばぬ先のつえ。

さるも木から落ちる。

十人十色。

朱にまじわれば赤くなる。

好きこそものの上手なれ。

住めば都。

せいては事をし損じる。

焼け石に水。

安物買ひの錢失い。

樂は苦の種。苦は樂の種。

聞いて極楽。見て地獄。  
わが身をつねって人の痛さを知れ。

渡る世間に鬼はない。



「ことわざ」とは、もと「ことばのわざ」で、ことばを要領よく短い文にまとめる技術をさして言つたものである。

「ことわざ」は、広い意味で、警句、秀句、格言、風刺句などを含んでいる。だが、格言は主として、有名のことばや、書物の中の文言を抜き出したもので、教訓的な内容のものである。「ことわざ」の多くは、民衆の間に発生した文言で、世事に關し、日常の生活行為を規定しようとしたものである。そこで、「ことわざ」には、反対の事柄を对照させたり、たとえを大げさに言つたり、対句を用いたりして、覚えやすく、伝わりやすいようにできている。

(089.jpg 挿絵あり 上段下段あり)

(上段)

善は急げ。

大は小を兼ねる。

たつ鳥あとを濁さず。

玉みがかざれば光なし。

短氣は損氣。

ちりも積もれば山となる。

時は金なり。

飛んで火に入る夏の虫。

泣きつらにはち。

七ころび八起き。

(下段)

七たびたずねて人を疑え。

習い性となる。

ならぬ勘忍するが勘忍。

二兎（と）を追うものは一兎をも得ず。

盗人を捕えてなわをなう。

のどもと過ぎれば熱さを忘れる。

百聞は一見にしかず。

まかぬ種は生えぬ。

三日坊主。

もちはもち屋。

(上段)

焼け石に水。

安物買いの銭失い。

樂は苦の種。苦は樂の種。

(下段)

聞いて極楽。見て地獄。

わが身をつねつて人の痛さを知れ

渡る世間に鬼はない。

「ことわざ」とは、もと「ことばのわざ」で、ことばを

要領よく短い文にまとめる技術をさして言つたものである。

「ことわざ」は、広い意味で、警句、秀句、格言、風刺句などを含んでいる。だが、格言は主として、有名人のことばや、書物の中の文言を抜き出したもので、教訓的な内容のものである。「ことわざ」の多くは、民衆の間に発生した文言で、世事に関し、日常の生活行為を規定しようとしたものである。そこで、「ことわざ」には、反対の事柄を対照させたり、たとえを大げさに言つたり、対句を用いたりして、覚えやすく、伝わりやすいようにできている。

### 三 故事から生まれたことば

矛 盾（前後のつじつまのあわぬこと）「韓非子（かんぴし）」にあることば。

楚（そ）の国人が、大道で矛（ほこ）と盾（たて）とを売りながら、「この矛は、どんな盾をも突き通す無類の矛です。また、この盾は、どんな矛をも防ぐ天下一品の盾です。」と、自慢していた。すると、それを聞いていたひとりが、「それでは、その矛で、その盾を突いたら、どういうことになるのだ。」といったので、大道商人は返答に

困つてしまつた。

五十歩百歩（多少の違ひはあつても、つまりは同一だと  
いうこと）「孟子」にあることば。

孟子（もうし）が、梁（りょう）の国の恵王と対談した  
ときに、こう尋ねた。「もしも、戦い利あらず、武器を捨  
てて退却ということになつたとき、ある者は五十歩でと  
どまり、ある者は百歩でとどまつた。五十歩の者が、百歩  
の者を卑きよう者よと笑つたとしたら、あなたは、どうお  
考えになりますか。」すると、王は、「五十歩でも、百歩で  
も、逃げたことに変わりはないさ。」と答えた。

他山の石（自分より劣つている人の言行を、自分の知  
徳をみがく参考とすること）「詩経」にあることば。

これについて、程子（ていし）という儒学者は、こういつ  
た。「玉は天下の至宝として尊ばれるものだ。それに引き  
かえ、石はだれも問題にしない。しかし、玉といえども、  
その石をもつてみがかなれば、美しい光を発しない。同  
様に、他人の誤つた言行でも、それによつて深く反省すれ  
ば、修養に役立つものだ。」

蛇足（だそく）（あつても益のないもの。無用の長  
物）「戦国策」にあることば。

楚の国の人々が、主人から大きな杯についだ酒を賜わった。数人の仲間で、「へびの絵を早くかき上げた者から先に飲むとしよう。」と、相談がまとまつた。まっさきにかき上げた者が杯を手にとり、「さあ、できた。これから足をつけても、まだ皆より早い。」と、足をかき始めた。すると他のひとりが、へびをかきあげて、杯を奪い取り、「へびに足なんかあるものか。」といつて、酒を飲んだ。足を書こうとした者は、結局、酒にありつけなかつた。

### 青 年 期

大切なことは、大志をいだき、それをなしとげる技能と忍耐を持つことである。その他は、いずれも重要ではない。

(ゲーテ)

## 一 小グループで話し合いを

今日のような変化の激しい時代に、世の中の動きに遅れないようにしていくことは容易ではありません。新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、映画などによつて、世界中の動きが絶えまなく知らされています。しかし、どんなに努力したところで、わたしたちが、これらのすべてを研究し、理解することはできません。社会人としての教育を身につけていきたいと思っても、そのために十分な時間をさくことはむずかしいことです。といつて、ぼんやりしていると、取り残されてしまう危険があります。では、いったいどうしたらよいでしょうか。

新聞やラジオ、テレビや映画は、世の中のことを理解しようと努めているわたしたちにとって、欠くことのできないものではありますが、わたしたちの質問に返事はしてくれません。

わたしたちは、社会の一員として生活し、周囲の人々の思想、感情、行動、とともに進んでいるのです。社会のあらゆる問題を理解し、解放する最上 の方法は、社会グループで考え、社会グループとしての解決策を探ることです。またそうすることは社会生活をしている者の義務であります。

「三人よれば、文殊の知恵」ということわざがあり、三人が十人、二十人となれば、更により知恵が出るものですね。

講演、書籍、パンフレット、社説などでは、話した人や書いた人の意見だけが述べられています。個人の意見というものは、理性よりも感情に訴えるものが多いのです。わたしたちは、感情に動かされやすいものですから、つい信じてしまいます。

しかし、それは、その意見をそのまま信じている間だけのことであって、他の人が、反対のことを述べれば、そちらを信じてしまうかも知れません。

何ごともすぐ感化されたり、同調してしまうようでは、よい社会人とはいえません。今日、社会で要求されているのは、すべての事柄に深い理解を持ち、慎重に行動する人です。その理解力を豊富にし、深めるための最上の方法は、小さいグループで徹底的に話し合い、順序を追つて考えをまとめていくことです。

正しい方法によつてグループで討論を進めて行けば、たいせつなことを忘れていたり、感情に走つて合理的な判断を失つたりするようなことがなくなります。

わたしたちは、だれもが幸福な生活を送ることのできるような社会を築くために、グループの話し合いの機会を作るようにして、また機会があれば、進んで出席するよう

に心がけましょう。

グループで話し合いをすると、次のような効果があります。

1 みんなが親しくなつて、共通の考え方を見出だし、精神的なきずなを持つようにもなります。これは社会生活のたいせつな基盤になります。

2 多数の人々の意見を聞き、各種の情報を得る機会が与えられます。

3 お互に疑問や意見、不平不満を話し合うことができます。

4 話し合いを継続的に行なつていると、興味が沸き、またいろいろな提案があり、内容も豊かになります。

5 各種の問題が取り上げられ、それに対する関心が向けられ、実践の場合、勇気づけられるようになります。

6 物の考え方や、知識・経験を他の人のものと比較することによって、啓発されます。

7 相手方や他人の立場を理解し、その立場でものごとを考えるようになりますから、人格や人権を尊重する社会人としての礼儀が身につきます。

8 問題を発見したり、解決したりするには、協同の力がいかに大きく働くかを理解します。

9 さまざまの話題について、自分の意見に、まちがいや不備のあることを発見した場合、再考し訂正すること

ができます。

10人の話を理解しようと努力することによつて、  
寛容な態度をとる習慣がつきます。

11意見を述べることによつて、発表の経験を積み、  
思考をまとめる力がつきます。

12指導者や助言者などによつて有効な示唆を受け  
ることができ、社会生活のあり方を理解し、民主的な生活  
態度が身についてきます。

## 二 会 議

みんなが、互いに意見を出し合つて討議しながら、だん  
だんいい意見にまとめていく。そして最後に多数の意見  
として、いい結論を出す。それが会議である。だから、会  
議では、出席した人たちが、みんな意見を出さなければな  
らない。意見を出すといつても、めいめい勝手な意見を、  
勝手にしゃべつていては、意見はまとまらない。そこで、  
きまりを作つて、それによつて会議を進める。

きまりといつても、別段むずかしい規則があるわけで  
はない。会議をうまく進めるために、次の役員が必要であ  
る。会議の進行を受け持つ司会者、中心になつて会議をま  
とめていく議長、議長を助け、同じく会議をまとめていく

副議長、また発言や決議その他を記録していく書記、これらの役員を、会の初めに選び、それから会議を始める。会議を開く場合には、原則として、次の四つがあげられる。

- 1 すべての会員は平等の権利を持つている。
  - 2 議題は一時に一項目ずつ取りあげる。
  - 3 多数の意見に従つて決める。
  - 4 少数の意見をも尊重する。
- この四原則を無視したり、これから離れたりしないよう注意する。また、議長になつた場合の心構えとしては、
- 1 すべての全議員を公平に扱う。
  - 2 全員に聞き取れるように、はつきり言う。
  - 3 全員が感情に捕われず、正しく考えられるようになるべく予定の時間内に終了するようにする。
  - 4 全員から意見が出るようにする。
- などがあり、全議員としては、
- 1 活発に意見を述べる。
  - 2 発言する場合は、必ず議長の許可を得る。
  - 3 発言する場合、要点をはつきり話す。
  - 4 建設的な意見を述べ、会議がまとまるよう協力する。

## 5 他人の意見を尊重する。

6 採決の行なわれる場合、自分がだけの立場を考えないで、全体を考えてから決める。

などの心構えを持たなければならぬ。

会議に参加した場合、問題をうまく解決し、よい結論になるようにまとめていかなければならぬ。だまつている間に、つまらないことが決められてしまつたなどと後悔しないようにする。そして、よくない結論が出たとしたら、それは進んで意見を出さなかつた者も含めて、全員の責任である。

会議で決められたことは、必ず守らなければならぬ。お互いに意見を出し合い、最後に多数決で決まつたことであるから、進んでそれを守る義務がある。たとえ、討議のときには反対したことであつても、いつたん議決された以上、これに従うのが民主主義の精神である。

### 【 おかあさん

#### 三 青 年 期

ぼくが突然、こんな手紙を書いて、きつとびっくりすることでしょう。しばらく、ぼくの気持ちをきいてください

い。

実は、このまえ先生が、「あなたたちも、あと、一、三年すると、親に反対したり、親をばかにしたりするようになるでしょう。」とおっしゃいました。

ぼくは、どうして先生がそんなことを言われるかと、不思議に思いました。ぼくは、決してそんなにはならないと思いました。おかあさんやおとうさんに反対したり、親をばかにするなんて、とうてい考えられないことでした。ところが、この「うる、なんだか気持ちが、おかしくなってきたのです。もちろん、表面に出してどうのこうのと言うことはありませんが、内心では、おかあさんに不満だと思うことが、いくつかできてきたのです。

もちろん、おかあさんをばかにしているなんて考えは少しもありません。ただ、前のように、おかあさんの言うことが、すべて絶対だとは思えなくなつたのです。

こんなことを言うと、おかあさんは、きっと悲しく思われるでしょう。そう思うと言いにくいのですが、青年になると、みんなこんなになるのでしょうか。だったら、ぼくは青年になりたくありません。今まで、自分だけはそんなことにならないと信じていたのに、自信がなくなつてしまつたのです。

おかあさんとぼくとの間に、冷たい風がはいつてくるなんて、たまらないのです。

ぼくは、どうしたらよいか、毎日考えてしまします。  
おかあさん、ぼくの気持ちが落ち着くように、教えてください。

幸一 より

おかあさんへ】

幸一さん

あなたの手紙、読みました。

あなたが、おかあさんの言うことを、絶対だと思えなくなつたといって、悩んでいる気持ち、本当に幸一さんらしいと思いました。正直に打ち明けてくれて、おかあさんは、うれしく思います。

それはね、幸一さん、自然なのですよ。ちょうど木の実がすっかり熟すると、木から離れるように、あなたもやがておかあさんから離れるときがくるのです。それはたしかにおかあさんにとつても寂しいことです。けれども、あなたの成長のために、喜ばなければならぬことなのです。

幸一さんが、この「」、今までになく、ふくれた顔をしたり、口答えをしたそうにしているのを見て、おかあさんも感じていた」とでした。幸一も、そろそろ青年期には

いつたのだなと思つていました。すべて、自然の発展なのですから、心配しなくてもよいのです。おかあさんも、あなたが離れていくと思うと、寂しいです。でもだいじょうぶよ。しゃんとしています。幸一さんも、寂しがらずに、いい青年になるように、自分をみがいてください。

もし、何かおかあさんに不満なことがあつたら、遠慮しないで話してください。ふたりで話し合いましょう。不満をそのまま胸に持つてしたり、よそに行つて、その不満を広げることは、よいことではありません。話し合つて、気持ちをさつぱりさせておくことがたいせつです。むずかしい問題は、おとうさんとも話し合いましょう。

幸一さんが、すくすくと伸びることを、わたしたちは望んでいるのです。そのためには、どんなことでもしてあげるつもりでいます。

どうか、おかあさんの気持ちをくんで、すなおな、明るい青年になつてください。

母 より

幸一さん】

身長が伸び、体重がふえ、運動神経が発達し、知力や想像力が進むのは、決して同じ調子でいくものではありま

せん。ある時期がくると、急激に発達するものです。十四、五歳から十六、七歳のころが、その時期です。

身体の発達に従つて、精神も発達して複雑になり、今までの少年時代とは違つてきます。独立心や自己を主張する気持ちも強くなつてきます。これは、自分というものに目ざめる青年期の特徴でもあります。

このような目ざめは、ひとりの人間としての目ざめであります。身近な者への依頼心をなくして、独立しようとする時期です。また、この時期には、自己を他人から目立たせたいという気持ちも働きます。そこで、たまたま、無謀と見えるような行動をとることもあります。夢や希望、不安、悩みが多くなり、それを、ただ理論としてではなく、実際に解決したい欲望が強くなるときでもあります。このような心の状態を、どんな方法で解決するかは、たいせつなことです。うつかりして手遅れにならないように、早くこれに気付き、むりのない方法で解決することです。

#### 四 悩み

次の文は、中学生が自分の悩みを打ち明けたものです。この中に、あなたの悩みと同じものがあるかも知れませ

ん。これらの悩みについて、みんなで考えてみましょう。

### 一 ちびと言われるわたし

わたしは、クラスの中で、いちばん背が低いのです。グルッポの一年のときからずっと小さい方から一番でした。ずいぶんみんなに“ちび、ちび”とひやかされてきました。こればかりは、どうすることもできないので、じつとがまんしているうち、いつのまにか無口な性格になってしましました。ちびと言われたとき、悔しくて、なぜ両親は、わたしをこんなに小さく生んでくれたのだろうと、恨んだこともありました。家人の人や、仲のよい友だちは、気を使つて言わないようにしてくれますが、何かと気がひけてならないのです。じつと考え方だと、死んでしまいたいと思うことがあります。この悩みは、どうしたら解決できるでしょう。

### 二 人前で、うまくしゃべれないわたし

わたしは、生まれつき気が小さいのか、人前でしゃべることがいちばん不得手です。すぐに顔が赤くなり、胸がどきどきして、ことばがのどにつかえるのです。これではいけないと思って、なるべくみんなと話すようにしているのですが、なおりません。友だちと五、六人で話すときは、どうにか平気になりましたが、みんなの前に出ると、やは

り、うまく話せません。発表とか、会議の議長をやらされるのが苦手で、その前日などは、気にかかつて夜も眠られないくらいです。もし、言いそくなったり、つかえたりして人に笑われたら、どうしようと思うと、恥ずかしいのを通り越して、こわくなります。

このような性質は、どうしたら直るでしょう。このことがわたしの最大の悩みです。

### 三 わたしは、成績がよくない

わたしは、あまり成績がよくありません。でも、自分で決してなまけているとは思いません。できる限りがんばっているのです。きらいな学科は、勉強の仕方も分かりませんし、机に向かっていても、さっぱり能率が上がりません。父は、「そんな成績では、将来の見込みがない。なまけないでがんばれ。」と言います。いちばんつらいのは、「兄や妹は成績がいいのに、兄弟のうちでおまえだけがだめだ。」と言われることです。こんなことを言わされると、つい反抗したくもなります。

### 四 わたしは友だちが欲しい

わたしはどうしたわけか、だれにもかわいがられず、人にすかれたことがありません。むりに人にすかれようとは思いませんが、人にかわいがられている友だちを見る

と、うらやましいよりも、憎らしくなります。

ふだんの遊び友だちは、二、三人いますが、本当に心を打ち明けて語る友だち、自分を分かつてくれる友だちはありません。AさんやBさんのような人と仲よしになりたいと思いますが、その人たちには、それぞれ仲間があります。わたしのことなど、全然見向きもしません。うちでも、父母は姉ばかりかわいがっています。そんなとき、本当に寂しく暗い気持ちになります。いつたいわたしは、どうしたら、本当の友だちができるのでしょうか。

人は、だれでも、どこかにひけめを感じる心、つまり、劣等感を持つています。それを強く感じている人もありますが、そんなに気にならない人もあります。

身体や、容ぼうのひけめ、知識や技能のひけめ、貧しいことからくるひけめなど、いろいろあります。女子が男子に対して、また子どもがおとなに対して感じるひけめもあります。そのひけめが、悩みになつて現われるのです。

では、なぜわたしたちは、ひけめを感じるのでしょうか。それは、「わたしたちが、社会の中の人間だから。」ということでしょう。もし、離れ島に、たつたひとりで住んでいたら、ひけめなど感じないでしょう。しかし、わたしたちは、大勢の大人と、社会生活をしています。生活が複雑になつてきて、競争が激しくなると、どうしても自分と

他人とを比べないわけにはいきません。そして、自分が劣つてていると思うと、ひけめを感じ、まさつてていると思うと、優越さを感じます。ですから、自分だけのせいではありませんが、一種の心の病気といえます。

わたしたちは、からだの病気だけでなく、心の病氣にも、よく注意してなおさなければなりません。そして、心の病氣は、努力すれば、自分で直すことができます。自分が劣つていると感じて努力している人は、もう治療が始まっているわけです。顔がみにくくもないのに、みにくくいと想いこんだり、人前に出ると、自分はしくじると決めてしまう人があります。そして、始終、悩んでいます。更に、このひけめがひどくなつて絶望したり、やけになつたり、果てには自殺するような人さえいます。自分の弱点を、心の底にしまつて、悩んでいないで、両親や先輩、先生などに相談してみるのは、有効な療法です。また、友人との協力や、友情の力でこの病氣を直してもらうこともできます。ひけめを感じる程度のうちに、よい方法を見つけて、直してしまいましょう。

## 五 強い意志

樋口一葉（ひぐちいちよう）は、「たけくらべ」「にぎり

え」「大つどもり」などを書いた人で、明治時代の一流の作家（一八七二年—一八九六年）と言われています。

一葉は若くてなくなり、短い一生の間にすぐれた作品を発表したので、天才と言われました。

文学には、たしかに才能が必要です。努力だけでよい文章が書けるわけではないでしょう。しかし、才能だけによつて、よい作品ができるものでしょうか。

一葉の少女時代の夏子は頭のよい記憶力のすぐれた子どもでした。まだ七才になつたばかりのころ、「南総里見（なんそうさとみ）八犬伝」という小説を三日で読んでしまつたというほど、読書好きでした。父は、このような子には、できるだけ勉強をさせてやろうと考えていました。しかし、母は、夏子に学校を続けさせることは不賛成で、夏子は小学校をやめて、三年ほど母の言うままに家の手伝いや裁縫、お茶、お花のけいこなどをしていました。しかし、「自分は、文をもつて立つ人になりたい。」とひそかに考えていたので、ひまさえあれば、机に向かつて本を読んでいました。

母がそれをとがめると、父は、「夏子のような子は、自分の得意な道を進ませるのが本当だよ。読みたいものは読ませてやりなさい。」と言つて、夏子に味方してくれました。

まもなく夏子は、父の友人の世話で、中島歌子（なかじ

まうたこ）という人の門にはいり、再び学問の道に進むようになりました。夏子は、ひまをみては図書館に通いました。「今昔（こんじやく）物語」「太平記（たいへいき）」など、広く古今の書を読み、更に写本までして勉強しました。やがて夏子は小説に興味を持ち、小説の勉強に移つていきました。四百首に上る和歌、習字のつもりで書き続けた日記、小説を書くために調査した下書きなど、その苦労と努力ははかり知ることができます。

この努力が報いられて、夏子は、作家、樋口一葉となることができました。

せっかく、文学への野心に燃えているとき、一葉の境遇は、それに没頭することを許しませんでした。役人をやめて事業を起こした父がそれに失敗したのでした。一葉の一家は貧乏のどん底に突き落とされてしまいました。しかも、まもなく兄が病死し、一年おいて父もなくなつてしましました。一家を支える全責任が一葉にかかるつきました。しかし、一葉は、片時も、文筆の道を忘れませんでした。なんとかしてやり遂げようと、強い意志を持ち続けました。

一葉は、「うもれ木」「雪の日」を雑誌に発表しました。一葉の名は、文壇の人々に知られ、世間から注目されるようになりました。けれども貧しさは相変わらず、一葉をせめただてました。そこで一葉は、商売をしながら筆を執ろうと

考え、ささやかな荒物屋を開きました。しかし商売はうまくいかず、母とふたりで泣いたことも幾度がありました。一葉は仕方なく針仕事を始め夜中まで働きました。それでも、本を読んだり、原稿を書いたりして血のにじむような努力をしました。一葉は、その努力の最中に、わずか二十四歳八か月でなくなりました。

人は「天才の一生」と言いますが、実は賢くて意志の強い女性が、自分の好きな文学を目標として生き抜いた一生なのです。もし一葉に意志の強さがなく、努力がなかつたら、名作は生まれなかつたでしょう。

人間の一生の道は、はつきり目に見えていたり、どうなるかが分かっているわけではありません。自分ではこうなるだろうと思つても、突然、故障が起こつてくることがあります。人生の道は決してやすやすと歩ける平たんな道ではありません。ですから、少しがらいの故障や困難でくじけてはなりません。それを乗り越えていく勇気と、強い意志を持たなくてはなりません。

強い意志とは、正しく強く生きる力です。強く生きる力を持つためには、まず目的をたて、見通しをつけることが必要です。そして、「どんなことがあってもやり抜こう。」と決意することです。

この強い意志の力は、責任を持つて仕事をやり通そうとする人は皆、持っています。困難に打ち勝っていく忍耐力が、強い意志の力です。目的をたて、それをりっぱにやり遂げた人こそ、成功者と言うことができます。

## 歴 史

古代の絵画や彫刻の中に、水中で戦っている図があります。それを見ると、水泳は、武術の一種として発達してきたことが分かります。

十六世紀になつて、ヨーロッパで、初めて水泳に関する書物が出版され、このころから、泳法は各国で発達してきました。十九世紀の終わりになつて、国際交流が盛んになりました。スポーツも国際的になりました。そして、水泳も国際競技の一つとしてますます栄え、今日ついにオリソビック競技の中でも、花形競技の一つに数えられるようになりました。

水泳技法の面でその発達のようすを見ますと、今日のスピード泳法として用いられているクロールは、二十世纪にはいつてからのものといえます。アッシリア、およびバビロニアに残っている石像の中に、クロールらしい水泳図がありますが、今日のクロールとは、だいぶ違つたと

ころが見られます。ギリシア時代になると、もっぱら横泳ぎが行なわれ、また平泳ぎらしいものもあつたようです。

水泳の技法がはつきりした形を持つたのは、十八世紀ごろで、当時の水泳の書物には、背泳ぎ、平泳ぎ、潜水、飛び込みのことが説明してあります。

十九世紀までは、平泳ぎが最もスピードの速い泳法として用いられましたが、二十世紀になって、横泳ぎが用いられるようになりました。しかし、この横泳ぎも、やがてクロールに代わりました。クロールは、もともとオーストラリアの土人の泳ぎですが、二十世紀になってから、ヨーロッパに伝わり、技法が改良されて、今日のものとなつたのです。飛び込みの型は、十九世紀に、ドイツの水泳団体により、初めて作り上げられ、今日のものになつたのです。

## 泳 法

水泳の技法には、クロール・ストローク・ブレスト・ストローク、バスク・ストロークなどがありますが、全然泳げない人は、まず陸上で基礎になる体の動きを習い、それから水にはいります。最初は浅い所でよく練習し、自信がついてから深い所で泳ぐようにします。

最初は、水にもぐるのが、非常に恐ろしいものです。で

すから、浅い所で呼吸を止めて、水の中に顔を入れます。これをくりかえしていると、水に慣れてきて、水中にもぐることもできるようになります。そして、次に手足を伸ばし、顔を水中に入れて浮き方を習います。

浮くことを覚えたら、こんどは顔を水に入れてバタ足で前進することを習います。次に、犬かきを習えば泳げるようになります。

クロール・ストロークは、いろいろな泳法の中でもいちばんスピードの出る泳ぎ方です。ですから、競泳の一つに自由形という種目がありますが、ほとんどクロールを使います。クロールは、両足をまっすぐに伸ばし、もものつけ根から足先までを細かく上下に動かします。手は、互い違ひに水をかきます。

また、呼吸の仕方は、顔が水中にあるとき吐き出し、水上に出たとき吸います。

ブレスト・ストロークというのは、平泳ぎのことです。泳ぎ方が似ているので、かえる泳ぎともいいます。両腕で左右に水をかき、両足で強く水をけつて前進します。呼吸はクロールのときと同じようにします。

これと似ている泳法に、バタフライというのがあります。足の動きはブレストと同じですが、両腕で水を後ろにかき、次に腕を高く水から抜いて前に出し、水を後ろにか

いて泳ぎます。

サイド・ストロークというのは、からだを横向きにして、足で水をはさみ、あおるようにして泳ぎます。この泳法は、流れの速い所を泳ぐのに適しています。日本の抜き手というのは、この泳法の一種です。

バック・ストロークは背泳ぎのことです。あお向きになつて、両腕で交互に水をかいて進みます。ちょうどクロールを裏返しにした泳法です。

ダイビングというのは、飛び込みのことです。水にはいるとき、棒が縦に落ちるよう、できるだけ水の抵抗を少なくして飛び込むのがよいのです。ダイビングには、飛び板飛び込みと、高飛び込みの一型目があります。飛び込みの型には、前飛び、後ろ飛び、前飛び込み、後ろ飛び込み、ひねり飛び込みなどがあります。

以上のように、泳法にもいろいろあります。スピードを競うには、クロールが適していますが、この泳法は早く疲れるので、長距離を泳ぐには適しません。長い距離を泳ぐには、ブレスト・ストロークかサイド・ストロークが適していて、遠泳には、この泳法が多く使われます。

水泳をするときには、その前に必ず準備体操をしなければなりません。また体操をした後、そのまますぐ水中に飛び込むのは危険です。なぜならば、いきなり飛び込むと、皮膚や筋肉が急に冷たい水に当たって収縮し、心臓ま

ひを起こすことがあるからです。体操をしたあとで、静かに全身を水の中にひたし、それから水泳を始めます。水泳をするときは、これだけの準備を必ず行なうように心がけましよう。

## ウェーリントン公とナポレオン

一八一五年、ナポレオンの大軍を、ワーテルローに迎え撃つたウェーリントン公の率いるイギリス・プロシア連合軍は、苦戦の後、ナポレオンを破つてとりこにしました。そのとき、ナポレオンは「わたしは、戦場で破れたのではない。イギリスのスポーツ精神に破れたのだ。」と言いました。イギリスが早くからりっぱな運動場を作り、国民の間にスポーツ精神を育てていたことが、そして、その精神が苦戦に耐えて、自分を打ち負かしたこと、このようなことばで語ったのでした。

# モーツアルトの子もり歌

堀 内 敬 三 作詞

眠れよい子よ

庭やまきばに 鳥もひつじも 皆眠れば

月は窓から 銀の光を 注ぐこの夜

眠れよい子よ 眠れや

家の内外 音は静まり

たなのねずみも 皆眠れば

奥のへやから 声のひそかに ひびくばかりよ 眠れ

よい子よ 眠れや

いつも楽しい しあわせな子よ

おもちゃいろいろ 甘いお菓子も

みんなそなたの お目ざ待つ故 夢にこよいを

眠れよい子よ 眠れや

——劇——夕空晴れて

所と時 都市近郊のある農家。午後。

舞台 上手よりに へや。机、茶だな、茶だなにハーモニカ三、四本、その他。上手は隣室に続く。へやの正面に窓。下手よりの土間に肥料袋四、五俵と農具。奥には表の入口。下手前に裏口、裏口の外に井戸があり、バケツが置いてある。

登場人物

田中 のぶ(45歳)

守(まもる)(20歳)

孝(たかし)(17歳)

福夫(ふくお)(12歳)

農村調査班の大学生

近藤(こんどう)

江崎(えざき)

その他 4人

村人数人

(108.jpg 119.jpgまで。上段下段あり)

### 一幕があくー

福夫が机の前に腰かけて雑誌を読んでいる。のぶが井戸ばたから洗い物を運んでいる。舞台おくの道を、農村調査班の学生たち三、四人が歌を歌いながら通りかかる。

近藤（立ち止つて） ゆうべは、お世話になりました。  
のぶ どういたしまして。

福夫 おねえちゃん。晩にまたスライドやつてくれる？

江崎 ええ、りますよ。お友だちをみんな呼んでいらっしゃい。

福夫 きっとだよ。

江崎（笑いながら） だいじょうぶ。

近藤 おばさん。あとでまたきます。

（近藤と江崎、足早に去る。福夫は、また雑誌を読み始める。守、噴霧機をかついで、畠から帰つてくる。）

のぶ ご苦労さま。もうすんだのかい。

守（噴霧機をおろして）こんなに一生懸命消毒して作つたつて、いざ出荷となつて、ひどい値さがりじやたまらないなあ。

のぶ 本当に。うちのトマテのできがいい時は、いつだつて安いんだから……。

守 と言つて、やめるわけにもいかず、百姓はつらいよ。（福夫の方を見て）福夫、おまえ、中学終えたらどうするんだ。

福夫 農業やるよ。ぼくも。

のぶ おまえに百姓はむかないよ。

福夫 どうして？

のぶ おまえは、ねこのしつぽだから、中学を終えたら町で働くといいよ。

福夫 町はいやだよ。ぼく、百姓になつて、この村、うんとよくしようと思つてるんだ。

守 おまえが？

のぶ まあ、まあ。

のぶと守、顔を見合わせて笑う。福夫、すました顔で、雑誌を読み始める。表の戸口から、孝、登場。

守 早かつたじやないか。

（守は、噴霧機を洗いに井戸の方へ行く。

のぶ 暑かつたろう。さあ、上着でも脱いで……。

(孝、返事もせずに、福夫から雑誌を取り上げて読む。)

福夫 だめだよ。(孝にとびつく)

孝 うるさい。

(福夫を払いのける。福夫泣きそうな顔をする。)

(新ポル語 Tomate)

のぶ 亂暴するんじゃないよ。孝、どうだつた。あの辺は、  
大きな工場が多いから、分かりにくかつたろう。

孝 ああ、腹がへつた。なんかくれよ。

福夫 なんにもないよ。

のぶ マカロンがあるよ。食べるかい。

孝 (ぶつきらぼうに) うん、それでいいよ。

(のぶ、マカロンをさらにもつて、持つてくる。孝、食べ始める。)

のぶ 電気の工場だつていうけど、何を作ってるんだね。

あぶない仕事じゃないだろうね。

孝 (だまつたまま、マカロンを食べ続ける)

のぶ それで、いつから通うんだね。

孝 (ぽつんと) やめたよ。

のぶ やめたって？ だめだつたのかい。

孝 決まってるよ。行かなくつたつて分かつてるさ。  
のぶ 行かなくつたつて？ おまえ、行かなかつたのか  
い。

孝 (食べ終わつて) ……水。

のぶ おまえ、まさか、せつかく世話してくださつた大竹  
さんに、迷惑をかけるようなこと、したんじゃないだろう  
ね。

孝 早く、水をくれよ。

のぶ (コップに水をついで渡してやり) わたしが、あん  
なに大竹さんに頼んだのに……。

孝 いくら頼んだつて、だめだよ。大竹さんだつて、あ  
の工場の係長が学校友だちというだけなんだから、行つ  
たつて、だめさ。

のぶ おまえ、本当に行かなかつたんだね。……人の気も  
知らないで……。だめか、だめでないか、行つてみないつ  
て法があるものか。

孝 もう、いやんなつたよ。うちで寝てる方が、よっぽ  
どましだ。足代つかつて、腹を減らして…。

のぶ だからって、うちで、ぶらぶらしてたって、仕方が  
ないだろ。

孝 (急に向き直つて) なら、どうしてサン・パウロか  
ら、おれを呼び戻したんだ。

のぶ そういうつたつて、二度も指にけがをして……、指な  
ら、まだ、なんだけど、命にかかるようなけがでもして  
……、そうなつてからじや追つつかないもの……。

孝 指の一本や一本、機械にくれて



(新ポル語 macarrão / sao paulo)

やらなくちや、一人前の旋盤工にや、なれないんだよ。  
のぶ そんな…、そんなあぶない所で働くくつても…。  
孝 じゃ、どうすりやいいんだ。

のぶ だから、大竹さんのお世話してくださる電気の工場に……。

(孝、つと立つて、たなからハーモニカを取り、ふきはじめる。)

(奥の道を、江崎が通りかかる。立ちどまつて、孝を見る。)

— 間 —

(孝、江崎に気づいて、ハーモニカをやめる。)

江崎 うまいわね。(ひとり「」のように言つて立ち去る。)

(守 土間にはいってくる。)

のぶ (食器をかたづけながら) ひとりでやけを起こしたりして…、行きもしないで、分かるもんか。

孝 わかつてるさ。(ほうたいをしている右手の人さし指を見つめて) だれが、こんなかたわなんか…、どこだつて、お断りに決まつてるさ。(立つて隣室へいこうとする。)

守 孝、おまえ、商売をやつてみる気はないか。

のぶ 商売？

孝 そんなに、おれがじやまなのか。

福夫 ジやまだよ。にいちゃんなんか、いない方がいいや。

孝 なにつ！

守 福夫、だまつてろ！

福夫 ふん。（しぶしぶ机に向かう）

守 （土間の肥料袋を一輪車に積みながら）中川（なかがわ）さんが、気心の分かつた店員が欲しいって、言つてたが…。

のぶ 中川さん？ ああ、あの肥料屋 の…、そりや、いいじやないか。中川さんなら、死んだおとうさんの昔からの友だちだし…、

おとうさんの葬儀のときに、これから困ることがあつたら、なんでも相談してくれつて、言つてくださつたし…。守 商売、覚えて、自信がついたら、独立すればいいじゃないか、正直に働いたら、中川さんだつて、援助してくれるよ。

のぶ 中川さんなら、安心だよ。

守 将来性があつて、いいと思うんだ。

孝 そんなに気に入つたんなら、自分が行きやいいだろう。

のぶ なんてことを言うの…、ひとりとじやないんだよ。

孝 おれ、他人に気がねしてくらすのは、いやなんだ。

守 気がね？

孝 分かってるよ。みんな、おれを持て余してんだろ。  
自分のことは、自分で決めるから、ほつといてくれ。

守 ちがうよ。持て余してなんかいないよ。ただ…。

（表戸口から、江崎、バケツを下げて登場）

江崎 （内の様子を見て、ためらいながら） おばさん、す  
みませんが、水をください。

のぶ どうぞ。

江崎 すみません。（井戸ばたへ行く）

— 間 —

孝 にいちゃんなんかに、おれの気持ち、分かるもんか。  
(隣室へ去る)

(守、かごを持つて、鶏小屋の方へ去る。のぶは、孝  
の食べたあとのさらなどを持つて井戸ばたへ行く。福夫  
は、本を開いて勉強を始める。江崎は、「しあわせの歌」を

歌いながら水をくむ。)

江崎 洗い物？ おばさん。

のぶ はい、ちょっと…。

江崎 …おばさんは、毎日、何が楽しみですか…。  
のぶ 仕事に追われていて…、これという楽しみもない  
ですよ。…そうですね。こんど、守が上の畑にポンカンの  
苗を百本ほど植えたんですが、早く実をならせたいです  
よ。

江崎 実がなつたら？

のぶ 別に、どうつてことも…、まあ、そのお金で、道具  
小屋でも建てたいんですけど…。

江崎 それじゃ、ちつともおばさんの楽しみじゃないわ  
ね。

のぶ わたしたちは、そんなことしか、考えないですよ。

(江崎とのぶ、土間に帰つてくる。)

のぶ あんた、サン・パウロのどの辺ですか。

江崎 ビラ・マリアナです。

のぶ そう。おとうさんは、何をなさってるんですか。

江崎 画家なんですけど、売れない絵ばかりかいてるわ。

福夫 だから、おねえちゃん、図画がうまいんだね。

江崎 そうでもないわ。ここのおじさん、トマテ作りの名人だつたんですね。

のぶ …もう、昔のことですよ。

(奥の道から、近藤がくる。ノートを持ってる。)

近藤 江崎さん、川上君が待ってるよ。

江崎 あ、いけない！

(バケツを持って、急いで去る。)

近藤 おばさん、守さんは畠ですか。

のぶ いいえ、鶏小屋です。(福夫に) おまえ行って、に  
いちゃん、呼んでおいで。

(福夫、守を呼びに行く。)

近藤 おばさん、ゆうべのスライド、どうでした。  
のぶ ええ、よかつたですよ。このところのは、きれいです  
ね。

近藤 おばさんたち、シネマに行きますか。

のぶ まあ、年に二度か、三度ですよ。

(守、はいつてくる。)

近藤（守に、書類と日誌などを返して、）これ、どうもありがとうございました。

守 どうでした。少しは役にたちましたか。

近藤ええ、とても。さつそくみんなで書き写しました。よく調べておりますね。おかげで、この村の実態が、はつきりつかめました。大助かりですよ。

（のぶ、お茶をいれに立つ。）

守 去年、組合本部でやつた発表会のために、ぼくたちが手分けして調べたんです。だが、まだ足りないところがあるんです。

近藤いや、ぼくたちの調査には、これで十分です。（ノートを広げて）こここの農業経営の壁というのは、結局、現金収入に安定性がないってことですか。

守まあ、それが一般の悩みですね。

近藤ばかによかつたり、全然だめだつたりで、次の仕事の予定が立

（新ポル語 V i l a M a r i a n a）

たないのは困るでしょうね。

守それが近郊農業のやりにくいところなんですね。のぶ（お茶を持って来る）どうぞ。

近藤 ありがとう。（お茶を飲みながら）この辺のものもの  
収入はどうなんですか。

のぶ もも も、いまじや肥料代や人件費がかさんで、た  
いしたことはないようです。

守 とにかく、生産費が高くついて売り値が安いので  
すから、いくらも残らないんです。

近藤 （ノートに書き込みながら）肥料代、農薬代、人件  
費に食われることが、近郊農業の発展を妨げているので  
すね。

のぶ 肥料代だけでも、もう少し安いといいんですが…、  
どかつと現金を取られると、生活が苦しくなるんですよ。

（福夫が戻ってくる。）

福夫 にいちゃん、そうじ、やつてきたよ。

守 えさは？

福夫 えさもやつといた。ぼくも腹がへつたなあ、えさ、  
おくれよ。

のぶ なんてこというの。おまえも、とりの仲間かい。

（江崎が来る。）

江崎 楽福ちゃん、勉強は？

福夫 やめたよ。

江崎 あら、もうやめたの？（茶だなの上を見て。）ここ  
のうち、ハーモニカがたくさんあるのね。

福夫 孝にいちゃんのだよ。

近藤 （ハーモニカを見て）福夫君、ゆうべ教えた歌、覚  
えた？

江崎 “夕空晴れて、秋風吹き”（と歌い出す。福夫も  
いつしょに歌う。）

近藤 よし、歌おう。ちょっとハーモニカ、貸してごらん。

（福夫、ハーモニカをとつて近藤にわたす。近藤吹き  
始める。みんな、それに合わせて歌う。）

孝 （隣室から出てきて）福夫、人のハーモニカ、いじつ  
ちやいけないって、言っておいたろう。ダメじゃないか。

（近藤たち、あわててやめる。）

のぶ ちょっとぐらい貸してやつたつていいじゃないか。

江崎 ごめんなさい。わたしが借りたのよ。（近藤から  
ハーモニカを受け取り、孝に返す。）

福夫 にいちゃんのけちんぼ！

孝 なんだって！

守　よせよ、孝。

(孝、ハーモニカを持つて去る。)

のぶ　学生さん、気にしないでくださいね。あの子は、あんなですよ。(ひとりびとのように) …全く、孝にも困つたもんだ。

(奥の道を村人が「お暑い」といさつして通り抜ける。)

近藤　それじゃ、ぼくたち、失礼しようか。

江崎　そうね。

のぶ　(守に向かって。) わたしたちも畠に行こうかね。

(肥料袋が乗せてある一輪車の所へ行く。守も土間の肥料袋の方へ行く。)

江崎　(突然) おばさん、わたし手伝うわ。それ、運ばせて!

のぶ　重いですよ。とても、あんた方は…。

江崎　だいじょうぶ。運ばせて! (江崎走り寄つて、一輪車の手をつかむ。) 近藤　よし! ぼくも手伝おう。(守のいる所へ行き、肥料袋に手をかける。)

(隣室から、孝が出てくる。)

孝 かあちゃん。そんなこと、やつてもらわなくってもいいじゃないか。

(近藤が手をかけている肥料袋をさっとかついで、戸口から出ていく。)

のぶ 孝、孝！

(江崎、一輪車を持ち上げ、押そうとして、よろよろとなる。)

のぶ (江崎を支えながら) だいじょうぶですか。

江崎 だいじょうぶよ。(よろよろしながら、一輪車を押して戸口から出ていく。)

のぶ 前の坂道は、あぶないから、気をつけて…。

福夫 おねえちゃん、ぼくも行くよ。(エンシャーダを持つて、江崎のあとを追う。)

(のぶ、守、近藤、三人は戸口で見送る。)

近藤（大声で）だいじょうぶかい？

福夫（声だけ）ぼくがついてるから、心配するなあ！

（三人顔を見合させて笑う。）

近藤 ここから見えるけしき、きれいだなあ！

守 毎日、見ている者には、そうでもないですけど…。  
近藤 ちょっと、スケッチしておくかな。（ノートを持つて、下手の道で書き始める。）

のぶ（茶道具をかたづけながら）孝の気まぐれにも困つたものだね。

守 まあ、そつとしておいてやるんだな。あんまり、はたからやいやいや言わない方がいいんだ。

のぶ だけど、いつまでも、こんなじや困るじやないか。

守 おれ、孝の気持ちはよくわかるんだ。

のぶ …といって、いつまでも家においとくわけにいかないよ。

守 孝から見れば、おれたち、ずいぶん勝手な者のように思えるんだ。

のぶ そんなこと……、それは、孝のわがままだよ。（思い出したように）ちょっと、大竹さんへ、おわびに行つてくるよ。

守 今でなくつても、いいじやないか。

のぶ やつぱり、早い方がいいよ。義理があるからね。

近藤（スケッチをやめて、やってくる。）畑は、よっぽど

遠いんですか。

守 なに、二百メートルぐらいです。

近藤 江崎さん、へこたれるぞ、きっと。

のぶ 守、おまえ、ちょっと見てきておくれ。孝と福夫  
じやたよりないから……。

守 じゃ、ぼく、行ってみる。

近藤 ぼくも行きます。

のぶ なんといつても力仕事ですから、町の人にはむり  
です。

（遠くで、福夫の「かあちゃん」と呼ぶ声。）

守 （戸口の外に出て大声で。）どうしたんだあ！

福夫 （声だけ）たいへんだ。早く来てえ！

守 どうかしたらしい。…しようがないなあ！（下手  
に走り去る。）

（近藤も駆け出そうとしたとき、福夫が飛び込んでく  
る。）

福夫 かあちゃん。早く、早く。

のぶ どうしたの！

福夫 坂道ですべって、足折ったんだよ。

のぶ 足を折つた？ だれが。

福夫 おねえちやんだよ！

近藤 江崎さんが？ そりやたいへんだ！ 福夫 早く、  
早く。

（のぶと近藤が戸口の外に出る。そこへ江崎が守の肩につかり、びっこをひきながら来る。あとから孝がついて来る。）

のぶ どうしたんですか。

守 ちょっと、そこへ、掛けさせて上げよう。

近藤 ひどく、痛むかい？

（孝、急いで井戸に行き、バケツに水をくむ。）

江崎 （手で顔の汗をふきながら、）たいしたことはないの：。

福夫 骨が折れたんじゃない？

近藤 骨が折れていたら、歩けやしないよ。筋を違えたかな？

（孝、水をくんでくる。）

のぶ （手ぬぐいをぬらして、江崎の足首を冷やしながら

ら。）本当にすみませんね。孝がついていたのに…。

（孝だまつて隣室へ去る。）

守 とんだこと、してしまつたな。やつぱり、おれがついていくんだった。

江崎 いいえ。わたしこそ、すみません。

近藤 ぼく、宿舎へ行つてくるよ。何か薬があるかも知れない。（去る。）

（孝、出てきて心配そうに見る。）

孝 すみません。（おじぎをする。）

江崎 わたしが不注意だつたんです。悪いわ、みんなに迷惑をかけて…。

のぶ 孝、ちょっと、冷やしていておくれ。

（のぶ、台所へ行く。孝、のぶに代わつて江崎の足首を冷やす。）

守 孝、それで、肥料はどこに置いた？

江崎 すみません。ほうりっぱなしにしてきちゃつて…。

福夫 分かれ道の所に置いてきたよ。

守 そうか。なら、ちょっと行つてくる。（立ちあがり、出て行く。）

江崎 本当に悪いことしちゃった。よけいなことをして  
…。孝さん、「めんなさいね。

（のぶ、台所から、すでといたうどん粉を紙に伸ば  
しながら出でくる。）

のぶ 骨が折れたんじゃないだろうね…。お医者、呼ばな  
くていいだろうか。

江崎 だいじょうぶ。ちよつと、ねんぎしたのよ。

福夫 おねえちゃん、歩ける？

江崎 歩けるわよ。

（江崎、立つて歩き、ようよろとする。孝、支える。）

のぶ （うどん粉を伸ばした紙を、江崎の足首にはりつけ  
ながら。）福夫、何か巻くものを持つといで。

孝 ぼく、持つてくる。（急いで隣室へ行く。）

江崎 （小声で）おばさん、孝さんて、親切ね。

のぶ お天気やでね。サン・パウロへ行く前までは、そん  
なでも、なかつたんですが…。

（孝、布を持ってきて、江崎の足首を丁寧に巻く。）

江崎 これでなおるわ、きっと。孝さんありがとう。

孝 うん。

江崎 お手伝いをするなんて言つて…こんな大迷惑掛けちやつた。ごめんなさいね。

孝 :

のぶ とんでもないですよ。重い物を持たせて。こちらこそ、おわびをしなけりや…。

江崎 わたし、ほんとを言うと、この調査に来るのは気が進まなかつたの。近藤さんたちに、ひっぱられて来たのよ。

孝 やつぱり、来なかつたほうがよかつたよ。

江崎 いいえ。そうじやないの。来てみて、ほんとによかつたと思つたんです。

福夫 でも、おねえちゃん、町の方がいいだろ。

のぶ まだ、痛みますか。

江崎 いいえ。ずっと楽になつたわ。…わたし、ここへ来て分かつたんだけど、ここでは、みんな自分で働いていい。自分で、自分の幸福を作り出そうとしてるのね。だのに、わたしなんか、これまで、だれか、わたしの幸福を持つて来てくれないかなあって、待つていたんだわ。

孝 かあちゃん。横んなつて、足を伸ばした方がいいんだろ。

のぶ そうだね。少し横におなりなすつたら…。

江崎 ありがとうございます。いいえ、もうだいじょうぶです。

孝 福夫、ざぶとん持つて来い。

(福夫、隣室へ去る。)

江崎 いいんです。本当に…。

(福夫、ざぶとんを持って来る。)

のぶ さあ、遠慮しないで。

江崎 (ざぶとんを敷きながら) ひとりぼっちって、だめね、孝さん。

孝 え?

江崎 ひとりで考えてばかりいると、自信がなくなるものよ。わたし守さんたちの生活振りを見て、うらやましいと思つたわ。どうしたらいい経営ができるかと、真剣に研究してゐるんですもの。それに、みんなが協力して、いい村を作ろうと、一生懸命なんですもの…。とても、りっぱだわ。

孝 うん。(うなずく)

江崎 なんでも、相談し合うことがたいせつよ。そうすれば、きっと勇氣もでてくるのよ。

(近藤、救急箱を持つて、戻ってくる。)

近藤 みんな、出かけちやつて、だれもいないんだよ。分からないから箱ごと持ってきた。

江崎 おばさんに、手当てしていただいて、もうよくなつたわ。

近藤 そう。そりやあよかつた。

のぶ もう一度、しつぷ、とりかえましょうか。

近藤 助かつたね。びっこなんかひいて帰つたら、しかられるところだよ。

江崎 びっこになつたつて、平氣よ。勉強はできるし、仕事だつてできるわ。

(孝、ほうたいをしている指をじつと見る。)

のぶ いつお帰りですか。

江崎 調査もひと通り終わつたので、あした帰る予定です。

孝 あした?

(調査班の学生が、三四人、歌を歌いながら通りかかる。)

福夫 おねえちゃん。帰つたら手紙くれる?

江崎 ええ、あげるわよ。福夫ちゃんもちょうだいね。

学生 1 おうい、何してんだ？

学生 2 油を売つてちやだめだぞう！（にぎやかな笑い声）

のぶ（学生たちに）忙しいでしよう。あしたお帰りでは？

学生 3 どうも、いろいろお世話になりました。

学生 4 お借りしたもの、あとで持つてきます。

のぶ また、近いうちに、入植祭がありますから、皆さんで来てください。

学生 1 ありがとうございます。また来ます。

学生 3（江崎と近藤に）じゃ、先に帰つてるよ。これから、報告書をまとめるから…。

（学生たち去る。）

のぶ みんな仲がいいんですね。

近藤 ええ、みんな仲間ですからね。（江崎に）ぼくたちも、そろそろ帰ろうか？

江崎 ええ。

福夫 おねえちゃん、歩ける？

近藤 ぼくにつかまつておいでよ。（江崎、近藤につかまつて歩き出す。）

のぶ だいじょうぶです。

江崎 おばさん、いろいろありがとうございました。皆さん、さようなら。

福夫 ねえちゃんたち、帰ってしまうのか、つまんないなあ。また来てね。

近藤、江崎（振り向いて）さようなら。

（のぶ、福夫、戸口の所で見送る。孝あとから戸口の外に出る。やがて、ポケットからハーモニカを取り出し、静かに『夕空晴れて』の曲を吹き始める。）

# しあわせの歌

石原健治 作詞

①

しあわせは おいらの願い  
仕事は とっても 苦しいが  
流れる汗に 未来をこめて  
明るい社会を つくること

(繰り返し) 「みんなと歌おう しあわせの歌を

ひびく こだまを 追ってゆこう

②

しあわせは わたしの願い  
甘い思いや 夢でなく  
今の今を より美しく  
貫き通して 生きること

③

しあわせは みんなの願い  
朝やけの 山河(さんが)を守り  
働くものの 平和の心を  
世界の人々に しめすこと

## 故郷の空

大和田（おおわだ） 建樹（たけき） 作詞

① 夕空晴れてあきかぜ吹き

つきかげ落ちて 鈴虫（すずむし）なく  
思えば遠し 故郷のそら

② ああわが父母 いかにおわす  
すみ行く水に 秋萩（はぎ）たれ  
玉なす露は すすきにみつ  
思えば似たり 故郷の野辺

ああわが兄弟（はらから） たれと遊ぶ

知は生命の泉なり。

（ソロモン）

知は愛なり。

（プラトン）

知識は実験の娘である。

（ダ・ビンチ）

知識と勇気とは偉大な仕事を造る。

（エマーソン）

## 知識を深める

熱と温度

燃焼と爆発

磁石と電気

機械とエネルギー

自動車工場を見る

### 一 热と温度

先生 「きょうは、熱と温度について実験してみよう。」

(先生は水を入れたフラスコを、アルコール・ランプにかけて、暖め始めました。水は、かさがふえて、フラスコの口から、あふれ出ようとしましたが、火を消すと、水は、もとの高さになりました。

先生 「熱したら、水はどうなったかね。」

生徒 「水はふえて、あふれそうになりました。」

先生 「火を消すと、もとの高さになつたのだから、ふえたのではなくて、容積が大きくなつたのだ。これを、膨張という。物は暖めると膨張する。そして、反対に冷やすと ちぢむ。ちぢむことを収縮といふ。」

生徒 「鉄も膨張するんですか。」

先生 「もちろん。汽車の線路を知っているだろう。あの線路の継ぎ目を見ると

(122.jpg。横表記、横書き)

よく分かる。夏の暑いころには、きつちりとくつついているが、寒い冬になると、離れている。空氣でも、木でも、暖めると、皆膨張する。」

生徒 「先生、冬は、なぜ寒いのですか。」

(線路の話につられて、ひとりの生徒が、とっぴな質問をしました。)

先生 「冬になると太陽は北の空を通る。だから昼が短く、照らし方も弱くなる。そのため、地面が太陽から受ける熱が少ないので寒いのだ。」

生徒 「冬でもひなたは暖かです。」

先生 「冬でも、太陽の光を直接受けると暖かいが、空気の温度は日かげとあまり変わらないのだ。みんな、たき火をしたことがあるだろう。たき火の熱を直接受けている所は暖いが、そうでない所は暖かくない。このように、熱が間にある物の助けを借りないで、直接に移ることを熱の放射という。ひなたぼっこをしたり、たき火に当たると、暖かいのは、熱の放射を受けるからだ。熱の伝わり方には、放射のほかに伝導と対流とがある。」

(先生は、こういって、また、アルコール・ランプに火

をつけ・鉄の火ばしのはしをちょっと暖めました。)

先生 「こうすると、熱は、向こうの端からだんだん移つて、手もとの方まで熱くなる。熱が物の一部から、他の部分へ移ることを、熱の伝導という。鉄や銅などのような金属は熱をよく伝導する。それで、これらを熱の良導体というのだ。」

生徒 「木も良導体ですか。」

(先生は、マツチを出して、生徒にすらせました。)

先生 「軸の方も熱いかね。」

生徒 「いいえ、熱くありません。」

先生 「熱くないということは、木が良導体ではないということだ。木の外に、コルク、毛、綿、紙、空気、水なども、熱をよく伝導しない。それで、これらのような物を熱の不良導体という。」

生徒 「水は熱くなるのですから、良導体じやないですか。」

先生 「良導体かどうか、実験してみよう。そして、熱は水に、どのようにして伝わるかも調べてみよう。」

(先生は、水を入れた大きなビーカーを持ち出しました。それに おがくずを少し混ぜ、三脚に乗せて、ビーカーの底を、アルコール・ランプの小さな炎で暖めました。)

先生 「だれか、水の中に指を入れてごらん。」

(ひとりの生徒が、ちょっと指を入れました。)

先生 「熱いかね。」

生徒 「熱くありません。」

先生 「底の方は？」

生徒 「熱いです。」

先生 「熱は、まず伝導によつて、ビーカーの底に移り、続いて、底に触れている水に移る。こうして、暖めていくと、だんだんに水全体が熱くなる。ところで、水がどうのようになつて熱くなるか、おがくずの動きを見ればよくわかる。」

(ビーカーの底の方にあるおがくずは、ビーカーの縁に沿つて上に上り、反対側の縁に沿つて下ります。そして、おがくずは、ビーカーの中をぐるぐる回り出しました。先生「このおがくずの動きは、暖められた水の動きを示しているのだ。こうして、しまいには水全体が暖められる。このように液体や気体が入れかわることを対流といふ。対流によつて、ビーカーの水は暖まつたのだ。」

生徒 「あつ、分かった。おふろの沸き方が同じですね。」

先生 「そうだ。水は熱の不良導体だが、対流によつて暖まる。熱は放射により、伝導により、また対流によつて、物の温度を高くする。今度は温度について、調べてみよう。」

(先生は水のはいったビーカーを、アルコール・ランプ

で熱しました。すると、白い湯気が立ち始めました。先生はランプの火を消しました。」

先生 「水を暖めたらどうなったかね。」

生徒 「沸き立ちました。」

先生 「沸き立つことを沸騰というのだ。そして、湯気になつて立ち上ることを気化といい、また、蒸発ともいう。水のような液体は、温度が上がると、沸騰し、気体となつて蒸発する。では、いったん気体となつたものを冷やしたらどうなるだろう。」

生徒 「水になります。」

先生 「そうだ。これを気体の液化という。もつと冷やすと、どうなるだろう。」

生徒 「氷になります。」

先生 「そのとおり。液体の固まることを凝固という。水が凝固することを氷結ともいうのだ。凝固して固体になつたものを、また暖めたらどうなるだろう。」

生徒 「また、水になります。」

先生 「固体が溶けて液体になることは融解という。液体が沸騰する温度を、沸点といい、水の沸点は、摂氏百度（100°C）である。それから、水が氷結したり、氷が融解する温度は零度（0°C）で、これを氷点というのだ。摂氏の温度計は、水の沸点と氷点との間を百等分して目盛りをつけたものなのだ。これが、その温度計だ。」

(先生は、こう言つて温度計を取り出し、ビーカーの湯につけました。すると赤い線がすっと上に伸びて止りました。)

先生 「みんなの家にも、気温を計る寒暖計というのがあるだろう。それと、この温度計は同じものだ。なん度あるか、目盛りを見てさらん。」

生徒 「四十三度（ $43^{\circ}\text{C}$ ）です。」

先生 「 $43^{\circ}\text{C}$  というと、おとなにちょうどよいおふろの温度だよ。」

生徒 「ぼくのうちの寒暖計には、CとFのふたとおりの目盛りがあるのですが、なぜですか。」

先生 「そのFの方は華氏の目盛りで、Cの方は摂氏の目盛りだ。華氏の32度が摂氏の0度で、華氏の212度が、摂氏の100度になつていて。普通には、摂氏の目盛りが使われているが、華氏の目盛りを使う国もある。」

生徒 「体温計にも、摂氏と華氏の目盛りがありますか。」

先生 「どちらもあるが、たいてい摂氏の目盛りで、ブルジルでも日本でも、摂氏の方を使つていて。摂氏の目盛りの体温計は35度から40度まで目盛りがついていて、37度が赤線になつていて。健康な人の体温は36度から37度の間なので、37度を越していたら、からだのどこかが悪くなつていてるのだ。」

生徒 「中に入れてある液体はなんですか。」

先生 「一般に、温度計のは赤い色をつけたアルコールで、体温計のは水銀だ。これから、みんなも毎朝決まつた時間に寒暖計で気温を計り、メモを取つてごらん。気温の変化が分かつておもしろいよ。」

生徒 「物を暖めても、その物の重さは変わらないんですねか。」

先生 「熱は、何に移つても、その物の重さを変えることはない。しかし、熱の分量を計ることはできる。」

生徒 「熱の分量は、どんなにして計るのですか。」

先生 「 $1\text{ g}$  の水の温度を1度高めるのに必要な熱量を1カロリーという。このカロリーを単位として、熱の分量を計るのだ。」

(先生はビーカーに水を $100\text{ g}$ 入れ、アルコール・ランプで熱しました。そして、水の温度を生徒に計らせました。目盛りは $50$ 度になつていきました。)

先生 「 $100\text{ g}$ の水の温度を $50$ 度高めるのに、なんカロリーの熱量を必要としたかね。」

生徒 「 $100$ の $50$ 倍で $5000$ カロリーです。」

先生 「そうだ。そのようにして計るのだ。」

生徒 「木炭 $1\text{ g}$ を燃やすと、どのくらいの熱量が出ますか。」

先生 「木炭で、約 $7000$ カロリー、石炭で、約 $800$ 0

0カロリー、石油だと、約100000カロリーだ。それから、原子爆弾だったら、1gで一千億カロリーと言わっている。すごい熱量だね。カロリーについて話せば、まだいろいろあるが、きょうは、ここまでにしておこう。」（生徒たちは、一千億といつたら1の次に0が幾つつくだろう、などといつて、数字に直してみたりした。）

## 二 燃焼と爆発

### 燃 焼

どんなに燃えやすい物質でも、空気中にあるだけでは燃えない。物質が燃えるためには、ある温度以上に熱せられなければならない。物質を燃やすために必要な最低の温度を、その物質の発火点という。

発火点は物質の種類によつて違う。

金属板の上に、同じ量の赤（せき）りん、木炭、いおうなどの粉をのせ、その中間を熱して、どれが早く発火するか、実験してみる。物質の発火点は、だいたい決まっているが、条件によつて多少違つてくる。

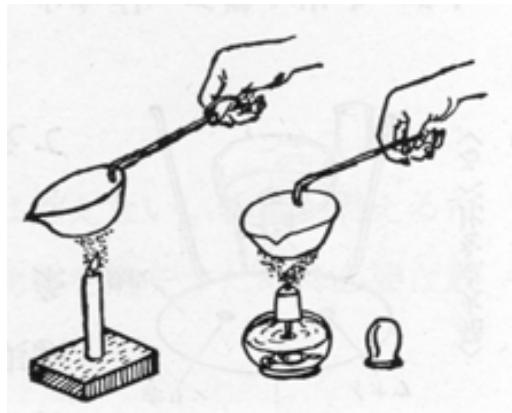
火の付いているものでも、発火点以下に冷えると消えてしまう。

液体の燃料は、発火点以下でも、そばに火があると、

火を引いて燃え出す。それは、回りに、その蒸気が出ているからである。燃料に火を近づけたとき、火を引いて発火する最低の温度を、その物質の引火点という。 気体が燃えるときは炎ができる。

石油、アルコールなどの液体や、ろうそく、木などの固体が燃えるときにも、炎が出るのは、気温物質ができて、それが燃えるからである。

ろうそくとアルコール・ランプとの炎を比べてみよう。



「次のものを用意する」 ろうそく アルコール・ランプ  
じょうはつざら さらをはきむもの 木炭の粉

(1) ろうそくの炎と、アルコール・ランプの炎との明るさを比べる。(ろうそくは、炎がアルコール・ランプと同じくらいの大きさになるものがよい) (2) 両方の炎のま

んなかの部分に、じょうはつざらの底を当てて、どうなるかを見る。（あてる前に、底のきれいなことを確かめる。）（3）アルコール・ランプの炎の上から、木炭の粉を落として、炎の様子を見る。

1 ろうそくの炎の方が明るい。

2 アルコール・ランプの炎の中に入れたものには変化はないが、ろうそくの炎の中に入れたものには・すすがついていて黒くなる。

3 アルコール・ランプの炎が、ろうそくの炎のように明るく耀く。

この実験で分かるように、細かい粉が炎の中にあるときは、炎が明るくなる。ろうそくの炎の中に、細かいすすがあることは、実験（2）でわかった。ろうそくの炎が明るいのは、すすのためである。アルコール・ランプの炎の中には、すすがないから暗いのである。

### 燃焼の条件と消火

第一に、燃える物、すなわち酸化されやすい物質があること。

第二に、物質が発火点より高い温度に保たれること。

第三には、物質に十分な酸素（空気）が与えられること。

これらの三つの条件のうち、一つでも欠けようと、燃焼は起こらない。従つて物の燃焼をとめるには、これらの条件の中のどれかを除けばよいわけである。

木材は、酸化されやすいから、薬品をしみ込ませたり、モルタルを塗つたりして、酸化されにくくする。これは、第一の条件をなくすためである。水は物を冷やすには、よい性質を備えているから、水をかけると燃えている物や燃えようとするものの温度を下げて、燃焼を妨げる。また砂をかけるのは、第三の、空気（酸素）と物質との接触を断つためである。

### 爆 発

びんにガソリンを一滴入れ、せんをしてよく振つてから、せんをとり、びんの口にマッチの火を近づけると、軽い音をたてて一気に燃える。

爆発とは、燃焼が急速に行なわれることである。

一般に、燃えるガスと空気とが、ある割合に混合している所へ、火をつけるか、温度をあげるかすると、全体が一時に燃えて、きわめて高い圧力を生じる。この現象をガスの爆発という。

密閉したシリンドラーの中で、燃える气体と空気との混合气体を爆発させると、燃焼してできたガスの圧力は、非常に高くなるから、その力でピストンを動かすことが

できる。これを連續的に行なつて動力を得る仕掛けが、内燃機関である。

このほか、爆発を利用するものにダイナマイト、黒色火薬などがある。これらの火薬は、爆発するときの力で、鉱山の坑道を掘り進めたり、山を切り開いたりする土木工事に広く用いられている。信号や花火にも、火薬の爆発を利用する。火薬はたいせつなものであるが、扱い方を誤ると危険が大きいので、注意しなければならない。爆発を起こさないためには、爆発性の混合ガスを作らないことと、燃えるガスがもれる危険のある場所では、とくに火に気をつけることが必要である。

炭坑では、坑道内で爆発が起こり、多くの死傷者を出すことがある。これは、炭層の中から出るメタン（炭素と水素の化合物でよく燃える気体）や、石炭の粉のためである。石炭の粉やメタンの多い炭坑では通風をよくして、爆発が起こらないようにしている。

### 三 磁石と電気

#### 磁 石

2本の縫い針と磁石とを用意してください。磁石には、NとSの印がつけてあります。初め1本の縫い針の糸

を通す方をNの方でこります。次に針先の方をSでこります。こすり方は、同じ方向になん回も丁寧にこります。

こんどは別の針に、今、磁石でこすった縫い針を近づけてみましまう。引きつければ磁石になつたのです。次に洗面器に入れた水の中に、薄いコルクの一片を浮かし、その上に今こすつた縫い針を置きます。しばらく左右に動いていますが、やがて南北をさして止まります。縫い針は、もう完全な磁石なのです。

このように、磁石は、鉄を引きつける性質と、南北をさす性質とを持つています。

磁石が鉄を引きつける力を磁力と言います。磁力はN極とN極、S極とS極は退け合い、N極とS極は引きあう働きを持っています。

次に、どうして、縫い針が磁石になつたのか、それにについて考えてみましよう。

磁石になる金属は、鉄、ニッケル、コバルトの3種に限られています。今、磁石になつてゐる鉄を、N極とS極の二つに切り離そうとしても、それはできません。磁石になつてゐる縫い針を細かく切つてみても、その一つ一つの両端は、やはりN極とS極になつています。

このことから考えて、磁石というのは、ごく小さな磁石の集まつたものだと、いうととができます。この小磁

石は、磁石になつていない鉄の中にもあります。しかし、その小磁石は、皆、勝手な方に向いているので、N極とS極が互いにその磁力を打ち消し合うため、磁石としての性質を現わさず、鉄を引きつけないのです。ところが、磁石になつた鉄では、小磁石のN極とS極の向きが、きちんと同じ方向にそろつてしているので、鉄を引きつける力を現わすのです。このような磁力を持つものを永久磁石といいます。これらは、がんぐ、家庭用品、らしんばんなどに用いられています。

永久磁石のほかに、電磁石というのがあります。これは、コイルに電気を流したもので、コイルというのは、針金を輪形に卷いたもので、これに電気を流すと、磁石と同じ働きをして、鉄やニッケルを引きつけます。コイルの巻き数をふやしたり、コイルの中に軟鉄の棒を入れると、磁石は、いつそう強くなります。電磁石は、電気を流したり、止めたりすることによつて、磁力を調節できるので非常に便利です。電磁石は、モーター、ラジオ、電信、電話、その他多くの機械、器具に利用されています。

## 電 気

小さな銅板にトタン板、吸い取り紙、銅線、登山用磁石を用意しましよう。銅板とトタン板との間に、食塩水

でぬらした吸い取り紙を入れます。これで簡単な電池ができます。電気が起こっているか、どうか、手製のメーターで調べてみましょう。手製のメーターは、登山用磁石の磁針に重ねるようにして、絶縁した銅線を幾巻きかりつけます。すると、磁針は動いて、その位置を変えます。それは、電気の流れている証拠です。このようにして、起こった電気を接触電気といいます。

このほか、電気は摩擦によつても起こすことができます。ガラスを絹で摩擦したり、エボナイトを織物でこすつたりすると、電気が起ります。電気には、プラスとマイナスがあり、そして、プラスとプラス、マイナスとマイナスはしりぞけ合い、プラスとマイナスは引き合う性質を持つています。

そのほか、電気には、ものを分解する性質もあります。これを電流の化学作用といいます。水に電気を通すと、水を水素と酸素に分けることができます。それはもともと、水は、水素の持つプラスの電気と、酸素の持つマイナスの電気とが引き合って化合したものだからです。

電気は、どこにでもあるものです。そこで、人類は、水力や火力を用いて電気を起こしたり、ためておく装置を考え出したりしました。こうして、大量の電気を起こ

して、照明、交通機関、機械工業、化学工業、その他家庭器具にいたるまで、これを応用しています。

#### 四 機械とエネルギー

今日、わたしたちは、非常に便利な生活をしています。それは、いろいろな機械を利用しているからです。わたしたちは、ただの一日も、なんの機械も利用しないで過ごすことはできません。

これらの便利な機械は、どれ一つとして、やすやすと発明されたものではありません。機械は、人間の歴史的な成長とともに発達してきたのです。多くの研究者、発明家のたゆまぬ努力と苦心とによつて製作され、また改良が加えられてきたのです。

自然の法則を知り、事物の性質や原理をきわめ、それらを応用して、機械は発明されます。てこ、滑車、歯車、ねじ、ばねなどを組み合わせ、その働きを応用して製作されるのが機械です。その機械に仕事をさせるには、外から必要なエネルギーを与えなければなりません。機械は、エネルギーを仕事に変えるだけの仕組みを持つものです。

それでは、機械に仕事をさせるエネルギーとはなんですか

しよう。一本のばねがあります。それを押し縮めると元の長さに伸びようとし、引き伸ばすと、元の長さに縮もうとします。小石がころがっています。それを投げると飛んで行きます。もし、そこに家の窓ガラスがあれば、ガラスをこわします。このように、押し縮められたばねや、飛んでいる石は、何かをする力を持つています。このようなとき、ばねや石は、エネルギーを持っているといいます。だから、エネルギーとは、仕事をする力ということができきます。

エネルギーには、いろいろあります。ばねのように、のばしたり、縮めたりすることによつて、起こるエネルギーは、位置のエネルギーといいます。飛んでいる石のようない、その速さによつて起こるエネルギーは、運動のエネルギーといいます。

爆発するようなものは、化学エネルギーといい、電池の持つているようなものは、電気エネルギーといいます。そのほか熱のエネルギー、光や音を出すエネルギーなどもあります。

エネルギーは、自然の中に、いろいろ違つた形でひそんでいます。太陽の持つエネルギーが水を暖めると、水は熱のエネルギーを持ちます。そして空に上つて雲となり、雨となつて落ち、ダムにたくわえられて、位置のエネルギーに変わります。

ダムから流れ落ちる水は、水車を回して、運動のエネルギーに変わります。水車が回ると、発電機が電気を起こし、電気のエネルギーに変わります。電気は電熱器によつて、熱のエネルギーに変わります。電気は電熱器によつて、熱のエネルギーに変わります。電気は電熱器によつて、光のエネルギーに変わり、ラジオによつて、音のエネルギーになります。このように、エネルギーは、いろいろの種類に移り変わります。

人間が、エネルギーを動力として利用してきた歴史を見ると、次のように分けることができます。すべて、人の力で物を動かしていた人力時代、家畜の力や風、水などの力を利用した畜力・風水力時代、次は、外・内燃機関、電気による電動機時代です。現代は、この時代といえますが、既に原子力が発見され、ぼつぼつ動力として利用され始めましたので、間もなく原子力時代がくるでしょう。

次に、今日機械を動かす動力として、最も多く利用されている機関について書いてみましょう。

機関には、外燃機関と内燃機関があります。外燃機関というのは、蒸気機関や蒸気タービンなどのように、エンジンを動かすための蒸気が、シリンドラーとは別の所で作られる機関のことです。内燃機関というのは、シリンドラーの中でガスを爆発させてエンジンを動かす機関のことです。

今日使われている内燃機関は、大きく次の三つに分けることができます。ガソリン・エンジン、ジーゼル・エンジン、そしてガス・タービンです。

ガソリン・エンジンは、ガソリンに空気をまぜて、シリンドラーの中に送り、それを爆発させてピストンを動かします。これは、自動車や飛行機などに使われています。ジーゼル・エンジンは、シリンドラーの中に圧縮した空気を送り、重油とか軽油などを霧のようにして、その中に吹き込んで爆発させ、ピストンを動かします。この機関は、音や震動が激しいので、乗用車や飛行機などには不適当ですが、発電機とか汽車、汽船などには多く用いられています。

ガス・タービンは、石油や粉にした石炭を燃やしてガスに変え、それを吹きつけて はね車を回し、動力を起こします。最近、ガス・タービンの利用が盛んになり、火力発電機に多く使われています。ジェット機のエンジンにも、ガス・タービンが使われています。

それでは、どのようにして、動力を起こすのか、ガソリン・エンジンについて調べてみましょう。

ガソリン・タンクの中のガソリンは、ポンプで気化器に送られ、ここで空気を混合し、ガスになります。シリンドラーの中にあるピストンが下がると、吸入弁が開いて気化器の中のガスが、シリンドラーの中に吸い込まれます。

シリンドラーの中にガスがいっぱいになると、吸入弁がしまり、ピストンが上がります。圧縮されて温度の高くなつたガスは、点火せんから出た火花で爆発します。この爆発したガスが、ピストンを押し下げます。するとピストンに取り付けてあるクランクが はすみ車を回し、ピストンは再び押しあげられ、シリンドラーの中にあるガスの燃えがらを排気管の方へ押し出します。

一回の動作が吸入、圧縮、爆発、排気の四行程に分かれており、この行程がくり近されて、はすみ車につながつて いる機械は動くのです。このように、一回の動作が四行程に分かれているエンジンは、四サイクル機関と言われ、自動車や飛行機は、多くこれを用いています。

このほか、小形のガソリン・エンジンには、四行程のうち、排気と吸入とを同時に行なう二サイクル機関もあります。オートバイ、スクーターなどに多く使われています。

自動車が流れるように走るのも、飛行機がすばらしい速さで空を飛ぶのも、またトラクターが、ぐんぐん畑を耕すのも、皆、エンジンの働きによるのです。シリンドラーの中で、ガスが爆発して、ピストンを押し上げる力は、実にものすごいものです。ピストンの上画一平方cmにつき、35kgの物を動かす力がかかると言います。ピストンの直径が15cmぐらいとすると、一回のガス

爆発で、おとな100人を動かすと同じくらいの力が生じるわけです。

## 五 自動車工場で

ぼくは、冬休みを利用して、サン・パウロ市に住むおじの家に遊びにきている。博物館や動物園に行つてみた。方々の公園や湖でも遊んだ。サントスで海水浴もした。皆、ぼくにとつては初めてのことなので、珍しく、また愉快であった。

ぼくは、サン・パウロ見物のついでに、自動車工場も見学したいと思っていた。というのは、おじが外国系の大きな自動車会社に技師として勤めているからだ。

おじの勤めている会社は、約十年前に、資本金百億クルゼイロで創設されたもので、ブラジルでは、大会社の一つに数えられている。現在コツビ、セダン、カルマンギアの三種の自動車を製作し、年産五万五千台である。工場の敷地は約七十三万平方メートル、現在、施設の占めている面積は、約二十万平方メートルである。

会社は、まだ発展の途上にあつて、工場はどしどし増築されており、ここ二、三年内には、年産十万台にまで、生産は上昇する見込みだそうだ。

従業員の総数は、約一万人で、そのうち工員は約七千五

百人である。工場内には、従業員のために、いろいろな施設や組合がある。そのうちのおもなものは、医療施設、消費組合、食堂施設などで、その他、工員の通勤の便を計るために、毎日、会社専用のバス、コンビ合わせて百台を動かしている。

その朝、いつものように、おじは乗用車のエンジンをかけていた。ぼくが助手席に乗り込むと同時に車は走り出した。しばらくすると、車は市街を通り抜けて、広いアスファルトのかい道に出た。

やがて、車は工場の正面入り口に着いた。緑の丘を後ろにして、幾むねとなく続いている工場の建物に目を見張つた。会社のマークを胸に付けた作業服の工員や、軽快なセダンを乗りつけてくる職員を見ても、その顔は皆、活気にあふれていた。

おじは、ぼくを応接室に待たせておいて、事務室にはいつていった。しばらくすると、六十歳ぐらいの優しそうな人といっしょに出てきて、その人にぼくを紹介した。

「わたしは、案内ができないので、この人に頼んでおいた。この人は工場のことはなんでも知っているから、よく説明してもらいたいなさい。見学がすんだら、ここで待っていなさい。いつしょにご飯を食べよう。では、気をつけて……。」

ぼくを案内してくれる人は、にこにこしながら、ぼくの

家や学校のことなどを少し尋ねた。ぼくの返事をうなづきながら聞いていたが、先にたつて工場の方へ歩きだした。

工場は幾つもの部品工場に分かれていた。ちょっと数えただけでも十三もの工場があつて、それぞれ分業で部品を作り、さらに、その部品を組み立て工場に集めて、自動車を組み立てるのだった。

最初に、各部品を作る工場を見学した。なん十トンもある大きな機械が幾台も並んで、それぞれ動いていた。

鉄板を型でおし、エンジンのふたや、どろよけなどを作っているプレス工場、まっかに焼いた鉄材を空気ハンマーでたたきのばしている鍛造工場、どろどろに溶かした鉄を鋳型に流し込んでいる鋳物工場、エンジンを組み立てているエンジン工場、車体組み立て工場、その他多くの工場を見て回つた。鉄を切る音、たたく音、機械のうなりで、耳が痛くなるほどだった。

最後に、ぼくは、総組み立て工場に行つた。ここで、自動車ができ上がるのである。仕事は流れ作業になつていて、部品がコンベイヤーに乗つて次々と動いていく。働く人は、いつも同じ場所にいて、同じ仕事を繰り返せばよいのである。流れ作業なので、車輪やハンドルを取りつけるのも、窓わくをはめるのも、すべて手早くしなければ、あとがつかえてしまう。工員が、慣れた手つきで、さつさと

組み立てていた。

シヤーシートと言う車台が組み立てられる。エンジンや車軸が取りつけられる。その間にも、コンベイヤーが少しずつ動いていくと、車体が上からおりてきて、すっぽりとかぶせられる。次に車輪が取りつけられると、コンベイヤーが終わりになる。ガソリンを入れると、自動車は走ることができ。テストをする人が乗り込んで、テスト・コースを走らせていく。ここでは、エンジンの調子や、車輪の具合などが調べられ、どこにも欠点がなければ完成品として、自動車置き場に並べられる。

案内してくれた人の話では、現在、約五分ごとに一台ずつの自動車が作られ、日産二百五十台だとのことである。おもしろいように、自動車が組み立てられていくのを見ていると、時間のたつのも忘れるほどだつた。

気がついてみると、もう十一時過ぎであつた。ぼくは二時間以上も、工場を見学したわけである。応接室に帰つて、案内してくれた人にお礼を言つて別れた。

しばらくすると、おじがやつてきた。

「どうだつた。おもしろかったかね。」

「はい、いくら見ても飽きないくらいでした。」

「それはよかつた。さあ、お昼ご飯にしよう。」

おじは、工場の食堂に連れていつてくれた。

「この工場には、食堂が三つある。ここは職員食堂で、右

が来客用の食堂、左の大きいのは工員食堂だ。ちょっと見  
るかね。」

おじについて廊下に出て、右と左の食堂をのぞいてみ  
た。まつ白で、清潔そうな食卓がずらりと並んでいた。  
もとの食堂に帰つて、食卓に着くと、いろいろなごちそ  
うが出た。

「どうだ。うまいだろう。」

「おいしいですね。ごちそうもいいけど、ぼく自動車が  
欲しくなつたなあ。」こう言うと、おじが言った。

「そうだろう。ずらりと並んでいる自動車を見ると、だ  
れでも、そう言うよ。」

「あんなに簡単に、どんどんできるんだもの。」

「簡単か、なるほどね。」

ぼくたちは、顔を見合わせて笑つた。

ジエームス・ワットは蒸気機関を発明したので、近代産  
業の父と言われています。蒸気機関発明のいとぐちと  
なつたのは、次のようなことでした。

ある朝、お湯の沸きたぎつている鉄びんを、流し場に  
持つていき、口を押えて上から冷たい水をかけました。す  
ると、鉄びんのふたは、いくらひっぱつてもそれませんで  
した。「蒸気が冷やされて水に戻つたため、体積が急に少  
なくなつて、中が真空になつたからにちがいない」と考え  
ました。この考えつきが、蒸気機関発明のいとぐちになつ

たのです。

科学というものは、結局、人間精神の財産の一つである。その点を忘れては、科学の本質も、その機能も、ともに理解することはできない。

（中谷宇吉郎）

## 伝記に学ぶ

### 一 ラジウムの発見者

一八九一年の秋、ポーランドのワルシャワ駅から、すり切れたマントにくるまつたひとりの娘が、パリ行きの汽車に乗り込んだ。身なりは粗末だが、目は輝き、いかにも喜びにあふれていた。見送り人はたつたひとり、年老いた父親だけであった。

かの女は、女学校を卒業してから八年、一家の暮らしを助けながら、家庭教師などをして、大学にはいるための費用をため、やっと、それができ、あこがれのソルボンヌ大

学に向かうところなのである。

この娘が、後にラジウムを発見したマリー・キューリーである。

大学にはいつてからのマリーは、勉強、勉強と、食事の時間も惜しむほどであった。お金が十分に無いので、生活は実に苦しかった。暗い屋根裏のへやに、折り畳みの鉄の寝台と、小さなストーブ、机といす、それに洗面器と食器、安物の石油ランプ、そんな物しかなかつた。石炭も石油も、思うように買えず、食べ物は、バターを塗つたパンとお茶で、なん週間もがまんしたりした。近くのミルクホールで、卵を食べたり、チョコレートや、くだもの一つも買うのは、月になん度もなかつた。交通費を儉約するために、どんな天気の悪い日でも、大学まで歩いて通つた。

そのころ、姉のブローニヤは結婚して、パリに住んでいた。妹のマリーが、こんな生活をしていることを聞き、むりやりに、自分の家に連れて帰つた。ごちそうを食べさせたり、休養させたりしたが、三日とは滞在せず、元の屋根裏のへやに帰つてしまつた。

こんな生活の中で、一八九三年には、物理学の学士試験を一番でパスし、続いてその翌年、数学の学士試験を一番でパスした。かの女の勉強ぶりが、どれほどのものであつたか、想像することができる。

ピエル・キューリーは、一八五九年、パリのキュビエ街で生まれた。父は、学者として立ちたい希望を持っていたが、生活のため開業医になっていた。仕事の合間に、結構について研究したり、実験したりしていた。この父のもとに育つたピエルは、科学的に物を見、理論を実験によって確かめねば気がすまぬ探究心の強い少年に成長していった。理科や数学は群を抜いてよくでき、十六歳で大学の理科試験にパスし、十九歳でソルボンヌ大学の助手になつた。兄のジャックが、鉱物教室の助手をしていたので、いっしょに水晶の結晶について研究を始めた。そして、超音波を出す水中聴音機の土台になつている水晶発振器の原理を発見した。これは、科学史に残る重要な発見である。

その後、ピエルはパリの理科学校の実験主任になつた。新設された実験室の整備は、なかなか容易なものではなかつたが、そのかたわら研究だけは休みなく続けていった。数年して、「キューリー式てんびん」を発明した。ごくわずかな分量の物質を正確に、手早く測るばかりである。また物質の磁気についての法則を発見した。ピエルの名は、だんだん知られていったが、地位には恵まれず、收入は少なく、生活は苦しかった。

マリーとピエル。ポーランド生まれの貧しい女学生と、

実験と研究に明け暮れている貧乏科学者、このふたりが結ばれたのは、一八九五年であった。財産と名のつくものは、親類から贈られた金で買った一台の新しい自転車だけであった。この一台の自転車が、後の彼らの生活に、どれほど大きな役割を果たしたかわからない。朝夕の通勤にはもちろん、休日には、田園や山野に、この自転車のおかげで、楽しい思い出をつくることができたのである。

一八九五年、「X線」が発見され、電子の研究も盛んになり、科学界は、急速に発達した。イタリアのマルコニーは無線電信を発明した。アインシュタインやプランクのような偉大な科学者が現われて、次々と新しい発見がなされた。中でも、ドイツの学者レントゲンが発見した線のようないくつかの放射線を発する物質を捜し出す研究に、科学者たちは熱中した。

キューリー夫妻は、ピエルの友人アンリ・ペクレルの研究しているウラニウム塩の研究をいつしよにやることにした。理科学校の校長のはからいで、学校の敷地のすみに建つてある倉庫を研究室としてもらうことができた。屋根はこわれ、床も満足でなかつたが、夫妻にとつて、自由に使用できる研究室を持つたことは、何よりも喜びであつた。研究心は、ますます燃え上がつた。

目に見えない放射線を出す働き、この放射能の研究にふたりは取りかかつた。さつくトリウムという、ウラニ

ウムより少し軽い元素について調べ始めた。予想どおり、放射線を出していることが分かつた。こんどは、ウラニウムやトリウムを含む鉱物を研究してみた。すると、予想以上に多量の放射線を出していることを発見した。そして、これは何か特別の物質があるのでないかとの疑問を持った。新しい元素かも知れない。ピエルとマリーは、毎日議論を戦わし、実験を繰り返し、およそ二年間、ふたりはこの研究に没頭した。朝から晩まで、ふたりが話すことといったら、元素と放射能と実験のことしかなかつた。身も心もさきげなくしたふたりの研究によつて発見された新しい元素、それがポロニウムとラジウムである。ポロニウムは、マリーの祖国ポーランドを記念してつけられた名である。

この世界的な発見は、パリ、ローモン街の理科学校の倒れかかつたきたない、倉庫の中でなされたのである。

ラジウムを発見して、ピエルとマリーの名は世界中に知れ渡つたが、生活の方はいつこうによくならなかつた。マリーは女子高等師範学校で講義をし、ピエルは理科学校の教授になつたが、ただ忙しいばかりだつた。なんとかして、自分たちの実験室を持ちたいというのが夢であつたが、実現の可能性は少しもなかつた。ピエルは、ぐち一つこぼさない人だつたが、たつた一度、こんなことを言つた。

「ぼくたちの選んだ道は、つらいことだけだね。」

マリーは、「いいえ、やがては……」と答えようとしたが、自分としても、何一つ将来の見込みは立たず、それに、ピエルの健康がすぐれないのを知っていたので、ただの気安めに過ぎない うそをつく勇気はなかつた。

「ピエル、わたしたちのうち、もしどちらかが死んだら、残つた者は生きていませんわね。」

ピエルは、静かに首をふつた。

「それはいけない。どんなことがあっても、たとえ、魂の抜けがらになつたとしても、やつぱり研究は続けなければいけない。」

このことばは、マリーの胸深く刻みつけられた。

一九〇三年、キューリー夫妻は、友人ペクレルといつしょに、ノーベル物理学賞を受けた。一九〇五年、ピエルとマリーは、ストックホルムに行き、記念講演をした。そのとき、終わりの方で、こう言つている。

「悪の手にかかるれば、ラジウムは非常に危険なものになるかも知れません。ノーベルが発見した爆薬がよい例です。あの強力な爆薬の力は、驚くべき働きをします。もし、人々を戦争に引き込もうとする悪人の手にかかるれば、恐ろしい戦争の道具になります。わたしは、ノーベルとともに

に、人間は、新しい発見から、悪でなく、善を引き出すべきであると考えています。」

キューリー夫妻が発見したラジウムは、たくさんの中者たちに研究され、がんそのほかの病気の治療に役立つことも明らかになった。そして、工業的に作り出す方法も、くふうされるようになつた。

ピエルとマリーの生活が、やつと楽になつたのは、ノーベル賞を受けてからであつた。ピエルは、ソルボソヌ大学の教授、マリーは実験主任になつた。有名になれば、それだけ訪問客もふえ、原稿や講演の依頼も多く、ふたりは別の忙しさに苦しまねばならなかつた。そうした中でも、マリーは夫と力を合わせて、質素で目立たない生活を守り通した。

一九〇六年四月一九日、十年余り続いた夫妻の生活と研究が突然終わつた。それは、ピエルが交通事故で急死したからである。マリーは、生涯のただひとりの夫を失い、世界はひとりの偉大な科学者を失つた。ピエルこそ、短い一生をただ科学の研究に生きた人と言える。

マリーの受けたいたでは、ことばに表わしようもなかつた。実験室で、ただ夫の名を呼び続けるだけであつた。ふと、あの日のことばを思い出した。

「どんなことがあつても、たとえ、魂の抜けがらになつても、やっぱり研究は続けなければならない。」

マリーは、このことばに従うことを決心し、勇気を出した。ふたりの子どもを育てながら、二十なん年間、最後まで研究を続けたのである。

マリーは、ピエルの死後、ソルボンヌ大学の教授に迎えられた。そして、一九一一年、再びノーベル賞を受けた。こんどは、ノーベル化学賞である。鉱石からラジウムを取り出す実験に成功したからである。

授賞式の講演の初めに、マリーはこう述べた。

「わたしは、ラジウムとポロニウムの発見が、わたしとピエル・キューリーによつてなされたことを思い起こしたいのです。放射能の研究は、ピエル・キューリーの、またその弟子との共同研究のおかげを受けています。鉱石からラジウムを取り出し、これを新しい元素とすることは、わたしが研究したものですが、しかし、これも皆、前の研究と密接につながっています。ですから、今日の名誉はピエル・キューリーの名をたたえることをも意味しているのです。……」

マリーの心の中には、いつもピエルが生きていたのである。

## 二 リンカーン

一八六一年三月四日、この日は新大統領アブラハム・リーカーンが国會議事堂で就任式をあげる日でした。首府ワシントンには、各州の知事その他、大勢の人々が集まつていました。ホワイトハウスに続く、道路の両側は、新大統領の顔を見ようと/or>する人たちでいっぱいでした。そして、その人たちの前には、兵士が並び、屋根の上にも銃を構えた兵士が警戒していました。

リンカーンは、前大統領ビユーカナンと並んで馬車に乗り、この厳重な警戒の中を議事堂に向かいました。馬車の行列の中に、リンカーンの姿を見つけると、人々は、どつと歓声をあげ、盛んな拍手を送りました。しかし、その日、市民たちが見た大統領の顔は、喜びにあふれた明るい顔ではありませんでした。それは、深い決意をひそめた沈着な顔でした。

リンカーンの大統領就任を妨害しようとして、どんな事件が起こるかわからぬという不安は、すべての人々に感じられていきました。リンカーンの命は、彼がワシントンに乗り込む前からねらわれていたのです。

アメリカでは、どれい制度が三十年も前から深刻な問

題となっていたのです。一八五四年ごろどれい制度を続けるか、続けないかということで争いが起こり、合衆国の北部と南部の意見が対立していました。そのため、一八六〇年の大統領の選挙は、この問題をどう解決するかという責任のかかつた重大なものだつたのです。

この大統領選挙に四人の候補者が立ちました。三人は有力な人だったので、リンカーンの当選はあやぶまれていました。しかし、選挙の結果は、「どれい制度は、あくまで悪いことである。これ以上絶対に広めてはならぬ。」と、主張したリンカーンの政見が人々に迎えられ、他の三人を押えて当選したのでした。南部では、リンカーンの当選に非常な不満がもりあがりました。南部では、ずっとどれい制度が行なわれていて、社会生活も、経済も、その上に築かれていたのです。そこで南部の人々は、合衆国から独立して、自分たちだけの国をつくるうと考えました。

リンカーンが大統領に当選して、わずか四日後、南カロライナ州が合衆国から分かれると言いました。続いて、ミシシッピー・フロリダ・アラバマなど七州が分かれ、新しい連邦をつくりました。こうして、リンカーンが大統領に就任する前に、合衆国は、北部と南部とに分かれてしまつたのでした。

これから解決しなければならない数々の問題が待ち構

えていることは、だれよりも、リンカーン自身がよく知つていました。リンカーンは、その困難に当たるためにこそ、自分が選ばれたのだと思い、全力をあげて、それに当たる決心をしていました。

ケンタッキー州の貧しい開拓者の子に生まれたリンカーンは、子どものころ、父母に連れられて、開拓地を転々と移り住みました。落ち着かない生活だったので、学校にも行くことができませんでした。最後に一家がイリノイ州の未開地に住んだとき、リンカーンは二十一歳になつっていました。人並み以上に大きなからだを持ち、正直でよく働く若者として、土地の人々から愛されました。ニューセールムという村の小さな店を預かりました。五年ばかりの間に、彼の実直な性質は、すっかり村人に気に入られ、「正直アブ」と呼ばれて、郵便局の仕事も任せられるようになりました。この期間に、彼は、昼も夜もないほど勉強に心を打ち込みました。数学や法律学などすべて独学で身につけました。そして二十五歳のとき、イリノイ州議会の議員に選ばれました。やがて、スプリングフィールド市に出て、弁護士となり、州でも指折りの人物と言われるようになりました。こうして、リンカーンは大統領となつて、ワシントン市に出るまで、イリノイ州で暮らしました。

四日のある朝、ホワイト・ハウスの玄関から、大きな人が出てきました。そして、通りかかった人に、

「すみませんが、新聞売り子を呼んでくれませんか。」  
と言いました。ほおひげのある顔がにこにこしています。  
それは、見おぼえのある顔です。むぞうさにスリッパを  
つっかけたまま立っている大統領でした。

リンカーンは朝早く起きて仕事にかかりましたが、まだ、だれも来ていません。召使を起こすのも気の毒と思いい、自分で新聞を買いに出たのでした。リンカーンには、役人たちよりも、町かどで新聞を売る少年たちの方が、身近に感じられるのでした。彼も少年のころには、インジアナ州のいなかで走り使いの小僧でした。大統領になつても、新聞売りの少年たちと、全くかけ離れた人間になつたなどとは、思つてもみないリンカーンでした。

大統領としてワシントンに出発する前の晩、彼は自分で荷造りをしました。回りの人々が、

「そんなことをしては、大統領の威厳にかかわりますよ。」

と言いましたが、リンカーンはちつとも気にかけませんでした。リンカーンは、自分の事を自分でしたために無くなるような威厳があるとは、思つていません。あらゆる人間が平等に持っている人間としての威厳が、本当の威厳

だと信じていました。

大統領として、ホワイトハウスで暮らすようになつてからも、日常の振舞いは、昔と少しも変わりませんでした。あるとき、ドイツの貴族出身の青年が、リンカーンに頼みごとを持つてきました。青年は、自分を紹介するつもりで、自分の家柄について話し始めました。すると、リンカーンは、

「いや、家柄について説明する必要はありません。家柄は、あなたの頼みごとと関係がないのですから。」

と言いました。青年は驚いて、彼の顔を見守りました。こんなことを言う人には、まだ会つたことがなかつたからです。

リンカーンの、この気取らない、無ぞうさな態度は、ワシントンの上流社会の人々をあきれさせたことがたびたびでした。しかし、彼の人間としての値うちが、どれほど高いものか、各国の政治家たちを知っている外交官によく分かりました。

モトリリーは、アメリカの外交官としてヨーロッパで活躍し、有名なドイツのビスマルクとも親しい友だちだった人です。このモトリリーが、初めてリンカーンと会つたときのことを次のように書いています。

「……彼は、天性の賢さを備えた人であり、純真で、気取りがなく、卒直で、気高い性格を持っている。彼は鋼

鉄のようすに眞実で、それと同じくらいの勇気を備えていた。彼はアメリカの民主主義の典型だ。彼こそ、アメリカの人民そのものだ。」

「アメリカの人民そのもの」と言われた大統領リンカーンは、一般の国民にとって、これほど身近な政治家は、外にはないと思われました。週二回の一般面会日には、ホワイトハウスの広間に、はいりきれないほどの人々が集まりました。

リンカーンは、以前イリノイ州で弁護士をしていましたとき、農民たちのいろいろな問題について相談に乗つてやつたと同じように、どんな人にも会い、どんな訴えにも耳を傾けました。

リンカーンが大統領に就任して間もなく、政府は南部と戦いを始めました。戦いはすぐ終わるものと思つていましたが、南部の抵抗は意外に激しく、政府は戦いに全力をそそがねばならぬほどでした。

一八六二年九月、メリーランド州のアンチタムという川のほとりで激しい戦いが行なわれ、北軍は、初めて勝利を得ました。この知らせは、北部の人々を喜ばせましたが、だれよりも、この知らせを待っていたのはリンカーンでした。彼は、勝利の知らせがあつたらすぐ発表しようと、二か月も前から、ひそかに重大な文書を用意していました。その文書というのは、ほかでもない「どれい解放」

の宣言文でした。

九月二二日、リンカーンは、閣議の席上で、どれい解放の宣言文を読みあげ、次いで、全文を新聞に発表しました。

それは、次のような内容のものでした。

『一八六三年一月一日以後、南部諸州のどれいは、永久に解放され、自由の身となる。政府と軍は、責任を持つて、その自由を保証する。』

どれい解放の宣言は、北部の人々からは喜ばれましたが、南部の人たちからは反対されました。リンカーンはなんとかして、南部の人たちにも、同意させたいと考えましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。リンカーンは、国会で、次のように言いました。

「わたしたちの人民政治は、一つの実験だと言われています。わたしたちは、その実験のうち一つを仕上げました。一つは、人民の政府をうち立てる事、いま一つは、人民の政府をうまく続けていくことです。ところが、もう一つ問題が残っています。それは、人民の政治は領土の統一を続けることができるものか、できないものか、という問題です。わたしたちは、どんな困難にも打ち勝つて、この問題を解決する責任があるのであります。」

一八六四年、リンカーンは再び当選して大統領になりました。彼は全国の人々に向かって呼びかけました。

「……だれにも悪意を持たず、すべての人に慈愛の心を  
持ち、正義にはゆるがぬ態度で、今の仕事を完成するため  
に努力を続けよう。国民全体で助け合い、励まし合つて、  
眞の平和を作り上げるために努力しようではないか。」

これは、戦いが終わつたら、南部の人々をきびしく罰して  
やろうと言つている人々に対する強い反対の気持ちを穩  
やかなことばで表わしたものです。また解放されたどれ  
いたちに向かつては、

「皆さんは、もう自由なのです。長い間、それを奪われて  
いたのは誤りでした。あなた方は、その自由を受けるにふ  
さわしい人間になつてください。アメリカ国民として眞  
に幸福に生きていくため努力しなければいけません。」

このように、リンカーンは、あらゆる階級の人々に、眞の  
民主主義を説きました。

一八六五年四月、南軍は降伏しました。リンカーンが続  
けてきた四年余りの苦しい忍耐の日は、ついに終わりま  
した。リンカーンは、一生をかけての責任をりつぱに果た  
したのです。リンカーンは、南北の対立が、今後起ころな  
いようにと、あらゆることに心を使いました。戦いによつ  
て傷ついたのは兵士ばかりではなく、国民すべての心に  
も、目に見えない傷が残つていることをリンカーンはよ  
く知つていました。

四月一四日、リンカーンは、ワシントン市のフォード劇場で、南部出身の者に、ピストルで撃たれました。

リンカーンは、なくなりました。しかし、彼の名と、その行ないは世界中にひろまり、自由を愛する人々の心に深く刻み込まれています。彼の残したことばは、今日なお人類の宝として記憶され、多くの人々を振るい立たせています。

# ぼだい樹

近藤朔風 作詞

泉にそいて 茂るぼだい樹

したい ゆきては うまし夢 見つ  
幹には えりぬ ゆかし ことば  
うれし 悲しに といし そのかげ

きょうも よぎりぬ 暗き さ夜中

まやみに 立ちて 眼(まなこ) とすれば  
枝は そよぎて 語ることし

来よ いとし友 ここに さちあり

面(おも)を かすめて 吹く風寒く  
かさは 飛べども 捨てて 急ぎぬ  
はるか さかりて たたずまえば  
なおも 聞こゆる ここに さちあり

・うまし—快い

・えりぬ—刻んだ

・さかりて—離れて

# 社会への窓

いかなる自然の中にも美を認め得ないものは、その人の心に欠陥のあることを示す。

(シラー)

## 一 ガウショ

リオ・グランデ・ド・スール州の生活様式の特徴を代表するものは、ガウショの生活であると言われている。ガウショといえば、一般には、リオ・グランデ・ド・スール州の人をさして言うが、土地の人々は、牧畜に従事する人たちを、特に、ガウショと呼んでいる。しかし、近年は、リオ・グランデ・ド・スール州を単なる牧畜地帯とのみみることができるほど、他の産業も盛んになりつつある。

たとえば、カシヨエイラを中心とする米や麦の栽培、また、北方の山岳地帯と、カシアスを中心とするぶどうの

栽培は、ブラジル一と言われている。その他、くだもののかん詰めも、リオ・グランデ・ド・スール州の重要な産物の一つである。

こうみると、同じリオ・グランデ・ド・スール州でも、州都ポルト・アレグレ以北の地方は、中部及び南部の牧畜地帯とは、かなりその生活様式も違っているが、しかもなおりオ・グランデ・ド・スールといえば、いまだにガウショによつて代表されている。

ガウショの歴史は、自然に繁殖した数百万の牛馬を捕えるプレイアの時代から始まる。牛馬を捕獲しようとしたものには、バンディランテたちだけでなく、スペイン人や土人たちもいた。そのため捕獲には、戦闘を伴うことが多かつた。

捕えた牛馬を追つて、長途を北上するためには、どうしても一定区域に集めて、その群を訓練することが必要であつた。それで、いわゆるエスタンシアと呼ばれる牧場が作られたのである。エスタンシアとは、とどまる所、宿泊する所という意味を持つてゐる。

エスタンシアは、セスマリアと呼ばれる土地がもとになつてできたものである。セスマリアが下付されたのは、一八世紀の初めであつた。これによつて、リオ・グ

S u l / C a c h o e i r a / c a x i a s / P o r t  
o A l e g r e / B a n d e i r a n t e / p r e i  
a / s e s m a r i a / e s t a n c i a )

ランデ・ド・スールの大牧場主、大地主階級が出現することになった。

牧場主（エスタンシェイロ）になつた者には、バンディランテあり、商人あり、上級の軍人がある。彼らは、貴族的階級とみなされていた。後に、アゾーレス島人も、これに加わつたが、彼らは、最初セスマリアを受けることができず、二七〇ヘクタール程度の土地をもらつたのであつた。彼らは、リオ・グランデ・ド・スールの農耕者としての先がけをした者で、ポルトガル領のアゾーレス島から直接この地方に移住した者や、ウルグアイから移つてきた人たちであつた。

リオ・グランデ・ド・スール州の社会は、大きく二つに分けることができる。すなわち、バンディランテを先がけとして南下し、大地主になつた人々の社会と、小自作農のアゾーレス島人の社会である。ところが、アゾーレス島の人の中にも、やがて牧畜に転じ、大地主になつた者もある。

アゾーレス島人は、ビアモン平原、リオ・グランデ近辺、

サンタ・カタリナのラグナ方面にもはいつている。しかし、リオ・グランデ・ド・スールで牧畜をやつた者が、最も成功したと言われている。

アソーレス島では、彼らは、小作農で、小さな土地をこまめに耕し、こむぎ、おおむぎのほか、果樹・野菜・砂糖きびなども栽培していた。移住してきた彼らは、全く貧困で、政府は、土地や牛を与え、穀物の種子や農具までも与えなければならなかつた。彼らは自作農となつて、小麦・大麦・あさ・ぶどう・くりなどの供給者になつたが、約半世紀の後には、大部分の者は牧畜に移つていつた。

だが、彼らの行なつた農耕は、その後、ドイツ移民やイタリア移民によつて受け継がれた。カシアスやガリバルジ地方のぶどう栽培は、今日、リオ・グランデ・ド・スール州の経済の一端をない、また、河川の流域は、米・麦の広大な生産地となつてゐる。

ガウシヨの生活や氣質を理解するには、土地がらと、その歴史を知る必要がある。

(新ポル語 estancia eиро / Uruguay / Viamão / Santa Catarina / Lagoa / Gariabaldi)

彼らの住む土地は、有名なパンパと言われる大草原と、それに続く丘陵地帯である。南方には、山岳地帯らしいものもあるが、西方になるほど、いわゆるコシリヤと呼ばれる丘陵になつていて、一望千里の平原が続く。まだ国境がはつきり定められていなかつた時代には、スペイン系・ポルトガル系のガウシヨが入り乱れて、牛馬の捕獲に狂奔していた。

彼らは、カウジリョと呼ばれる首領の指揮のもとに、隊をなして活動した。隊といつても、初めは十人内外の部下を従えたもので、部下の多くは土人や、土人と白人との混血児であつた。

カウジリョは、部隊の首領であるが、牧場主としては、家長のような存在であつた。そして、対外戦となると、カウジリョたちは連合して、一大軍団を結成した。彼らは、戦闘から協力の精神を学び、平和な時には、それを生かして公平な政治家になり得た。オリベイラ・ビアンナ氏は、このガウシヨの集団主義・協力主義・民主主義を大きく評価して、ブラジルの他の地方では見られない特長であるといつている。

エスタンシアの生活を、住居の面から見ると、「ファゼンダ」と呼ばれる主人の家と、その周辺の施設一般がある。主人の家は、古いものに、二階建てのものもあるが、

一般的には、平屋建てで、たいてい見晴らしのきく小高い所に、西北あるいは東北向きに建ててある。西南方からの風は、パンペイロ、アンデスからの風は、ミヌアノと呼ばれ、ともに冷たいので、南向きには、家を建てていない。

カパタスの家は、主人の家の近くにあつて、ファゼンダの一部とも見られる。カパタスというのは、ペオンと呼ばれる一般労働者の指揮者のことであるが、また、牧場の技術者もある。ペオンたちの家

(新ポル語 Pampa/cochila/caudilho/Oliveira Viana/fazenda/pampeiro/Andes/minuano/capatazzapeao)

は、ファゼンダから離れた所にある。独身者の場合は、数人が一軒の家に住み、共同生活をしている。ペオンたちの家は、ガルポンと呼ばれ、簡単な仕切りで区切られている。今日はれんが建てであるが、昔は掘つ立て小屋であった。

この外、ファゼンダの施設としては、カバラリッサ(馬小屋)、エスタブロ(牛小屋)、エステルケイラ(たい肥小屋)などがあり、その他、羊毛・穀類及び道具類を入れる倉庫がある。

牧場としての施設では、アラマドという針金のさくがあり、ポルティラと呼ぶ出入り口がある。マンゲイラといつて、牛馬を寄せ集めて手当てをするための囲いがある。その他、牧場内には、ロデイオという家畜の集まる場所があり、インベルナダほ、牛を肥やすための特別の牧場である。牧場内には、各所に大小の水飲み場が作つてある。

エスタンシアの生活でいちばんはなばらしいのは、投げなわで牛馬を捕える作業である。これに荒馬ならしが加わつて、初めて一人前のガウショになる。牧人生活と馬とは、切つても切れないもので、馬具を飾り、特異なガウショの服装でパンパを駆け回る姿は勇壮で、いかにも男性的なものである。だから、馬を愛することは、彼等の伝統とするところである。どんな所へ行くのも馬であり、あの広大な土地で生活できるのも、馬があればこそである。

自慢の馬と、自慢の服装、しかし、今日では、昔のようにきらびやかなものはすたれたと言われる。それでも祭りのときなどの正装は美しい。ズボンはだぶだぶのポンバツシヤ、毛布のようなものを二つ折りにしてまん中に首を通す穴のあるポンショ、首に巻くレンソ、ガイアカという巾広な皮帶、長ぐつ、つばの広いあごひも付きの帽

子、馬具を美しく飾ることは昔も今も変わらない。

彼ら特有の料理は、シユラスコであ

(新ポル語 Galpao / estabulo / este  
queira / cavalaria / aramado  
/ porteria / mangueira / rode  
io / invernado / bombacha / Len  
co / Gaiaaca / churrasco)

る。これは、牛やひつじの肉を大きなまま くし にさして火にあぶり、焼けたところから切り取つて食べるもので、パンやマンジオカの粉を添える。シマロンはマテ茶で、飲み方は、クイアと呼ばれる器に茶を三分の二ほど入れ、まず、これを水で潤おし、その中に、ボンバという先端泣茶こしの付いた管を差し込み、熱い湯をこれに注ぎ、管の一方から吸うのである。みんなが、同じ器で一服ずつ回し飲みをする。一つの器で数人が飲むところに、リオ・グランデ・ド・スール人の社会生活の一端を見ることができる。楽器には、ビオロン及びアコデオンがあり、今日は、ビオロンも使うし、ハーモニカも愛用している。

ダンスは盛んで、三十余種あり、ブラジル、ポルトガル、アソレスの伝統を持つているものが多い。その他、スペイン系のものもあり、ドイツ的、スラブ的なものもある。足

を踏み鳴らし、手拍子をとり、にぎやかに踊るものが多い。娯楽にもいろいろあるが、サン・パウロで、ムチロン、またはムシロンと呼ばれるものは、ピシュルンといい、これは仕事であるが、そのあと、楽しい遊びが続く。馬上のさまざまな遊戯は競馬も含めて、リオ・グランデ・ド・スル人の好きな遊びである。

(新ポル語 mandioca/chimarrão/cuia/bomba/viola/mutirão/muchirao/pichurum)

## 二 日本の自然

日本の自然の特異性は、日本が地球上に占めている位置に關係が深い。

まず、日本の気候について考えてみよう。日本は、温帶に属し、最も寒い地方から、最も暖かい地方までのあらゆる気候上の段階を備えている。このように、気候の面で種々の様相が、この狭い国土の中に見られることは、それだけでも意味の深いことである。

温帶の特徴は、四季の年周期である。熱帶では、温帶に

住む者が考えるような季節といいうものが成立しない土地が多い。南洋には、とこ夏の島がある。インドなどでは、季節風の交替による雨期、乾期の別が見られるが、温帶での春夏秋冬の循環とは、かなり違つたものである。寒帯も熱帯と同様、そこには昼夜はあるが、温帶で見られるような天気の変化や季節の交替はないのである。

温帶に見られる天気の変化や季節の交替は、そこに住む人間の知恵を養う。複雑に変化する環境に適応するため、人はふだんの注意とくふうを必要とするからである。そうした温帶の中でも、日本は他の国と比べると、いろいろな特異性を持つてゐる。そのおもな原因は、日本が大陸の縁に沿つて連なつてゐる島国だからである。もつとも、この点では、英國の本土は、日本とよく似ているといえよう。しかし、大陸の西側と東側とでは、大気及び海流の関係で、いろいろな相違がある。このことは、日本と同緯度にある西欧諸国に比べてみればすぐ分かる。ただ、日本は、その国土と隣接している大陸との間に、狭いながら海があるので、シベリアの奥にある大気活動のきびしさを、いくらか緩和された形で受けている。日本の気候は、その位置と独特的な水陸分布の状態とによつて、大陸的な要素と海洋的な要素とが入りまじつてゐる。

雨の降り方だけでも、さまざまな降り方があつて、それ

を区別する名称がいろいろある。「春雨（はるさめ）」「さみだれ」「しぐれ」など、これにぴったりする訳語を外国语に求めるのは困難であろう。次に、日本の気象現象の中で、特異なものに台風がある。これも、日本の特殊な地理的位置によるもので、「一百十日」ということばも、外国人にとつては、その意味が十分につかめないであろう。

気候の次に重要なものは、水陸の入り組みによる地形に関するものである。日本列島が、どのようにしてできたかということには、いろいろな学説があつて、明らかでないが、日本が大陸を縁どつていた陸地のかけらであることに疑いがない。このことは、日本の地質と地形の複雑なことにかかわりがある。日本の地質図を見ると、多くの色で染め分けられている。このような地質が、複雑な地形を生み出したのである。その上に、火山現象があつて、いつそう特有の変化を添えている。

そして、この複雑な地形は、居住民の分布に特別な影響を及ぼしたのである。山脈と河川によつて細かく区分された地区ごとに小都市に似たものが発達したと思われる。このような地形は住民を土着させる傾向を持つている。そして土着した住民は、その風土の特徴に適応しながら、それぞれの地方的な特性を養い、土地に対する愛情をつちかってきたのであろう。

また、この地形の複雑さの因をなした地殻活動は、日本

の変化に富んだ美しいけしきを作り上げたのであるが、現代にもなごりをとどめて、地震と火山の活動がある。地震計が、わずかに感じるくらいの地震は、日本のどこかで毎日のように起こつており、人が、はつきり地震と感じるものの起こらない月はないくらいである。また、建物をこわしたり、火事を起こすような大地震も、三、四年間には、どこかで突発している。

同じことは、火山の活動についてもいうことができると思ふ。

次に、地形の複雑さの影響として、距離から見れば、いくらも離れていない土地の間に、わずかな気候の差によつて生じる違いを見ることができる。ちょっととした山続きの表と裏では、日の照り加減や雨量その他にかなりの相違がある。この影響が最も目立つのは、植物分布の画である。中部地方などで、東西に走っている谷川などで、南岸には、広葉樹が茂つており、対岸には針葉樹の林が見られる。これは、ただ気候の差だけでなく、地質の多様さと相まって示される植物分布の有様である。風化したかこう岩の山と、古生層の山とでは、山の形が違ひ、そこに自生する植物の種類にも違ひがある。

天然の植物に種類が多いこととともに、日本の農作物の多様性も、西欧諸国など比べものにならない。作ろうと思えば、大ていの作物を、日本のどこかで栽培できるとい

うことには、やはり気候と地味の多様性ということに關係が深いのである。

農作物の種類が多く、日本の農村をモザイクのようにいろいろつっている。地形が複雑なため、大農式の耕作はできない。そこで田畠は、小さく区切られたり、階段状に刻まれたりしている。

稻田、桑畠、芋畠の連なるけしきを見て、日本中耕作されていない所はないと思つていると、そこからいくらくも離れていない所に疎林があり、川岸には荒れ地がある。また、原始林があり、野草が風にそよいでいる牧場も見られる。

植物界は、動物界を支配する。植物は、こん虫を呼び、こん虫は鳥を呼ぶ。そして後にはいろいろな獸が移り住むようになる。日本には、いろいろな鳥類がいて、それらの鳴き声は、季節の象徴として、昔から和歌や俳句に吟詠されている。また、日本は、その位置から、いろいろな渡り鳥の通路になつていて。これも、日本の多様な季節の印と見ることができる。また、昔は、獸類も多く住んでいた。それらは、しかやさるのような温和な獸で、猛獸は少なかつた。しかし、人口がふえるに従つて、鳥や獸が少なくなつたのは、自然の勢いである。

水産物の種類と数量の多いことは、世界のどこにもひ

けを取らない。これは、日本の海岸線が長く、しかも広い緯度にわたっているためであるが、さらに各方面から、いろいろな温度の塩分、ガス成分を運んでくる暖流、寒流のたまものである。この海流は、豊かな海のさちを与えると同時に、また、日本の気候に影響を及ぼして陸のさちも支配するのである。

要するに、日本の自然界は、気候の上でも、地形の上でも、生物の上でも、あらゆる方面から見て、きわめて多様に國土をいろいろしているといえる。しかも、そのいろいろとは、さまざまに変化して、自然を絶え間なく活動させているのである。

このような自然の多様性と活動性とは、住民にどのようない影響を及ぼしてきたのであらうか。複雑な周囲の変化に適応しようとする努力は、周囲に対する觀察を細かくし、自然の持つ神秘に対する感覚をもみがくことになるのである。自然の神秘と、その威力を知ることが深いと、人間は自然に対し従順になり、自然を師として学ぼうとするのである。

これまで述べてきたように、日本の自然は、国民を育てる優しい母であるが、また同時に、国民を戒め、むち打つところのきびしい父もある。きびしい父の教えに従うことは、優しい母に甘えるのと同じように、生活の安泰を保つ上に必要なことなのである。

人間の力で自然を征服しようとする努力が、早くから西洋で科学を発達させた。何ゆえ東洋の文化国日本に、それと同じような科学が、同一の歩調で進歩しなかつたのであらうか。それには、いろいろ理由もあるが、その原因の一つとして、日本の自然が持つ特異性を考えることができる。すなわち、日本では、自然が優しい母のような深い愛情を持つてるので、国民は安心してそのふところに抱かれてきた。また、その一方で、自然はきびしい父のようないかめしさを持つてるので、その戒めに従つてきたのである。自然の豊かな恵みを喜んで受け、自然に対して反逆しようという気持ちは起こさなかつたのである。そして、ひたすら、自然に順応するため、経験によつて得た知識と民族的な知恵とを積み重ねることに力を尽くしてきたのである。このような知恵の集積も、西欧に発達した科学とはまた型の違つた学問ということができるのである。

日本は、明治時代になつて、西欧の科学を輸入し、急速に近代国家として興隆してきた。今後も日本は、伝統的につちかつた知恵の上に、科学的な経営を行ない、豊かな自然の恵みをいつそう有利に生かすと同時に、自然のわざわいを取りのぞいて、最も住みよい国土とするよう努力している。

### 三　日本の文学

文学は芸術の一分野で、人間の精神生活から生まれるもので、だれかが考えたこと、感じたことを、言語、文章によつてあらわしたものですから、文学は、個人的な産物と言えましょう。しかし、文学は、その作者の属する民族独特の伝統、または、その作者の現われた時代の思想や風習などにも支配されることが多いので、一面、社会的な産物と見ることもできます。

世界の国々を見ますと、どの国にも、それぞれに、その国独特的文学の流れがあります。日本の文学にも、やはり、日本文学独特的流れがあり、また、特殊な味わいがあります。これから、その流れを、歴史年代の区分けに従い、上古、中古、近古、近世、現代の五つに分け、そのあらましを順にながめてみましょう。

#### 上　古

(紀元前から八〇〇年ごろまで。) 上古とは、太古の神話時代から奈良(なら)時代の終わりまでをさして言います。日本文学史では、便宜上、推古(すいこ)天皇のとき(六三〇年ごろ)を境として、前期と後期とに分けていま

す。そして、前期を伝承文学時代、後期を記載文学時代といいます。

伝承文学時代というのは、ほとんど文字のなかつた時代です。この時代の文学は「語部（かたりべ）」という歴史の伝承を公の職業とする人によつて語り伝えられたものと、民衆の間に、自然に伝わつたものとの二つです。この時代の文学で、今日に伝えられているのは、奈良時代の初めにできた「古事記（こじき）」「日本書紀（にほんしよき）」「風土記（ふどき）」などにしるされている神話、伝説、歌謡などです。

これらは、はつきりとした作者がなく、いわば、民衆の共同製作ともみられるものであり、また、本当の意味での文学とは言えないものです。しかし、古代日本人の意志や感情を読みとることができ、その生活や、国家の起源などを知るために、たいせつなものです。そして、また、これは、後に発達した国文学の土台ともなつたものです。

この伝承文学時代が過ぎて、ことばを文字によつて書き印す記載文学時代にはいりました。この時代に、古くから伝承されたものが、次々と書き集められたのでした。この記載文学時代のもので、最もすぐれているのは、「万葉集（まんようしゅう）」です。万葉集の和歌は、芸術味を豊かに持つています。そのほか、当時の漢文で書かれた詩集などもあります。

このように、記載文学時代の文学は、漢文学や仏教の影響を受けて発達し、民衆に民族的な自覚を促しました。そして、その結果として、日本は国家として、急速に発達しました。

## 中古

(八〇〇年ごろから一二〇〇年ごろまで。) 中古というものは、都が京都に移ってから、源 頼朝(みなもとのよりも)が鎌倉(かまくら)に幕府を開き、武家政治を始めるまでの四百年間をさして言います。

この時代の初めごろは、奈良時代に続いて、大陸文化をまね、仏教と漢文学が中心になっていました。しかし、後には、国民の自覚が高まって、貴族社会を中心とした日本独自の文化が起り、男性的な上古文学にかわって、優美で女性的な文学が発達しました。

中古の文学として、初めのころ漢詩と漢文が栄えました。その後、中国との交通が衰え、「かな文学」が発達して、再び和歌が盛んになって、「古今(こきん)和歌集」が生まれました。また和歌を中心とする歌物語、説話の興味を中心とする伝奇物語が現われました。「伊勢(いせ)物語」、「竹取(たけとり)物語」などが代表的なものです。また、日記という形式の文学も生まれ、「土佐(とさ)日

記」などが書かれました。

前期の文学は、詩歌（しいか）のような韻文が中心でしたが、中期にはいってだんだん散文が中心になつてきました。この期の散文で有名なのは、紫式部（むらさきしきぶ）の書いた「源氏（げんじ）物語」と、清少納言（せいしようなごん）の書いた「枕草子（まくらのそうし）」です。この二つは、日本文学の上だけでなく、世界文学の上から見ても、たいへんすぐれた作品であると言われています。

後期には、物語の方面で歴史物として「大鏡（おおかがみ）」があり、説話物に「今昔（こんじやく）物語」があります。

中古文学の特徴は、当時の貴族社会の優美な生活を反映しており、しみじみとした情趣にあふれていることです。

## 近 古

（一一〇〇年から一六〇〇年ごろまで。）源 賴朝（みなもとのよりも）が鎌倉で武家政治を始めたのは一一九二年でしたが、間もなく政治の実権は北条（ほうじょう）氏に移り、次いで天皇中心の政治運動が起こって、建（けん）武（む）の中興となりました。しかし、すぐに足利氏

(あしかが) が京都の室町(むろまち)に幕府を開き、また、もとの武家政治になりました。その後、戦国時代を経て、徳川家康(とくがわいえやす) が江戸(えど) に幕府を開き、やっと国内が治まりました。それは一六〇三年のことです、それまでの間を近古の時代と言います。

この約四〇〇年間を二つに分け、鎌倉時代を前期、室町時代を後期と見ることができます。前期の鎌倉時代には、前代に栄えた和歌、物語が衰えて、連歌、戦記物、お伽(とぎ)、草子、謡曲、狂言(きょうげん)などが盛んになります。中でも戦記物は、武士階級を取り扱ったもので、この時代の精神をよく表現しています。謡曲、狂言は日本の劇脚本として現われたものです。

後期には、漢詩文にすぐれた人々が京都で、「五(ご)山(ざん)文学」を興しました。また、後期の終わりごろに、ローマ字による吉利支丹(きりしたん)文学があります。

近古の文学として、前期のものでは、和歌の「新(しん)古今(こきん)和歌集」「金槐(きんかい)和歌集」、物語では、創作物に「住吉(すみよし)物語」、歴史物に「神皇正統(じんのうしおうとう)記」などがあり、

説話物に、「宇治拾遺(うじしゅうい)物語」、戦記物に「平家(へいけ)物語」などがあります。後期には、戦記物に、「太平(たいへい)記」があり、隨筆、日記、紀行物としては、「方丈(ほうじょう)記」「徒然草(つれづれ)

ぐさ)」「十六夜(いざよい)日記」「海道(かいどう)記」などが知られています。

この時代に最も活躍したのは武士階級ですが、文化の指導者としては、僧りよが大きな役割を果たしました。戦乱が続いたので、武士たちは主従(しゅうじゅう)の間に武士道を作りました。また戦乱は、庶民の間に、人生は、はかないものだという考え方を強く植えつけました。それで、この時代の文学には、そういう思想が強く現われているのを特徴として見ることができます。

## 近世

(一六〇〇年から一八六〇年ごろまで) 德川幕府が成立したころから、明治(めいじ)の新政治が始まつたころまで、約二世纪半の間を近世、または、江戸時代と言います。

この時代は、長い戦乱の後の穏やかなときで、文化がたいへん高くなりました。学問と思想の面では、儒学と国学と洋学の三つが発展しました。

儒学は、主君に対する忠節を重んじ、社会の規律を乱さないことを教えました。従つて、当時の封建社会を保とうとする德川幕府の政治方針と一致するので、幕府から重く用いられ、非常に栄えました。

国学と言うのは、上古の書物を研究し、古代日本人の精神を明らかにする学問です。この学問は、僧契沖（けいちゅう）によつて始められ、この時代に大成されました。国学が盛んになつた結果として、国体觀念と皇室尊重の精神が高められ、後に幕府が倒れる原因の一つをなしました。

洋学は、幕府の鎖国政策によつて、わずかにオランダ人を通じ、医学、動・植物学、天文学、地理学などが輸入されました。この西洋科学の合理的なものとの考え方は、当時の封建社会の不合理なところを批判する態度を養いました。

近世は、前代と同様、武家政治の世の中でしたが、前代の後期から興ってきた町人の経済力が、ようやく強くなつてきました。社会的な勢力は武士にありましたが

文化活動は経済力の強い町人によつて行なわれました。そして、文化の質も、武士社会と町人社会とではだいぶ違つていました。文芸方面では、武士階級の間に漢詩、漢文、和歌、連歌、謡曲が行なわれ、町人階級では、狂歌、俳諧（かい）、小説などの新しい文学が流行しました。

この時代の文学は、初め上方（かみがた）（京都、大阪）地方に起こり、中ごろ江戸（東京）に移りました。それで上方時代を前期、江戸時代の前期と中期、そして、いわゆ

る江戸文学の栄えた期間を後期と、三つに分けてみると、次のようなことが言えます。

前期には、和歌、連歌、俳諧、浮世草子（うきよぞうし）、じょうるりが栄え、中期には、国学者を中心とする和歌、俳諧に新しい発展があり、劇脚本が盛んに書かれました。そして後期には、黄表紙（きびようし）しゃれ本（ほん）、こつけい本、人情本（ほんにんじょうほん）のような小説が多く出ました。

なお、この時代に各分野で活躍したのはおもに次のような人々です。

漢字には、林羅山（はやしらざん）、中江藤樹（なかえとうじゅ）、新井白石（あらいはくせき）、頼山陽（らいさんよう）などがいます。徳川光圀（みつぐに）が多くの学者を集めて作った「大日本史」は、この時代に漢文で書かれた史書です。

国学では、荷田春滿（かだのあずまろう）、賀茂真淵（かものまぶち）、本居宣長（もとおりのりなが）、平田篤胤（ひらたあつたね）などがいます。中でも、真淵の万葉集に対する研究、宣長の「古事記伝」などよく知られています。

俳諧は、近古に始まり、この時代に栄えました。松尾芭蕉（まつおばしょう）、与謝蕪村（よさぶそん）、小林一茶（こばやしげき）などの名が親しまれています。また、狂歌の大田蜀山人（おおたしょくさんじん）、川柳の柄井

川柳（からいせんりゅう）が活躍したのもこの時代です。

小説では、浮世草子の井原西鶴（いはらさいかく）、読み物では曲亭馬琴（きょくていばきん）、黄表紙、しやれ本などでは、山東京伝（さんとうきょうでん）、こつけい本では十返舎一九（じゅつぺんしゃいつく）、式亭三馬（しきていさんば）、じょうるりでは近松門左衛門（ちかまつもんざえもん）、歌舞伎（かぶき）の河竹黙（かわたけもく）阿弥（あみ）などが作者として、よく知られています。

近世文学の特質として、次の二つをあげることができます、一つは国学が盛んになって、上古の文学精神の復活が見られ、これが武士文学の中で、自然と誠実という形で表わされていることです。いま一つは、中古、近古時代の底を流れているしみじみとした情趣や人生をはかないものと考える思想が、町人文学の中で、風雅とか、さび、すいというような形で出てきていることです。この二つが入り混じって、近世文学に強い色彩を与えてています。

## 現 代

（一八六〇年から今日まで。）現代というのは、明治の新政が始まられたときから、大正を（たいしよう）経て昭和（しようわ）の今日までです。徳川幕府の政策による長い鎖国時代を経たため、世界の大勢から遅れていた日本は、

明治になつてから盛んに世界の文化を取り入れました。その結果、めざましい進歩を遂げたのですが、非常に困難な道を歩いてきたともいうことができます。

明治になつて、前代までの封建的制度や思想はぬぐい去られ、日本は近代国家に生まれ変わりました。当然、文学の面でも西欧の影響を強く受け、新しい文学が発生し、発達しました。

現代文学を見る場合、だいたい次のように分けてみるのが便利です。

一、西欧模倣の時代。二、写実主義の時代。三、ロマン主義の時代。四、自然主義の時代。五、耽（たん）美主義の時代。六、理想主義の時代。七、理知主義の時代。八、プロレタリア派と芸術派との対立時代。九、戦争文学の時代。十、戦後時代。

西欧模倣の時代というのは、明治初年から二〇年ごろまでで、西欧各国から、いろいろな思想や主義が輸入せられた時代です。これらの思想や主義を紹介したおもな人は、福沢諭吉（ふくざわ ゆきち）、中江兆民（なかえちよみん）、新島襄（にいじまじょう）、中村正直（なかむらまさなお）などです。これらの思想の洗礼を受けて、坪内逍遙（つぼうちしようよう）の「小説神髄」が現われ、日本文学の面目を一新させました。

写実主義の時代は、明治一〇〇年から三〇〇年ごろまで。遙の主張に従つて写実作品の現われた時代で、「葉亭四迷（ふたばていしめい）」の「浮雲」が、その代表作品です。また、和歌、俳句の方で、正岡子規（まさおかしき）が写実を唱え、近代短歌、俳句の基礎を築きました。

ロマン主義の時代といふのは、明治三〇〇年から三八年ごろまで。この時代をいろいろつたのは、詩の島崎藤村（しまざきとうそん）、短歌の与謝野鉄幹（よさのてつかん）、晶子（あきこ）らの一派、小説では泉鏡花（いずみきょうか）、国木田独歩（くにきだどっぽ）などでした。

自然主義の時代は、明治三九年から明治末年（四五年）までです。日露戦争（明西欧から自然主義の文学思想がはりり、田山花袋（たやまかたい）、島村抱月（しまむらほうげつ）、正宗白鳥（まさむねはくちょう）などの自然主義文学が盛んになりました。詩では、相馬御風（そうまぎよふう）、川路柳紅（かわじりゆうこう）、三木露風（みきるふう）、短歌では、石川啄木（いしかわたくばく）、俳句では、河東碧梧桐（かわひがしへきどう）などが、それを代表しました。また、この時代に、独自の立場から小説を書いて有名になつた人に、森鷗外（もりおうがい）と夏目漱石（なつめそうせき）があります。なお、小山内薰（おさないかおる）が新劇を興したのもこのころです。

耽美主義の時代は、明治末年から大正の初期。この主義

は「美」の面で、自然主義に反対して興つたものです。小説では、永井荷風（ながいかふう）、谷崎潤一郎（たにざきじゅんいちろう）など、詩歌では、北原白秋（きたはらはくしゅう）、高村光太郎（たかむらこうたろう）、吉井勇（よしいうさむ）などです。

理想主義の時代は大正初期から中期まで。この主義は「善」の面から自然主義に反対して興つた文学運動です。小説では、武者小路（むしやのこうじ）実篤（さねあつ）、志賀直哉（しがなおや）、有島武郎（ありしまだけお）など、詩歌では、木下利玄（きのしたとしはる）、千家元麿（せんけもとまろ）などが代表作家と言えましょう。

理想主義の時代は、大正中期から大正末期まで。これは、理想主義に反対して興つた一派で、鷗外、漱石の文学思想を継ぐものです。小説では、芥川龍之介（あくたがわりゆうのすけ）、菊池寛（きくちひろし）、久米正雄（くめまさお）、山本有三（やまもとゆうぞう）など、詩では、日夏耿之介（ひなつこうのすけ）、萩原朔太郎（はぎはらさくたろう）などが、おもな人々です。

次は、プロレタリア派と芸術派とが対立した時代で、大正末期から昭和一〇年前後まで。プロレタリア文学では、葉山嘉樹（はやまよしき）、小林多喜二（こばやしたきじ）らが活動しました。一方、芸術派では、横光利一（よこみつりいち）、川端康成（かわばたやすなり）などが中心と

なつて活動しました。

また、別に、主義や主張は抜きにして、大衆を楽しませる文学、という考え方から、大衆文学が現われました。白井喬二（しらいきょうじ）、直木三十五（なおきさんじゅうご）、吉川英治（よしかわえいじ）などが出て、大衆に迎えられました。

戦争文学の時代は、昭和一〇年ごろから二〇年ごろまで。日本は、満州、支那（まんしゅうしな）事変を経て、第二次世界大戦にはいり、文学の自由は失われました。大家たちは沈黙し、新人も現われませんでした。戦争文学としては、火野葦平（ひのあしへい）、丹羽文雄（にわふみお）、石川達三（いしかわたつぞう）などの作品が、わずかにあります。

戦後は（昭和二〇年以後）、まず大家・中堅の活動が目立ち、年とともに新人の登場がめざましく、現在は空前の文学時代を現出しつつあるといえましょう。

(171.jpg 挿絵あり。190.jpg迄上段下段  
あり)

一 信 号

V・M・ガルシン

訳 神西（じんざい）清（きよし）

セミヨーン・イバーノフは鉄道の線路番を勤めていた。彼の番小屋から一方の駅までは十二露里、もう一つの駅までは十露里あつた。四露里ほどの土地に去年大きな紡績工場が立つた。その高い煙突がはるかの森陰から黒々とのぞいていたが、それより近くには、両隣りの番小屋を別にすると、森番の家ひとつなかつた。

セミヨーン・イバーノフは病身の、生活に疲れ切つた男であつた。九年前に彼は戦争に出たことがある。ある将校の従卒を勤めて、遠征の辛苦をつぶさに主人と共にしたのである。飢（う）えに苦しみ、寒さに凍（こご）え、炎天に焼きこがされ、その炎天や寒空について、日に四十露里から五十露里の强行軍をしたものである。銃火の下に身をさらしたこともあつたが、幸いとかすり傷ひとつ負わずにすんだ。ある時などは彼の連隊が第一線に立つた

こともある。そのときは、まる一週間ぶつ通しにトルコ軍と銃火を交じえた味方が戦線を敷いている場所と、くぼ地一つをはさんでトルコ軍の戦線があり、朝から日暮れまで、ときどき思い出したように弾丸を送つてよこすのだ。セミヨーンは付いている将校もその戦線にいた。で、セミヨーンは日に三度三度谷間にある連隊料理室から、しゅんしゅん沸いたサモワールと食事を運んで来てやるのだった。サモワールをさげて暴（ばく）露地帯を歩いて行くと、弾丸がひゅうひゅう鳴つてそこらの石にピシッピシツとぶつかる。セミヨーンはこわくて、思わず涙が出るけれど、それでもからだは進んで行く。隊の将校連はこの彼に大満足だった。彼のおかげで二六時中、熱い茶を欠かしたことがないからである。彼は無事に戦地からもどつては來たが、ただ手足にリューマチの痛みを覚えるようになつた。それからこつち、彼のなめた苦労はひと通りではなかつた。家に帰つてみると——年とつたおやじはなくなつていた。せがれも四つの年で、のどの病でやはり死んでいた。セミヨーンは女房とたつた二人きりになつた。暮らし向きもうまく行かなつたし、第一あのむくみのきた手足で地面を耕すのはもともと無理だつた。二人は自分の村にいたたまれないことになつて、新しい土地へいいとこを捜しに出かけた。セミヨーンは女房を連れて、国境の方へも行つてみたし、ヘルソーンにも、ド

ン地方にもしばらく足をとめてみた。どこへ行つてもいい芽は出なかつた。とうとう女房は下女奉公に出て、セミヨーンはいかわらずそこらを流れ回つていた。

あるとき汽車で旅することになつたが、とある駅に停車したとき、そこの駅長がどうやら見覚えのある人のような気がした。セミヨーンが駅長をじろじろ見ていて、向こうでもやはりセミヨーンの顔をじつと見ている。やがてお互に思ひ当たつた。もといた連隊の将校だつたのである。

「おまえイバーノフじゃないか？」と相手は言つた。

「はつ、そりなんであります、だんな様。わたしなんであります。」

「なんだつてこんな所へやつて來たんだね？」

セミヨーンはこれこれしかじかでと、身の上をうち明けた。

「で、これからどこへ行こうというのかね？」

「それがわからんのであります。」

「なにを ばかな なぜわからんのか？」

「はつ、そりであります、だんなさま。つまり行くところがないんであります。何か仕事をみつけなくてはならんのであります。」

駅長はじつと彼を見て、しばらく考えていたが、やがてこう言つた。

「なあどうだね、当分この駅にいることにして見ちやあ。お前たしか女房があるはずだな？ 女房はどこに置いてある？」

「はつ、そうであります、女房がありますんで。女房はクールスク市の商人の家に下女奉公に行つております。」

「じゃあ女房に手紙を出して、こっちへ来るようになつてやれ。無賃乗車券をなんとかしてやろう。こここの線路番の小屋が一つあくことになつてるんだ。すぐおまえのことを保線課長へ申請してやるとしよう。」

「ほんとにありがとうございます、旦那（だんな）様。」とセミヨーンは答えた。

彼はそのまま駅に足をとめた。駅長の家の勝手仕事をたすけたり、まきを割つたり、構内やプラットホームのそうじをしたりした。二週間すると女房もやつて來たので、セミヨーンは手押しのトロッコに乗つて、自分の番小屋へ行つた。番小屋はまだ新しくて、暖かで、まきときたら望みほうだいあるし、野菜畠も小さいながら前の線路番の残していつたのがある。五〇アールからの耕地も線路の両側にあつた。セミヨーンはうれしくなつてしまつた。どんな具合に所帯をもつていこうか、雌牛や馬の一匹も買おうか、などと考えはじめた。

必要な物品はのこらず支給された。青旗、赤旗、手ぢようちん、呼子、ハンマー、止めねじを締めるスパンナ、鉄

(かな)てこ、シャベル、ほうき、ねじくぎ、犬くぎ、それからまた鉄道規則ののつている薄い本が二冊に、列車時間表も渡された。はじめのうちセミヨーンは夜の目も寝ずに、時間表をすっかり、暗記するのだった。列車が通るまでまだ二時間も間があるので、自分の受持区間をひとり回りしたり、番小屋の前のベンチに腰かけて、レールが震動してきはしないか、汽車の音はまだしないかと、たえず目や耳を働かせていた。規則もすっかりそらで覚えてしまった。読む方は不得手で、どうにかつづりをたどりたり読む程度だったが、それでもちやんと暗記してしまった。

それは夏のことだった。仕事はつらくはなかつたし、雪をかく世話もいらなかつた。それにまたこの線には列車がめつたにはいつてこないので、セミヨーンは一昼夜に二度ずつ自分の受持区間を見回つて、そこここの止めねじを当たつてみたり、ゆるんでいると見れば締め上げたり、じやりを平らにならしたり、水管の具合を調べたりして、それから畠のめんどうを見にもどつてくる。ところが畠のことになると、やつかいなことが一つあつた。というのは、何事にまれやろうと思うことはいちいち、線路監督に願い出なければならなかつた。その監督から保線課長へ報告を出すというわけで、願いが許可になつてもどつてくる内には、時期が過ぎてしまうのだった。セミヨーン

夫婦はだんだん退屈にさえなつて來た。

二月ほどの時がたつた。セミヨーンは両隣りの線路番と顔なじみになりだした。一人はよぼよぼのじいさんで、鉄道の方では前々から更迭をもくろんでいた。ほとんど小屋から出たことはなく、細君が代わりに線路の見回りをしていた。もう一人の、駅に近い方の小屋にいる線路番は、まだ若い男で、やせてこそいるけれど筋骨たくましかつた。彼とセミヨーンとが初めて顔を合わせたのは、見回りのとき、お互いの小屋の中ほどの線路の上でだつた。セミヨーンは帽子をとつて、お辞儀をして、

「（ハ）きげんよろしゅう、お隣りさん」と言つた。隣りの男は横目でじろりと彼を見て、

「こんちは」と言つた。

そしてくるりと背中を向けると、すたすた向こうへ行つてしまつた。そのあとで女房同士も互いに顔を合わせる機会があつた。セミヨーンの女房のアリーナは、隣りの細君とあいさつをかわしたが、向こうはやはりあまり日数をきかないで、さつさと行つてしまつた。セミヨーンもあるときその細君を見かけたので、

「ねえおかみさん、あんたのご亭主はどうしてあんなに無口なんですね？」と言つてみた。

女房はちよつとだまつていたが、やがてこう言つた。

「けどね、いつたい何をあの人があまえさんとおしゃべ

りすることがあるの？　だれだつてみんな自分の仕事が  
あるんだもの……おまえさんも帰つて仕事をしたがいい  
でしょ。」

とはいえ、それから一月もすると、二人は懇意になつた。セミヨーンとワシーリイは線路の上で落ち合ふと、土手の縁に腰をおろして、互いにパイプをふかしながら、めいめいの身の上話をするのだった。ワシーリイの方はどうちかというと聞き役で、セミヨーンが自分の村のことや戦地のことを、話してきかせた。

「こう見えても」と、彼は言うのだった。「おれもずいぶんと苦労してきたものさ、それに老い先ももう長くはねえんだ。つまりおれは、仕合わせを授からなかつたのさ。いつたん神様がある運勢をその人にお授けなすつた以上は、もうそれつきり動かしようもないんだ。まったくよ、なあワシリイ・ステペーヌイチ。」

するとワシリイ・ステペーヌイチは、パイプを線路の端でぽんとはたいて、立ち上がつてこう言う。

「うんにや、おまえやおれの一生をだいなしにするのは、運勢なんてもんじやない、人間どもなんだ。まったくこの世の中に、人間ほど強欲で性（じよう）の悪い獣はないよ。おかげは共食いなんかしないが、人間ときた日にや生き身の人間をぼりぼり食うんだ。」

「いいや兄弟、おかげは共食いをやるぜ、そんなこと

言うもんぢやないよ。」

「ひょいと口に出たんで言つたまでよ。とにかく人間くらゐむごい生き物はないぜ。これで人間が性悪（しようわる）でも強欲でもなかつたら、おいらの暮らしも立とうになあ。見ねえ、どいつもこいつもおまえの生き身につめを立てようとねらつてるんだ、肉をはぎとつてくらいつこうときばをといでるんだ。」

セミヨーンは考え込んでしまつた。

「おれにやわかんないけどね、兄弟」と彼は言う、「ひょっとしたらそうかもしれない。だがもしそうとすりや、それにはそれで、ちゃんと神様のおぼし召しがあるんだあね。」

「だがあもしそうとすりや」と、ワシーリイは相手のことばじりをとつて、「おいらがこうして話することもいらぬわけだ。胸（むな）くその悪いことは残らず神様に背負わしちまつて、おでまえはすわり込んでじつと辛抱してるんなら、そいぢやあもう兄弟、何も人間様でいることはいらない、畜生で結構だ。おれの言いたいのはそいだけよ。」

と言ひ捨てて、くるりと背中を向けると、あばよ、とも言わずに行つてしまつた。セミヨーンも立ち上がつた。

「おうい隣りの人」と大声で、「なんだつてそう悪態をつくんだい？」

隣りの男はふり向きもせず、ずんずん行つてしまつた。

セミヨーンはそのまま、ワシリーリイの姿が切り通しの曲がり角に見えなくなるまで、長いことじつと見送つていだ。家へ帰つてくると、女房にこう言つた。

「なあ、アリーナ、おいらの隣りのやつあ、ありや悪玉だぜ、人間じやないよ。」

とはいえ二人は仲たがいをしたのではなかつた。そのうちまた顔を合わせると、あいかわらず話をしだしたが、話の題目は同じことだつた。

「ええ兄弟、もし人間どもがこうも……なんでなかつたら、お互に番小屋なんぞにくすべらないでもすんだんだぜ」とワシリーリイは言つた。

「番小屋がどうだと言うんだね……結構、暮らしていけるじやないか。」

「暮らしていける、ふん暮らしていけるか…。だめだなあ、おまえは！ いろんな世渡りをしてきたくせに、さつぱり世間というものがわかつちやいない。いろんなことを見てきたくせに、さつぱり正体が見えちやいない。貧乏人というものは、ここのらの番小屋にいようがいまいが、どつちみち人間らしい暮らしへできないんだ！ そこのらの大食い鬼どもに、おまえは食われてるんだぜ。生き血のありつたけをしぶつちまつて、おまえが老いぼれになつてくると——まるで油かすか何かみたいに、ぽいと

豚のえさにくれちまうんだ。おまえ、給料はいくらもらつてるね？」

「うん、たいしたこともないさ、ワシーリイ・ステパー  
ヌイチ、十二ルーブルだよ。」

「おれは十三ルーブルと半分だ。そこでお伺い申すが、こりやいつたいどうしたわけだね？ おかみの規則じやだれかれ問わず一律に、月十五ルーブルの手當てに、まさや油がつくことになつてゐるんだ。いつたいだれが、おまえが十二ルーブルでおれが十三ルーブル半だと、そんな決め方をしたんだ？ ええ、伺いたいもんだね？ ……だのにおまえは、暮らしていけるとおつしやるんだ！ 断わつておくけど、高が一ルーブル半だの三ルーブルだのことを、かれこれ言うんじやないんだぜ。十五ルーブルまるまるくれたにしたつて同じことなんだ。おれは先月、停車場に行つたつけがね、そこへ局長が汽車で通りかかつたのを、おれはこの目で見たんだ。まあ拝んだというわけかな。やつこさん、別仕立ての客車に納まつてたが、やおらプラットホームに降り立つて、そつくり返つていった。下つ腹によ、金ぐさりかなんかちやらつかせてよ、ほつぺたなんざ、まるではちきれそうに、いい色しているんだ。……えい、くそ、力どご威光がありさえすりや！ ……まさか、おれがここにいるのも長いことじやないぜ。出て行くんだ、足の向く方へな。」

「出て行くつてどこへ行くんだね、ステパーヌイチ？

あんまり上を見るところくなことはないぜ。」『』にいりや、おまえ、家もあるし、暖かだしさ、小さいながら畠地もあるんだ。それにおかみさんは働きもんだしさ……。」

「畠地だと！まあおれんとこの畠を見てから言つてくれ。枯れ枝一本立つちやいないんだ（この春キヤベツを植えたんだがね、するとたちまち監督のやつが飛んできて、『こりやなんということだ？』とこうなんだ。『なぜ願い出んのか？なぜ許可を受けんか？根こそぎそつくり掘り返してしまえ。』やつこさん酔っぱらつてたんだ。これがしらふのときだつたら、見て見ぬふりですましたに違いないのに、その時は妙にいこじになつてね……『三ルーブルの罰金だ！……』ときた。』

ワシーリイは口をつぐむと、パイプを一た吸い二吸いしたが、やがて小声で、「すんでのことと、あいつ死ぬほどぶちのめしてくれるとこだつたよ。」

「なあ、隣りの人、なんぼなんでもおまえさんは気が早すぎるよ。」

「気が早いんでもなんでもないさ、ただ筋の通つたことを言つたり考えたりするまでよ。まあそのうちにきっと返報はして見せるぞ、ゆでだこめ。保線課長へ直訴してやるんだ。今に見ろよ！」

そして、実際彼は直訴をしたのである。

あるとき保線課長が線路の検分にやつて來た。もう三日すると、ペテルブルグのお偉い方々がその線を通過するはずだつた。それが検閲という触れ込みなので、その一行の通過に先だつて、万事きちんとせいとんしておく必要があつたのだ。砂利を敷き足し、きれいにならし、まくら木をいちいち検査し、犬ぐぎを打ち直し、止めねじを締めなおし、くいは塗りかえ、踏切りには黄色い砂をまき足すようにとのお達しが出た。隣りのおかみさんまでが、例のじいさんを草取りに追つ立てる騒ぎだつた。セミヨーンはまる一週間せつせと働いた。線路の方がすっかり片づくと、自分の長上衣のほころびも繕（つくろ）い、きれいにブラシをかけて、 shinchiryū のきしようはれんがでもつて、ぴかぴかになるまでみがき上げた。工夫が四人がかり働いた。課長がトロツコでやつて來た。工夫がかりでハンドルを回して、歯車がブンブンうなつていた。そのトロツコで一時間に二十露里もぶつ飛ばすので、ただもう車輪がゴーゴー鳴つていた。セミヨーンの小屋の前へすつ飛んできた。セミヨーンはそこへとんで出て、軍隊式に報告をした。

万事遺漏（いろいろ）のないことがわかつた。

「おまえ以前からここにあるのか？」と保線課長はきいた。

「五月の一日からであります、閣下。」

「よろしい。」苦労じやつた。して百六十四番の小屋はだれかな？」

線路監督は同じトロツコで随行していたが、それに答えて、

「ワシーリイ・スピリドーノフでござります。」

「スピリドーノフと、スピリドーノフと……。ははあ、去年君が注意人物じやと言うておつた、あの男だな？」

「さようござります。」

「ふむ、よしよし。そのワシーリイ・スピリドーノフの方を見よう。出せ。」

工夫たちはハンドルにしがみついた。トロツコは先へ進んで行つた。

セミヨーンはその後ろを見送りながら、こう考えた、『こいつあ あの連中、隣りのやつとひともんちやくおこそぞ。』

それから一時間ほどすると、彼は見回りに出て行つた。すると向こうの切り通しのところから、線路づたいにやつて来る人影が見えた。頭の辺に何やら白いものがちらちらしている。セミヨーンが目を凝らして見ると、それはワシリイだつた。つえを片手に、小さな包みを肩にかけて、片ほおには布ざれを巻きつけている。

「隣りの人、どこへ行こうってんだね？」とセミヨーンは呼びかけた。

ワシリイはすぐ鼻先へやつて來た。まるで顔色はなく、白墨（ぼく）のようにならなかった。目は獸のようにぎらついていた。口をききだすと——声はどぎれがちだつた。

「町へ行くんだ」と彼は言つた。「モスクワへ行くんだ

……本省へな。」

「本省へ……。うん読めた！　じゃあ訴えに行くんだね？　よしなよ、ワシリイ・ステペーヌイチ、忘れちまえよ……。」

「うんにや、兄弟忘れるわけにはいかない。忘れるにやちと手おくれなんだ。見ろ、あいつおれのつらをなぐつたんだ、こうして血まで出しやがつたんだ。生きてる限りは、忘れるわけにや行かない、このままますますわけにや行かないんだ！　吸血鬼（き）め、思い知らせてやらにやおさまらない……」

そう言う彼の手をセミヨーンは取つた。

「やめにしろよ、ステペーヌイチ。おれは悪いことは言わない、そつとしどくが身のためだぜ。」

「何が身のためだ！　そつとしどくが身のためだぐらいおれだつて百も承知だ。お前は運勢のことと言つてたつてが、今になつてみりやなるほどと思ひ当たらあ。みすみす身のためにやならないと知りながら、正義のためにや、兄弟、やつぱり一步もひけないものなあ。」

「だがまあ聞こうじゃないか、いつたいどうしてそん

なことになつたんだね？」

「うん、どうしてって……。あいつめ何から何まで検査したんだ。わざわざトロツコを降りて、小屋の中までのぞいたんだ。てっきり小やかましいことを抜かすだらうとは、こつちも覚悟のまえだつた。だから万事手ぬかりなくせいとんしといたのよ。そこでまあ無事にトロツコへおもどりになろうとした矢先に、おれが例の直訴をもち出したというわけさ。いや やつこそん、聞くが早いが 鳴り立てたぜ。『いやしくも』つて言うんだ、『おかみの検閲があるというのじやぞ、それをなんというやつだ。野菜畑の不服なんぞを持ちだすとは！』と、こうなんだ、『三等官の方がたがお見えになるというんじやぞ、それをおまえはキヤベツのことなんぞをつべこべ言いおる！』おれは腹をすえ兼ねて、つい、いやがらせを言つてしまつた。なあに、別にたいしたことじやないんだがね、それが妙にやつこそんの気にきわつたんだな。いきなりぶうんとげんこが飛んできた。おれたちのがまんなんぞ、くそいまいましい！ これでもこらえろつてのか……おれはじつと歯を食いしばつていた、そうされるのが理の当然だといつたふうにな。やつらが行つてしまふと、おれははつと気がついて、顔の血をふくと、こうして出かけて来たのよ。」

「で、小屋の方はどうするつもりだい？」

「女房が残つてゐる。あれが抜け目なくやつてくれるよ。それにやつらがどうなるうと、やつらの線路がどうなるうと、おれの知つたことじやない！」

ワシーリイは立ち上がり、身じたくをした。

「あばよ、イワーヌイチ。訴えが聞き届けてもらえるかどうか、わかんないけどなあ。」

「おまえさん歩いて行くつもりかい？」

「停車場で貨車に乗つけてもらうつもりだ。あすはもうモスクワさ。」

隣り同士は別れを告げた。ワシーリイはそのまま出かけて行つて、なかなかもどつてはこなかつた。女房は彼の代わりに、昼はもとより夜の目も寝ずに働いた。亭主の帰りを待ちわびて、げつそりやつれてしまつた。三日目になると検閲の一行がやつて來た。機関車に手荷物車が一両、それに一等車が二両ついていた。だがワシーリイの姿はあいかわらず見えなかつた。四日目にセミヨーンは、彼の女房を見かけた。顔を泣きはらして、まつかな目をしていた。

「ゞ」亭主はもどりなすつたかね？」ときいてみた。

女房は片手を振つて見せると、ひと言も口をきかずに、自分の小屋の方へ行つてしまつた。

セミヨーンは、その昔、まだ、がんぜない子どものころ

に、さるやなぎの枝で笛を作ることを習い覚えていた。やなぎの枝のしんを焼きぬいて、要所要所にきりで穴をあけ、一方の端に歌口をこしらえると、みごとに音色をとのえて、なんなりとお望みの曲が吹けるように仕上げるのだった。彼は役目の暇々（ひまひま）にそうした笛をたくさんつくつて、懇意な貨物列車の車掌にたのんで、町の市場へ出してもらっていた。一本あたり二コペイカのおあしになつた。あの検閲があつて三日目に、彼は夕方六時の汽車の見張りに女房を小屋にのこして、自分は小刀をもつて、やなぎの枝を仕入れに森へ出かけた。受持区域のはずれまで来ると——そこで線路は急カーブをしていった——彼は土手を降りて、森の木の間をだらだらとおりていった。半露里ほど先に大きな沼があつて、そのほとりに例の笛の材料にはおあつらえむきのみごとなさるやなぎのやぶがあつた。彼は一かかえほども枝を切ると、そのまま家路についた。森の中をわけていく。日はもう西に傾いて、あたりはひとつそりと死んだような静かさ。聞こえるのはただ、チチと呼びかわす鳥の声と、足もとに踏みしだいてゆく枯れ枝の響きだけだった。それから少し行つて、間もなく線路の土手に出るというあたりで、何かほかの物音が聞こえるような気がした。どこかそこらで、鉄と鉄とがかすかに打ち合うような音だつた。セミヨーンは足を早めた。その日ごろ彼らの受持区間に修理は行なわれ

ていなかつた。『あの音はなんだろう?』と心に思つた。やがて森のはずれへ出ると、目の前は、見上げるような鉄道の土手だつた。その土手の上に一人の男がしゃがみ込んで、しきりに何かやつていた。セミヨーンはそつとその男の方へ登つていつた。どこかのやつが止めねじを盗みに来たんだなと思つたのだ。じつと見ていると、やがて男は立ち上がつた。手には鉄(かな)てこを握つていた。つまり、鉄てこでもつてレールの床(とこ)をゆるめて、はずれるようにしたわけだ。セミヨーンは目のなかが暗くなつてしまつた。わめこうとしたが、声が出なかつた。それがワシーリイだと見てとると、彼はいつさんにかけあがつたが、相手は鉄てことねじ回しをかかえたまんま、土手の向こう側からまりのようにころげ降りてしまつた。

「ワシーリイ・ステ・ペーヌイチ! お願ひだ、いい子だからもどつてきてくれよう! 鉄てこを貸してくれよう! レールを直すんだ。だれにも知れやしないんだ。もどつてきてくれ、畜生道へ落ちないでくれよう。」

ワシーリイはふり向きもせずに、森の中へ逃げ込んでしまつた。

セミヨーンは、はずされたレールのそばにつつ立つていた。かかえていた枝束をどさりと落とした。今度の列車は貨物ではなくて客車なのだ。停車させようにも手立てがなかつた。旗がないのである。レールを元通りに直そう

にも、素手（すで）では犬くぎも打てはしない。こうなつたら駆けだすほかはない。何か道具をとりに小屋へ駆けつけるほかはない。神様、お助けください！ セミヨーンは自分の小屋をさして走った。息ざれがする。それでも走つた——へたへたと今にも前へつんのめりそうになる。やつと森を駆け抜けて、ありがたや、小屋まではもう一一百メートルそこそこだと思つたとたんに、ふと耳に工場の汽笛の鳴るのが聞こえた。六時だ。六時二分には列車が来る。ああ神様！ 罪なき人々の命をお救い下さい！ 祈るひまにもセミヨーンの目にまざまざと浮かぶのは、機関車が左の車輪をレールの切れ目に引っかけて、ぐんと一とゆれ、たちまち横へかしいで、まくら木をけやぶり、木っぱみじんにはね散らす光景だ。おまけにあそこはカーブだ、曲がり角（かど）なのだ、それに高い土手をしている。列車はあわやという間もなく、二十メートルもの谷底へさか落としだ。その三等事には、ぎっしりとすしづめの客、なかにはいたいけな子供もいよう……。それがみんな、今、一寸先の危難も知らずにすわつてているのだ。神様、どうすればいいのかお教えください！……ああもう遅い、小屋へ駆けつけてそれから現場へもどつたんじや、とても間に合わない……。

セミヨーンは小屋まで駆けつけぬうちに、くるりと後ろ向きになると、前よりいつそその速力で駆けだした。ほ

とんど無我夢中で、この先どうなることやら自分でも知らずに、ひた走りに走つた。はずされたレールのところへ駆けもどつてみると、例の枝がうず高く散乱していた。彼は身をかがめて、その一本を引つつかむと、なんのつもりかは自分も知らずに、そのまま先へ駆けだした。もう列車の近づく気配がしていた。はるかに汽笛の音がきこえ、レールがかすかに規則正しい震動を伝えはじめていた。もうそれ以上は走る力がなかつた。彼は恐ろしい場所から二百メートルあまりの所で立ちどまつた。その時ふと、一条の光明がさつと頭にひらめいたのである。彼は帽子をぬぐと、その中からもめんのハンカチを取りだした。それから長ぐつの胴へ手を入れて、小刀を取り出した。そして十字を切つた、——『主よ、恵みたまえ！』と。

その小刀を彼は、やにわに、自分の左の二の腕へつつ刺した。血はさつと吹きでて、熱い流れをなしてほとばしつた。彼はその血潮にハンカチをひたして、しわをのばしてひろげると、枝の先にゆわえつけて、わが血に染めた赤旗をかかげた。

彼はつっ立つたまま、その旗をしきりに打ち振る。汽車はもう見えていた。旗は機関手の目にはいらぬと見え、ぐんぐん汽車は近づいてくる。ここまで来たらもう最後だ——一百メートルあまりの距離では、あの重たい列車が止められるものか！

血はあとからあとから吹きでてくる。セミヨーンは傷ぐちをこわきへ押しつけて、口をふさがうと思つたが、血はいつかな止まらない。どうやら腕を深く切つたとみえる。そのうちにめまいがしてきた。目のなかに黒い点の影がちらちらし出したかと思うと、やがて真のやみになってしまった。耳の中ではガンガンとしきりに鐘が鳴る。彼にはもう汽車の姿も見えず、そのとどろきも聞こえない。頭にうずまく考えはただ一つ『もう立つてはおられぬ、おれは倒れる、ああ旗が落ちる。あの汽車はおれのところを走り抜けるんだ……お助けください、主よ、だれか代わりを早く……。』

と思ううちに目のなかは暗くなりだし、心はうつろになつて、彼は旗をとり落とした。しかし血染めの旗は地面へ落ちはしなかつた。何者かの手がむんずとそれをひつつかむと、ゴーゴーと近づいてくる列車に向かつて高く振り上げたのだつた。機関手はそれを認めて、調整器の弁をとじると、蒸気を切りかえた。列車は止まつた。

車室からどやどやと飛び出してきた人々が、たちまちまわりに黒山をきずいた。見ると、全身あけに染まつた男が、気を失つて倒れていた。もう一人の男はそのそばに、血だらけのぼろ布のついた棒を握つてたたずんでいた。

ワシーリイはぐるりと一同を見回すと、そのまま首をおとして、

「わたしをしばつておくんなさい。」と言つた。

「わたしがレールをはずしたんだ。」

(岩波文庫「赤い花」による)

## 二 モーツアルト

樂聖（せい）、モーツアルトの名は、世界各国に知れわたつてゐる。神童ということばがあるが、彼こそ、このことばにぴつたりあてはまる人であろう。

モーツアルトが生まれたのは、一七五六年一月二七日、オーストリアのザルツブルグという町である。父親は、ザルツブルグの宮廷（てい）オーケストラのバイオリニストとして才能の豊かな人であった。

モーツアルトは、小さいころから、音楽的環境に恵まれていたので、いつの間にか、音楽的感覺が育つていつた。家でオーケストラの練習があると、何時間でも、じつときいていたし、姉のピアノのけいこの時は、そのそばを離れなかつた。三才の時、だれにも教えてもらわないので、姉のひいていたメヌエットを初めから終わりまでひき通して父を驚嘆させた。

父は、モーツアルトの才能を知つて、この子をりっぱな音楽家にすることは、自分に与えられた使命であると思ひ、どんなせいをも払おうと決心した。

モーツアルトは、非常に覚えが早くて、短い曲で三十分、長い曲でも一時間あれば完全に覚えてしまうほどであつた。五才のときには、作曲もして、父や父の友人たちをびっくりさせた。おとなでも簡単にできないことが、たつた五才の子どもにどうしてできるのか、人々はふしぎがつた。

六才から七才のころに、メヌエットやピアノ三重奏（そういう）曲なども作曲した。六才（一七六二年）の時、家族と共に、音楽の都ウィーンへ旅行した。そのころ既に天才ため音楽家モーツアルトの名はウィーンにも広まつていて、方々の上流家庭から招かれて演奏した。フランス王室からも招かれ、そのみごとな演奏は、王家の人々を感嘆させ、モーツアルトは、非常なお気に入りとなつた。特に王女のマリー・アントワネットは、モーツアルトに対して、きょうだいのような親しみをもつた。

次の年、フランスへ旅行し、パリで行なつた演奏会は、非常に好評であつた。さらに、その翌年、イギリスに旅行した。ロンドンでも歓迎されたことはいうまでもなく、宮中には三回も招かれて、御前演奏をしたほどであつた。王家の楽長は、ヨハン・セバスチアン・バッハであった。バッ

ハは年少なモーツアルトの才能に心をひかれ、いつしょにピアノをひいたり、作曲法を教えたりした。ここでモーツアルトは、はじめて交響曲を作った。ロンドンで一ヵ年ほど過ごすうち、過労のため病気になり、オランダで静養することになった。その間も、交響曲やバイオリン・ソナタなどの作曲を続けた。やがて健康をとりもどしたモーツアルトは、パリ、リヨン、ジュネーブ、ローザンヌ、ベルンなどの大都会で、次々と演奏会を開き、その間にも作曲を続けながら旅行し、故郷のザルツブルクに帰った。その間、一方で王侯（こう）とか貴族の名士などと交際したことは、十才の幼い少年にとって、どんなにか気苦労なことであつたろうと想像される。



〈六才のモーツアルト〉

モーツアルトは十三才の時、（一七六九年）、当時ヨーロッパの音楽の中心であつたイタリアに旅行した。この旅行で、モーツアルトは、多くの新しい知識や技術を得

た。そして彼は、ヨーロッパ第一の音楽家といわれるようになつたローマ法王のクレメント十四世は、十四才のモーツアルトに「黄金拍車の騎士」という名誉の位をさしつけ、十字くん章を贈つた。ボローニヤの市会では、満場一致で、モーツアルトを音楽協会の会員にすいせんした。モーツアルトは、法王からくん章をもつたことよりも、この方を喜んだ。なぜならば、この会員には、本当に優秀な音楽家でなければなれなかつたからである。

モーツアルトの天才的才能は、ますます冴（さ）えていつた。マントーバというところで、他人のチエンバロの協奏曲の譜をもらつて、すぐそれを初見（はつまみえ）で演奏したり、一つの曲を与えられると、その主題に、そくざに変奏をつけたり、歌詞を見て、それを作曲し、自分で伴奏（ばんそう）しながら歌つたりして、みんなを驚かした。また、ローマでは、シスチネ教会で、それまで門外不出の秘曲とされていたアレグリの「ミゼレーレ」の曲を二、三度きいただけで記憶し、それをほとんど完全に写しどつてしまつたという話は有名である。一七七一年三月に、彼はザルツブルグに帰つたが、この間にも、交響曲を五つ作つている。いづれもイタリア風の美しい曲である。モーツアルトは、十七才の時（一七七三年）ウィーンへ旅行した折、ヨーゼフ・ハイドンの音楽に心酔（しんすい）してその影響をうけ、彼の作風はだんだんドイツ風に変

わつていつた。一七七五年ころまでに、交響曲五、ピアノ協奏曲、ファゴット協奏曲、ピアノソナタ五番などを作曲したが、今日演奏されている作品のほとんど全部はこのころからのものである。この年の一月、モーツアルトのオペラ「にせの女園丁」がミュンヘンではじめて舞台にかけられたが、それは、大成功であつた。

ザルツブルグに帰つていたモーツアルトは、ザルツブルグ宮廷楽団の楽長を命じられた。彼は楽団の仕事をしたり、ピアノを教えたり、作品の発表会を行なつたりしていた。ところが、ザルツブルグで、人々から神のようにあがめられている宮廷の大司教は、モーツアルトを天才とはみとめず、彼の一家に冷たく当たつた。彼はがまんができず、職をやめて、一七七七年母と旅行にしてしまつた。モーツアルトは、外国で、自分の才能をもつとみがき、もつとのばそつと考へたからである。また、音楽を理解してくれる国に行つたら、よい職につけるだらうと考えていた。彼はドイツの各都市をまわり、後、パリに出たが、どこでも思うような職は与えられなかつた。しだいに生活は苦しくなり、おまけに母を失つた。この旅行は、彼にとってまことにさびしいものであつた。

モーツアルトは、若いにもかかわらず、あまりにも評判が高いので、それをねたんだ音楽家や作曲家たちは、いろいろ手段をもうけて、彼の歌劇の上演を妨害したり、わざ

わざ悪評を言いふらしたりした。しかし、彼の才能は、そんな苦境におかれても、ますます美しくみがかれていた。

二十六才（一七八二年）、かの有名な作曲家ウェーバーのめいコンスタンツエと結婚した。かの女は、おだやかな優しい人であったが、経済的観念にとぼしかったので、彼らはいつも貧困に悩まされていた。当時は、著作権法などが確立されていなかつたので、かれの作曲した歌劇が上演され、大入り満員を続けていても、作曲者のモーツアルトは、借金に苦しめられながら、暗いあかりの下で、作曲のペ恩を走らせているようなありさまであつた。ある時、



「フィガロの結婚」第二幕

友人が彼の家をたずねると、ストーブをたく石炭がなくて、ダンスをして寒さをまぎらしていた、というほどであつた。

三十一才（一七八七年）、モーツアルトはプラーヴへ行つた。そこでは、ボンディー＝ニというイタリア・オペラの一一座が、彼の作曲した「フィガロの結婚」を上演していって、ものすごい評判であつた。

そこで、彼が演奏会を開いたことはいうまでもないが、いつも満員で、舞台は花輪でいっぱいになつた。特に人々を喜ばしたのは、彼の即席演奏であつた。

一七八九年、四月から六月までベルリンに旅行した。この旅行では、モーツアルトの名声が高くなつたが、経済的にはよくならなかつた。その上、コンスタンツエは病氣になり、生活はますます苦しくなつた。

一七九〇年、モーツアルトは、フランクフルトで行なわれた皇帝レオポルド二世のたいかん式祝賀の音乐会を開こうとして、その町へ行つた。しかし、新しい皇帝にきらわれていたため、何一つ思うようにいかず、結局不成功に終わつた。このころから、モーツアルトの健康は急速にこなわれていつた。わずかな金を得るために、三カ月間に四十一曲もの舞曲をかかされたりした。このころには、もうだれひとり、この貧乏な音楽家を助けようとはしなかつた。

「ウィーン郊外の劇団主から頼まれて、作曲したのが「魔笛（までのき）」である。モーツアルトの最後の傑作、四幕のオペラである。その曲を作っているとき、灰色のマントを着た見知らぬ男の訪問をうけ「レクイエム（鎮魂（ちんこん）曲）」を書いてくれとたのまれた。レクイエムといふのは、死者のれいをなぐさめる音楽である。訪問者は帰りぎわに、この作曲の依頼者がだれであるかを調べてはいけないと言つた。実はある貴族からの使者であつたが、モーツアルトは、これを自分の死に対する神の招きであると考え、熱心に作曲にとりかかつた。しかし、体力が極度に衰えていた彼は、この曲を完成するまえに死んでしまつた。

一七九一年一二月五日、「魔笛」その他の作品は全部書きあげたが、この「レクイエム」だけ未完のまま、天上の人となつた。この曲は彼の死後、弟子のジュツスママイアーガ生前の彼の指示によつて完成したといわれている。

モーツアルトの葬儀には、数名の友人や、一二、三の弟子が集まつただけであつた。ちょうど雷雨が激しかつたため、墓地まで見送つた者はなかつたという。これが、かつて神童とうたわれ、王室や貴族の人々と交際していた、あのモーツアルトの最後とは、だれが想像したであろう。「魔笛」のすばらしさは諸国に伝わり、ハンガリーからは、かれの作曲に対して年金を送るといつてきた。オランダ

からも多額の賞金が出されることになつていたし、イギリスからは、よい仕事をすすめる手紙が来た。しかし、残念にも、それらはすべて間にあわなかつた。

モーツアルトの音楽は、当時のあらゆる様式を総合したようなもので、せんりつには深い情感があふれ、つねに新鮮であり、その和声は、洗練された美しさに満ちている。また楽曲の形式は、よくととのつていて、しかも深みがあるベートーベンの音楽には、みがきにみがいた構成のあとがみえるが、モーツアルトのは、自然に流れ出たものという感が強い。彼は、幸福な少年時代を別として、つなに生活苦とたたかいながら作曲したのであるが、その作品には明るい清らかさと自然さとがあふれている。

わずか三十五年の生がいに、歌劇一十数曲を作った。しかもこのうち、「フイガロの結婚」「ドン・ジョバンニ」「魔笛」は不滅の傑作である。交響曲、ピアノ協奏曲、バイオリン協奏曲、その他独唱曲など、数多くの名曲が残されている。

### 三 「」とばのきまり（その一）

#### 述語になる語

##### （述語）

（1） これはぼくの【本だ】。ほしいのは【こつち】だ。好きな学科は【数学】だ。

（2） ぼくは本を【読む】。きょうは非常に【暑い】。ここはまことに【静かだ】。

右の一の部分は、すべて述語ですが、（1）は「本・こつち・数学」とい名詞に「だ」という助動詞のついたものであるのに対し、（2）は、それぞれ単独で述語になつています。また（2）の一の単語は、「【読み】ます」、「【読め】ば」「【暑く】なる」、「【暑けれ】ば」「【静かに】話す」、「【静かなら】ば」のように活用します。「」のようには、活用があり、単独で述語になる単語を「用言」といいます。

##### （用言）

用言は、活用のしかたによつて、動詞、形容詞、形容動詞の三種類に分けられます。

「動詞」——言い切りがウ段の音で終わる。（書く・話す・立つ・ある・起きる・受ける・来る・する・作る）

(185.jpg) アンダーラインあり)

「形容詞」——言い切りが「い」で終わる。(遠い・ない・寒い・正しい・うれしい・楽しい・悲しい・深い)

「形容動詞」——言い切りが「だ」で終わる。(おだやかだ・きれいだ・はなやかだ・りっぱだ・積極的だ)

なお、動詞はおもに動作・作用・存在を表わし、形容詞、形容動詞は性質・状態を表わします。

「用言」は述語のほかに、単独で修しょく語にもなります。

(1) もう【読む】本がない。【美しい】月がかがやいている。かれは【静かな】人だ。

(2) 【読んで】覚える。星が【美しく】見える。かれは【静かに】暮らす。

右の(1)は、体言を修しょくするから「連体修しょく語」といい、(2)は用言を修しょくするから「連用修しょく語」といいます。

連用修しょく語になる場合、動詞は付属語を伴うのがふつうです。

### (活用形の用法)

用言の活用する語形は、ふつう次の六種に分けられます。

未然形——助動詞「ない・う・よう・れる・られる・せる・させる」などに続いて、打ち消しその他いろいろな意味を

表わす。◎ただし、形容詞・形容動詞は「う」だけに続く。  
連用形——助動詞「た・ます・たい」、助詞「て・たり・な  
がら」、他の用言などに続いて、いろいろな意味を表わす。  
また、単独で中止する用法（中止法）も受け持つ。動詞の  
連用形は、他の用言や体言などと結びついて、複合語をつ  
くり、また単独で名詞となることがある。形容詞・形容動  
詞の連用形は、単独で連用修しょく語となる。

### （中止法）

・【消え】、【浮かび】、そしてまた消えた（動詞）

・【美しく】、【深く】、そしてけだかい詩だ。（形容詞）

・【すなおで】、【正直で】、おだやかな人だ。（形容動  
詞）

動詞が複合語を作った例。名詞となつた例。

【読み書き】、【読みなおし】、【書きもの】、【届け書】、  
【申し込み人】（複合語）

・【読み】が早い。【話し】がうまい。【受け】がよい。

（名詞）

終止形——単独で文を言い切る。

助動詞「そうだ」、助詞「と・から・けれど」など  
にも続く。

連体形——動詞・形容詞の連体形は、終止形と同形である  
が、形容動詞では、ちがうので、別の活用形とみなす。

仮定形——助詞「ば」に続いて仮定の条件を表わす。形容動詞は「ば」を省くことが多い。

命令形——単独で命令（希望などもふくむ）の意を表わして言い切る。

形容詞・形容動詞はない。

（186．jpg 活用形表あり）

右の「書く」の「か」、「遠い」の「とお」「静かだ」の「しづか」の部分は、いつも形が変わらず、終わりの部分は変わります。この形の変わらない部分を、「語幹」といい、変わる部分を「活用語尾」といいます。

形容詞、形容動詞は、語幹と活用語尾との区別がはつきりしており、動詞には、その区別のはつきりしないものがあります。

### （動詞）

動詞は、（1）活用があり、その言い切りはウ段の音で終わる。

（2）すべての助動詞に続くことができる。

（3）連用形は名詞に転ずることがある。

（4）単独で述語、連体修飾語になり、付属語を伴なつて連用修飾語となる。

（5）主として動作、作用を表わすが「ある」「い

る」などは存在を表わす。

### 《活用の種類》

動詞は活用のしかたによって、次の五種類に分けられます。

#### 注

1、動詞の活用は、だいたい五十音図の一つの行に活用するので、「話す」はサ行五段活用の動詞、というように呼ぶ。

2、上（かみ）一段・下（しも）一段活用の場合、「き・み・け・で」が語幹の部分のように見えるが、もし、そこまでを語幹とすると、未然・連用形にあたる活用語尾がないことになる。そこで、「き・み・け・で」から活用語尾と認める。

3、「見る・出る・来る・する」は語幹と語尾との区別がない。

(187 · jpg) 【アンダーラインあり】

#### (五段活用)

五段活用の動詞は、すべて語幹と活用語尾との区別がはつきりしています。命令形の語尾は、エ段の音ですが、次の四語は「い」となります。

◎ いらっしゃる。おっしゃる。くださる。なさる。

これらは敬意を含む動詞です。（連用形は、「た」に続くときは「いらっしゃった。」「ます」に続くときは「いらっしゃいます。」となります。）

五段活用の動詞が、助動詞「た」、助詞「て・たり」に続く場合（連用形）には、次のような形になることがあります。このようなものを「音便」といいます。

・カ・ガ行……書【き】ます→書【い】た。

防【ぎ】ます→防【い】で。（い音便）

・タ・ラ・ワ行：勝【ち】ます→勝【つ】た。

取【り】ます→取【つ】て。（促（そ

### く）音便）

・ナ・バ行……死【に】ます→死【ん】だ。

飛【び】ます→飛【ん】で。（撥（は  
つ）音便）

なお、ガ・ナ・バ・マ行の動詞の場合には、「た・て・た  
り」が「だ・で・だり」となります。

### （上一段活用）

◎（1）語幹・活用語尾のあるものと、（2）その区別のないものとがあります。

（1）起きる 強いる 過ぎる 落ちる 滅びる 借り  
る

(2) 見る 射る 居る 着る 似る 煮る

### (下一段活用)

◎(1) 語幹・活用語尾の区別のあるものと、(2) その区別のないものとがあります。

(1) 捨てる たずねる 述べる 固める 見える

(2) 出る 得る 寝る 経る

### (力行変格活用)

「来る」は、語幹と活用語尾との区別がありません。

### (サ行変格活用)

「する」は語幹と活用語尾との区別がありません。「する」は、他の語と合わさって複合の動詞を作ります。

・うわさする おともする 勉強する 練習する 運動する スケッチする リードする

次の語は上一段に活用することもあります。

重んずる 軽んずる 先んずる 感ずる 禁ずる

生じる 信ずる

次の語は、五段に活用することもあります。

愛する 熟する 略する 服する 訳する

なお、未然形には「し」(ないに続く)、「さ」(れる、せるに続く)、「せ」(ぬに続く)の三つの形があります。

### (可能動詞)

字を【書く】一字が【書ける】。本を【読む】一本が【読める】。早く【走る】早く【走れる】。

右の例で、下側の動詞は、それぞれ「できる」(可能)と「いう意味をふくんでいます。このような動詞を、「可能動詞」といいます。可能動詞はすべて下一段活用です。ただし、命令形はありません。

### (自動詞と他動詞)

(188. jpg 活用表あり) アンダーラインあり

動詞の中には、語の中心をなす部分が共通で、しかも意味のうえで、それ自身だけのはたらきとして表わすものと、他に対するはたらきかけとして表わすものとの、たがいに対立するものがあります。そのうち、前者を「自動詞」といい、後者を「他動詞」といいます。他動詞は、一般に「……を」という目的語を必要とします。

戸が【あく】(力行五段) 氷が【くだける】(力行下一段)  
戸を【あける】(力行下一段) 氷を【くだく】(力行五段)  
気球が【あがる】(ラ行五段) こどもが【笑う】(ワ行五段)

気球を【あげる】(ガ行下一段) こどもを【笑う】(ワ行

水が【増す】(サ行五段) 水を【増す】(サ行五段)

右の例で、それぞれの右側が、自動詞、左側が他動詞です。活用のしかたを比較すると、変わるものと変わらないものとがあることに気づくでしょう。なお、自動詞と他動詞とが対応することがつかめると、動詞の送りがなをつけるのに都合のいいことがあります。

### 『活用図あり』

#### (形容詞)

形容詞は、(1) 活用があり、その言い切りは「い」で終わる。(2) 活用の種類は一つしかない。(3) 命令形がない。(4) 語幹が独立して用いられることがある。(5) 続く助動詞は、動詞の場合に比べて限られている。(6) 単独で述語・連用修飾語・連体修飾語になる。(7) 主として事物の性質・状態を表わす。

#### (括用)

### 『活用図あり』

### (音便)

形容詞が「～ざります・存じます」に続くとき（連用形）、次のようになります。これも「音便」といいます。その場合、語幹の一部に変化の起ることがあります。

暑い——あつ【う】びざいます。

強い——つよ【う】びざいます。

近い——ち【こ】うびざいます。

高い——た【こ】うびざいます。

楽しい——樂【しゆ】うびざいます。

かわいい——かわ【ゆ】うびざいます。

薄い——うす【う】びざいます。

よい——よ【う】びざいます。

浅い——あ【そ】うびざいます。

早い——は【よ】うびざいます。

うれしい——うれ【しゆ】うびざいます。

### (う音便)

### (形容動詞)

形容動詞の性質は、形容詞とほとんど同じです。ただし、次の点がちがいます。（1）言い切りが「た」で終わる。（2）終止形と連体形との形がちがう。（3）仮定形は、助詞

「ば」をともなわないで、仮定の条件を表わすことができ  
る。(4) 語幹が形容詞よりもさらに独立して用いられる。  
(辞書の見出しには語幹の形ででている。)

(189.jpg) 案ダーラインあり 活用表あり)

(活用)

『活用表あり』

連用形の三つの形は、次のように使い分けられていま  
す。

助動詞「た」などに続く――

【便利だつ】た 【すなおだつ】た 【きれいだつ】た

形容詞「ない」などに続く――

【便利で】ない 【すなおで】ない 【きれいで】あ  
る

「……で」の形で中止法をとる。

動詞「なる」などに続く――

【便利に】なる 【すなおに】なる 【きれいに】か  
ざる

(特別な形容動詞)

## 『活用表あり』

右の形容動詞は、名詞に続く場合、一般的の形容動詞とちがつて、連体形の活用語尾「一な」を除いて、語幹からすべてに続きます。ただし、「のに・ので」に続く場合には、その「一な」が現われます。なお、形容動詞をていねいに言う場合には、その語幹に助動詞「です」をつけて、次のようにいいます。

【静か】です 【のどか】です 【便利】です 【同じ】です  
【こんな】です。

(形容詞と形容動詞とで語幹が同じもの)

## 『活用図あり』

(用言の語幹の用法)

動詞の語幹は、独立して用いられませんが、形容詞、形容動詞の語幹は独立して用いられることがあります。

(1) 語幹で終止する。(感動の気持ちを表わす)

おお、【こわ】(こわい) あつ、【いた】(痛い) まあ、  
【きれい】(きれいだ) 【みどり】と、【みどり】と (みどりとだ)  
あら、【すてき】(すてきだ)

(2) いろいろな語と合して複合語を作る。

- ・【近】道 【うれし】涙 【きれい】「」と 夜【長】(名詞)

・【遠】のく 【近】づく 【長】びく (動詞)

(190. jpg 【】アンダーラインあり)

- ・【うす】暗い 【暑】苦しい 【青】白い、【あま】ずっと  
ぱい (形容詞)

(3) 接尾語がついて他の品詞となる。

- ・【暑】さ 【甘】み 【かわい】げ 【眠】け 【正確】さ  
(名詞)

・【痛】がる 【うれし】がる (動詞)

(4) 語幹を重ねて副詞となる (程度を強める。)

・長々 (と) 広々 寒々 軽々 青々

〈名詞を重ねると複数、動詞を重ねると継続する意を表わす〉

人々 国々 読み読み ながめながめ

(5) 助詞「の」をともなって連体修飾語となる。

(ただし、文語ふうな言い方)

・なつかしのメロディ (補助用言)

(1) 暑く 【ない】 楽しく 【ない】 静かで 【ない】

(2) 本を読ま 【ない】 早く走ら 【ない】

右の(1)の「ない」と、(2)の「ない」とでは性質がちがいます。(1)の「形容詞+ない」、「形容動詞+ない」の

場合には、「暑く【は】（も）ない」「楽しく【は】（も）ない」「静かで【は】（も）ない」などと、間に助詞の「は（も）」をはさんで言えるのに対しして、（2）の「動詞+ない」の場合には、間に「は（も）」をはさむことはできません。そこで、動詞に続いた「ない」は付属語（助動詞）とし、形容詞、形容動詞に続いた「ない」は自立語（形容詞）とするのです。

ところで、（1）の場合の「ない」は形容詞ですが、では、次の（3）の場合の「ない」と、まったく同じといえるでしょうか。

（3）さがしたけれども、どこにも【ない】。【ない】ものを、いくらさがしても、むだだ。

（3）の「ない」は本来の形容詞の意味に用いられていますが、（1）の「ない」は、本来の形容詞の意味からはなれて、上にある形容詞・形容動詞を打ち消す意味に用いられています。助動詞に近くなった用法ともいえます。

この（1）の「ない」のようなものを「補助用言」といいます。

来る—ちょっと行って【くる】。

あげる—この本を読んで【あげる】。

行く—木の葉が散つて【いく】。

もらう—父に本を買って【もらう】。

置く——ニュースだけ聞いて【おく】。

しまう——時間で読んで【しまう】。

言う——これと【いう】話もない。

見る——ためしに聞いて【みる】。

居る——花がさいて【いる】。

いらっしゃる——新聞を読んで【いらっしゃる】。

有る——これは本で【ある】。

花がきれい【ある】。

補助用言を含む文節は、上の文節と合わさって、一つの文節と同じはたらきをします。すなわち、上の文節と合わさせて文の成分となるのです。

◎補助用言は、かな書きにするのがふつうです。

(191.jpg~196.jpg 漢字一覧表)

元文部省図書監修官

監修林実元

(在東京)

編集執筆(A B C順)

古野菊生  
二木秀人

加藤千永子

岡崎親  
坂田忠夫  
武本由夫

表紙・挿絵

ジ・プレツテ・ダニロ

星ルリ子

日本語（11）

中級用

一九六六年 四月一日 印刷  
一九六六年 四月 五日 発行

著作者 日伯文化普及会

日本語教科書刊行委員会

発行者 日伯文化普及会

ブラジル、サン・パウロ市サン・ジョアキン街三八一

印刷者 株式会社 帝国書院

代表者 守屋紀美雄

東京都千代田区神田神保町三ノ二九

発行所 日伯文化普及会

ブラジル、サン・パウロ市サン・ジョアキン街三八一